

観 音 丸 遺 跡
向 野 古 墳 群
三 船 山 遺 跡

圃場整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告 1

福岡県文化財調査報告書

第 7 1 集

1 9 8 5

福岡県教育委員会

觀 音 丸 遺 跡
向 野 古 墳 群
三 船 山 遺 跡

福岡県文化財調査報告書

第 7 1 集

福岡県教育委員会

序

県営圃場整備事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査は、昭和46年度の朝倉町宮野地区が最初であり、当時は年に2、3件程度の調査で済んでいたのが最近では10数件を越えるようになりました。これは圃場整備の事業量と深く係っていますが、福岡県における圃場整備の実施率は37.6%と低く、今後に多大の事業量をひかえています。

増大する事業に対応するため、昭和57年度からは「圃場整備事業に伴う文化財の分布・試掘調査」を新たに、国庫補助事業として実施しました。そして、事前の試掘調査結果をもとに農政部と協議を行い、文化財の保護と圃場整備事業との調整を図っています。

この報告書は、昭和57年度の三潞郡大木町観音丸遺跡、58年度の三潞郡三潞町向野古墳群・山門郡瀬高町三船山遺跡の発掘調査の記録であります。

発刊にあたり、試掘・発掘調査に御協力を頂いた関係各位、市町村教育委員会ならびに地元の方々に対し、感謝の意を表します。

昭和60年3月31日

福岡県教育委員会

教育長 友野 隆

例 言

1. 本書は、圃場整備事業に伴う試掘調査として福岡県教育委員会が国庫補助を受けて実施したものの調査報告書である。
2. 調査したもののうち、昭和57年度では大木町所在の観音丸遺跡、58年度では瀬高町所在三船山遺跡、三潴町所在向野古墳群を掲載した。
3. 遺物の整理は福岡県教育委員会岩瀬正信氏の指導のもと九州歴史資料館で行った。写真撮影は遺構を川述昭人、池辺元明、遺物は九州歴史資料館の平島美代子氏が撮った。遺物の実測は川述が行い、Ⅳ―3の石器を木下修、Ⅳ―3の土器は平田春美、原富子、林真里子氏の援助を得た。製図は豊福弥生氏にお願いした。
4. 本書の執筆はⅠ～Ⅳ―1・2を川述、Ⅳ―3・4を池辺、Ⅳ―3の石器類を木下が担当した。
5. 本書の編集は川述が行った。

発掘調査関係者

福岡県教育委員会（57～59年）

総括

教 育 長 友野 隆
教育次長 森 英俊（前任）
教育次長 安倍 徹
文化課長 藤井 功（前任）
文化課長 前田栄一

庶務

庶務係長 松尾 満
主任主事 古賀秀幸（前任）
主任主事 川村喜一郎

試掘調査

文化課 調査第1係長 宮小路賀宏
南筑後教育事務所 技術主査 川述昭人
文化課 主任技師 池辺元明

本文目次

| | | |
|-----|----------|----|
| I | 調査の経過 | 1 |
| II | 観音丸遺跡の調査 | 2 |
| | 1. はじめに | 2 |
| | 2. 位置と環境 | 2 |
| | 3. 遺構と遺物 | 4 |
| | 4. おわりに | 15 |
| III | 向野古墳群の調査 | 17 |
| | 1. はじめに | 17 |
| | 2. 位置と環境 | 17 |
| | 3. 遺構と遺物 | 19 |
| | 4. おわりに | 24 |
| IV | 三船山遺跡の調査 | 25 |
| | 1. はじめに | 25 |
| | 2. 位置と環境 | 27 |
| | 3. 遺構と遺物 | 27 |
| | 4. おわりに | 54 |

I 調査の経過

昭和45年に開始された県営圃場整備事業は年ごとにその事業量を増大化して行き、事業量の増大化と共に文化財包蔵地の破壊という問題が深刻化してきた。昭和50年に入って、県教育委員会文化課と、県農政部農地整備課との間で文化財の保護と圃場整備事業の推進のために事前協議を行うことが定形化された。協議結果をもとにして試掘調査を実施し、文化財の有無、遺構面の深度の把握をもとに再度協議し、工事計画の再検討を行い、それが不可能な場合は最小限度の発掘調査を実施していくという方式が定着していった。このため、試掘対象地の増加に伴って試掘調査は昭和58年度からは500万円の国庫補助事業として予算化され今日に至っている。

本県における58年度の耕地面積は11万2,200 ha で、県総面積の23%となっている。このうち水田が8万4,100 ha と耕地の75%を占めており、全国の55.2%に比べ水田の割合が非常に高い。

水田面積8万41,00 haのうち、要圃場整備面積は4万9,058 haであり、昭和58年度までに1万8,437 haが整備された。整備率は37.6%であるが、これは全国平均、九州平均を下回っており、今後はさらに圃場整備の促進を図るということである。年度ごとの事業量をみると、昭和51～55年度の年平均は1,444 haであったが56年度には1,900 haとなり、その後毎年200 haずつ増加して59年度は2,500 haとなっている。この事業量の増加は当然のことながら、文化財の発掘調査の件数、面積の増加と比例する傾向にあり、本県における発掘調査のうち、圃場整備事業に起因する比重が大となりつつある。

現在までの圃場整備率は前述の如く37.6%であるため今後は年度ごとの事業量の増加が予想され、これに伴う文化財の調査も増加の一途をたどることは確実である。

昭和57年度の大木町観音丸道跡は大莞地区干拓地等農地整備事業に伴う試掘調査により遺跡の所在が明らかとなったが、この箇所は幹線クリークの新設工事に伴って破壊されるため発掘調査し、室町時代の遺構を検出した。昭和58年度の三潯町向野遺跡は三潯地区県営圃場整備事業に先立って実施した試掘調査の結果、古墳の周溝が確認された。この部分は水田からの比高2 mの舌状丘陵の先端部に相当するが、1 mほどカットせざるを得ないため、事前の調査を実施した。調査の結果5世紀後半の古墳2基の周溝の一部を検出した。同じく58年度に実施した瀬高町三船山遺跡は三船地区新農業構造改善事業として削平されるため、試掘を実施し、発掘調査を行った。その結果、弥生時代中期末～後期にかけての住居跡24軒を検出した。

Ⅱ 観音丸遺跡の調査

1. は じ め に

昭和57年6月に入り、県農政部農地整備課より、圃場整備事業内容についての協議文書が文化課へ提出されたのを受けて、現地調査を行った。現地調査に先立って、大木町教育委員会社会教育課係長田中千佳樹氏の意見を聞き、現地調査を行う。現地は標高3.5mで、4周をクリークに囲まれた方形の平坦な地形であり、方形の一边は60～70m程である。当該地へはクリークに架構された幅2m程の通路で出入りする構造となっている。当該地の周辺部は蒲池城跡の推定の一つとなっている地区だけあり、土師器が多数散布しており、試掘の必要があると判断された。試掘調査は小型のバックホーを用いて行った。当該地へ至る途中の箇所にも幅80cmのトレンチを井桁状に設定し、青磁片、土師器片を検出したが遺構は存在しなかった。当該地ではT字状にトレンチを設定し、柱穴等の遺構の所在が確認されたため、範囲確認のトレンチを周囲に入れ、調査範囲を限定した。当該地区は幹線クリーク（幅28m）の路線にあたり、クリーク掘削は本年度事業であり、事業計画の変更は不可能であるため発掘調査を実施した。調査の結果、室町時代の木棺墓二基と同時期と思われる円形、方形の土壇、柱穴群を検出した。

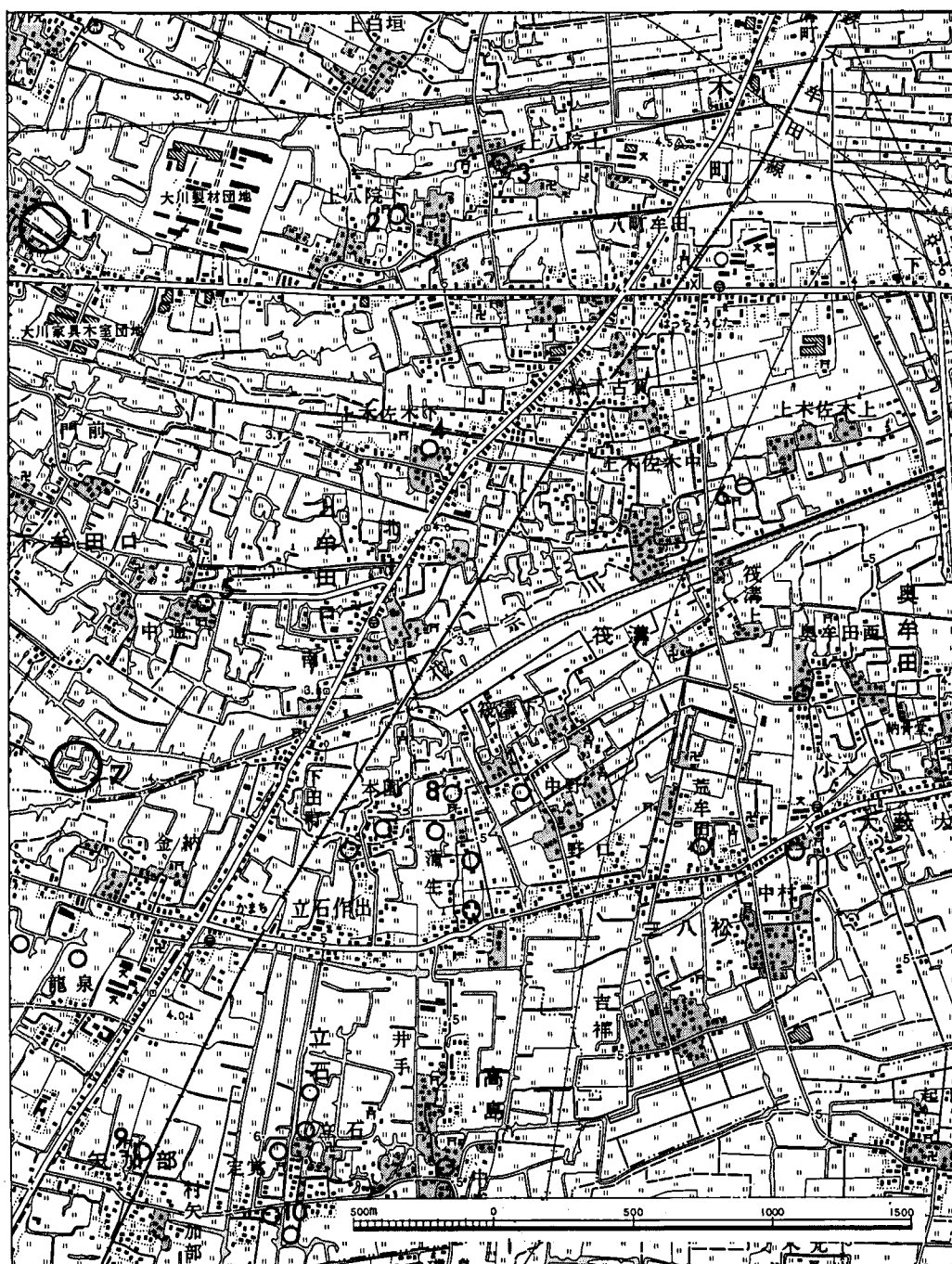
試掘及び発掘調査は昭和57年8月19日・20日、8月30～9月2日の間で実施した。調査に際して県文化財保護指導委員の久賀愛策氏の援助を得た。また大木町教育委員会社会教育課係長田中千佳樹氏の熱心なご協力を得た。バックホーのオペレーターである教楽木建設の斎藤氏、炎天下作業に従事された地元筏溝地区の方々等、関係各位に対して謝意を表します。発掘調査は県文化課主任技師川述昭人が行った。

2. 位 置 と 環 境

遺跡は福岡県三潴郡大木町筏溝字観音丸に所在する。当該地は筑後平野の南部に位置する筑後川流域の、沖積低平地の水田地帯である。この地域は標高3m～5m程であり、下流域特有のクリークが特に多い地区であり、縦横に迷走しているため直前に見える場所であってもたびたび迂回を余儀なくされ、慣れていないと目的地到達が思うにまかせない地域である。従って、この地が蒲池城跡推定地としても何ら疑問を感じない立地条件を備えている。

当該地は西鉄大牟田線蒲池駅に近く、周辺部には平安時代から江戸時代にかけての散布地が多数点在しているが中には弥生時代の遺物を包蔵している地域も所在している。

南方へ2kmの距離には沖端川が西流しておりこの左岸にあたる三橋町正行から垂水にかけて



第1図 遺跡位置図 (1/25,000)

1. 中木室遺跡 (平安) 2. 天神屋敷 (江戸) 3. 宮の後遺跡 (室町) 4. 鍛冶屋遺跡
5. 馬場遺跡 (平安) 6. 上木佐木遺跡 7. 鬼古賀遺跡 (平・鎌) 8. 観音丸遺跡
9. 玉垂命神社遺跡 (弥生) 10. 阿弥陀屋鋪遺跡 (弥生)

の標高 4 m 前後の低平地からは弥生時代後期の土器多数と、奈良～平安時代にかけての遺物と若干の遺構を検出している。

西方の城島町、大川市では標高 3 m の地点から弥生時代後期の下林遺跡が園場整備事業のクレーン開削の際に発見され調査された。このように有明海沿岸の標高 3 m ほどの低平地にも確実に遺跡が所在することが明らかとなっているため、今後は、筑後平野南西部の再認識が痛感される。

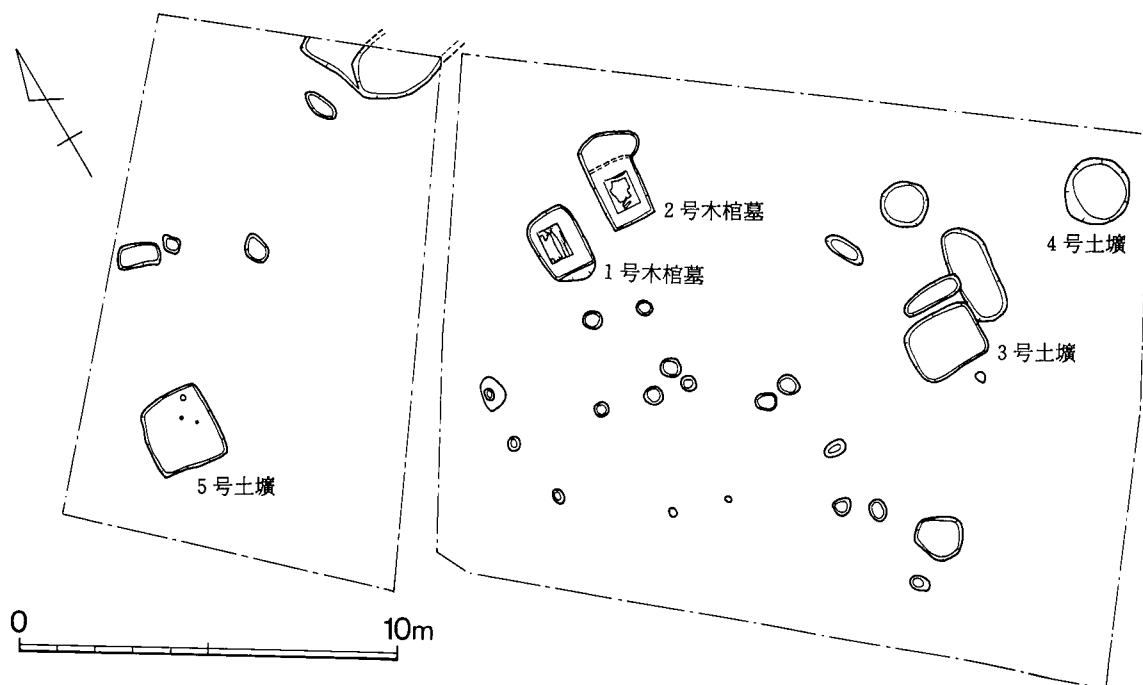
3. 遺 構 と 遺 物

遺 構

(1) 木棺墓

1号木棺墓（第3図、図版1・2）

発掘区の中ほどに近い位置から検出された。墓壇の平面形は隅丸長方形を呈するものであり、規模は、南北1.75m、東西1.25m、深さ33cmを測る。この墓壇の長軸に平行ではあるが、長辺の西寄りに木棺は埋置されている。この木棺埋置のために墓壇底面を5cmほど平坦に掘りくぼめている。棺材は底板の大半部が遺存しており、板目は長辺に平行に走っている。棺の規模は南北91cm、東西68cmで、長方形を呈する。棺材は腐蝕し、現存3mmほどの厚さを残している。



第2図 遺構配置図（1/200）

板材の上には歯が遺存しており、その位置から頭部を北に向けたもので、顔を東向き（2号棺の方向へ）にした横臥屈葬と思われる。

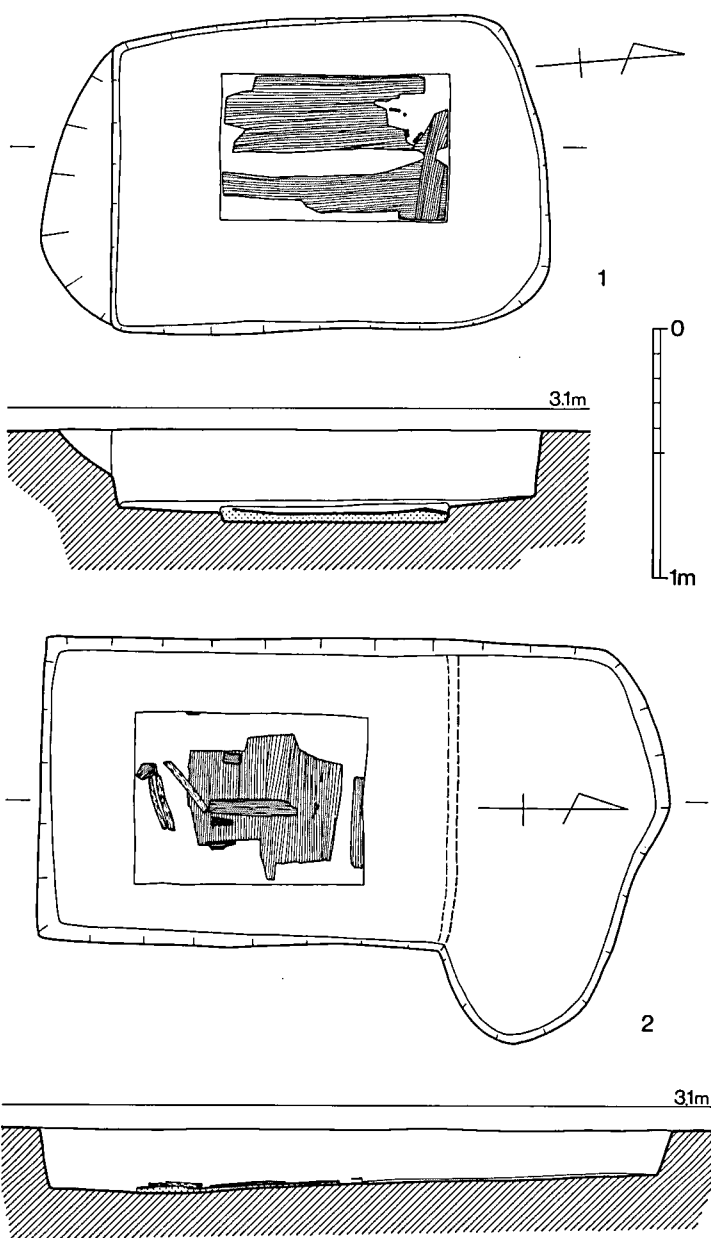
2号木棺墓（第3図、図版1・2）

1号木棺墓の東70cmの位置で、これと平行に営まれている。墓壇の平面形は長方形を呈するものであり、規模は南北1.7m前後、東西1.27m、深さ25cmを測り、1号棺とほぼ同一規模のものである。この墓壇のほぼ中央部に木棺は安置されている。当該棺は1号棺の場合と異なって棺を据えるための掘り込みはもうけていない。底板の棺材と一部蓋板が遺存しているが板の用い方は1号棺と異なり、木目は短辺に平行に走る。使用した板は幅10cm前後のものである。

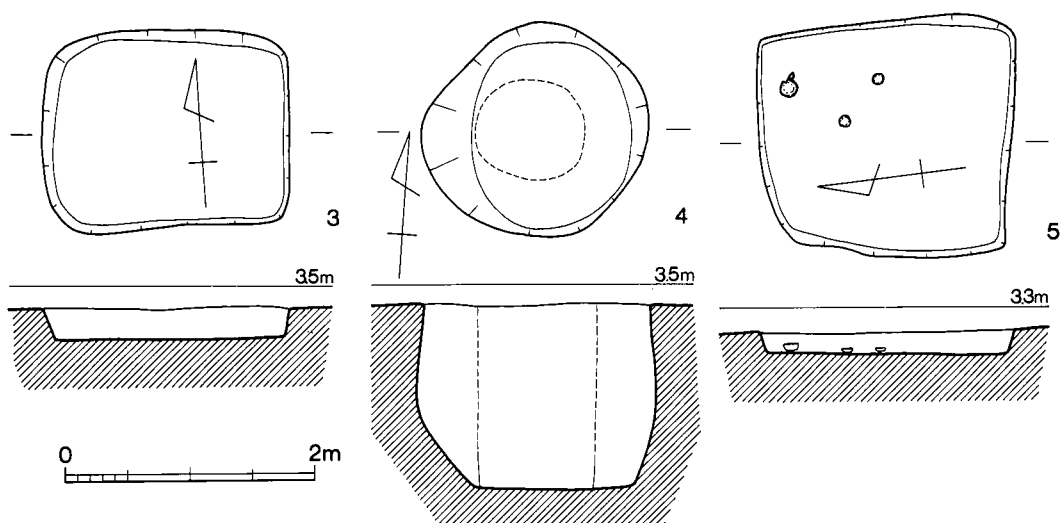
板材の上には歯と脚部の骨が遺存しており、遺体は棺の中央部分に頭部（顔）を西に向けた横臥屈葬であり、西方浄土の思想と合致した葬法であることがわかる。

(2) 土 壇

3号土壇（第4図、図版3）



第3図 1・2号木棺墓実測図（1/30）



第4図 3・4・5号土坑実測図(1/60)

平面形は隅丸長方形を呈するもので、規模は東西2m、南北1.6m、深さ25cmを測る。

4号土坑(第4図、図版3)

発掘区の東側端部から発見された。平面形は円形状の隅丸方形を呈し、規模は南北1.7m、東西1.6m、深さ1.46mを測る。底辺の規模は南北1.5m、東西1.28mを測る。木質の遺存は見られなかったが坑の西寄りの位置で径90cmの土色の違いが垂直に見られ、その痕跡から井戸かと思われる。

5号土坑(第4図、図版3)

発掘区の西側端部で検出された。平面形は方形を呈しており、規模は2m×1.9m、深さ20cmを測る。底面からは土師器杯、皿が検出された。

(3) 柱穴群(第2図、図版3)

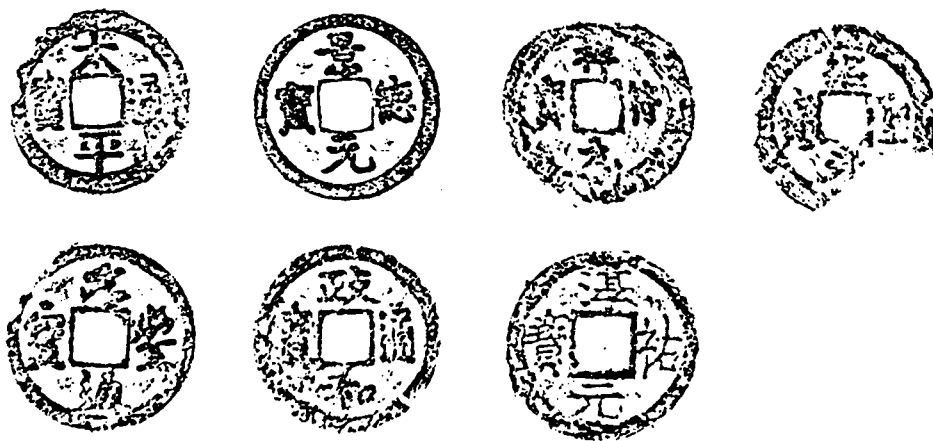
発掘区内からは20個ほどのピットが検出された。ピットの規模は20cm～50cmほどであり、深さは10cm～35cmのものである。ピットのうち1つからは柱痕が検出され、他の1つからは柱材が一部検出された。このように若干のピットには明らかに建物が所在したことがうかがえるが建物としてのまとまりは見られない。

遺物

銅銭(第5図)

7種28枚の銅銭が出土した。

1号墓……………不明1



第5図 観音丸遺跡出土銅銭拓影（実大）

3号土壌……太平通寶1、景德元寶1、祥符元寶1、元豊通寶2、政和通寶1、淳祐元寶1、
不明1

5号土壌……太平通寶1、治平元寶1、不明16（融着のため）

包含層出土…不明1

初鑄年代順に並べると、太平通寶（976年初鑄）—景德元寶（1004年）—祥符元寶（1008年）—治平元寶（1064年）—元豊通寶（1078年）—政和通寶（1111年）—淳祐元寶（1241年）の順になる。いずれも北宋銭であり、明銭を含まない。

1号墓出土遺物（第6図1～3）

土師器

いずれも糸切りであり、口径により皿をA～Cに3分類し、杯は2分類する。

皿 B（1） 口径8.4cm、底径3.6cm、器高2.4cmである。口径に比して器高が高い。

皿 C（2） 口径10.7cm、底径7.5cm、器高1.9cmである。

陶器

摺鉢（3） 備前焼の摺鉢であるが小片のため筋目の単位は不明である。体部は内外面とも横ナデ調整であり、口縁端部はややとがる。色調は暗小豆色を呈している。胎土には多量の砂粒を含んでいる。いずれも15世紀代に比定されるものである。

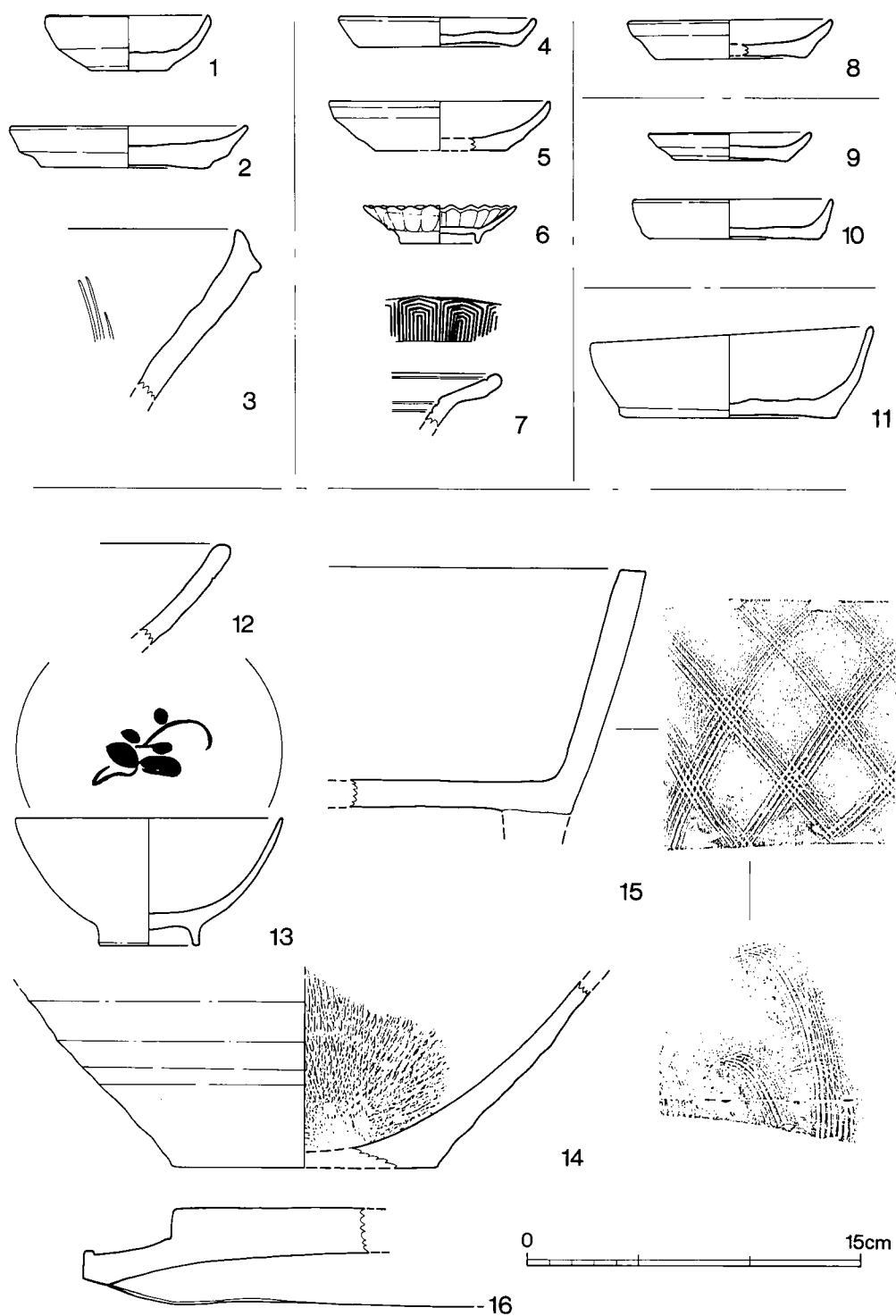
2号墓出土遺物（第6図4～7、図版4）

土師器

皿 B（4） 口径8.9cm、底径7cm、器高1.3cmである。

皿 C（5） 口径10cm、底径5.8cm、器高2.2cmである。

白磁



第6図 観音丸遺跡出土土器・瓦質土器・陶器・瓦実測図① (1/3)

皿（6） 波状口縁をなし、体部内外面ともこの波状の低位を基準にして縦線を入れる。内面は全面に灰白色釉がかかり、外面は口縁部にのみ釉がかかる。胎土は明灰色を呈する。

陶 器

鉢（7） 大きく外反する口縁部を有し、この部分の内面には、スタンプによる文様が入る。灰茶色釉である。古唐津系かと思われる。4は15世紀、他は近世の遺物と思われる。

1号土壇出土遺物（第6図8）

皿 B（8） 口径9.2cm、底径6.8cm、器高1.7cmである。

2号土壇出土遺物（第6図9、10）

皿 A（9） 口径7.3cm、底径5.1cm、器高1.2cmである。

皿 B（10） 口径9cm、底径7.7cm、器高1.8cmである。

4号土壇出土遺物（第6図12～16、図版4・5）

瓦質土器

鉢（12） 内外面とも横ナデ調整であり、外面は全面に煤が付着している。外面の口縁部直下には1条の沈線が入る。灰茶色を呈し、焼成は良好である。胎土には多量の細砂粒を含む。

火 舎（15） 長方形、方形のどちらであるか判断がつかない。口縁端部は平坦で、両側面はヘラ削りによる縁どりを施している。内外面とも横ナデを行うが、一部にはヘラ研磨がみられる。四脚がつくものと思われるが接合痕を残すのみである。外面の一边は7条の溝を1単位とした斜格子文が入る。他の一边は同じ単位の縦溝が入る。乳灰色を呈し、焼成、胎土は良好である。

染 付

椀（13） 見込みに暗青色を呈した文様が入る。図柄はつる性の植物を表現したものと思われる。全面に淡青色釉がかかり、高台畳付は淡青色の釉発色である。灰白色胎土である。

陶 器

摺 鉢（14） 内面の全面に縦方向の筋目が入る。外面は横ナデによる凹凸が著しい。小豆色を呈しており、焼成は良好である。胎土は精選されていて良好。近世陶器と思われる。

瓦

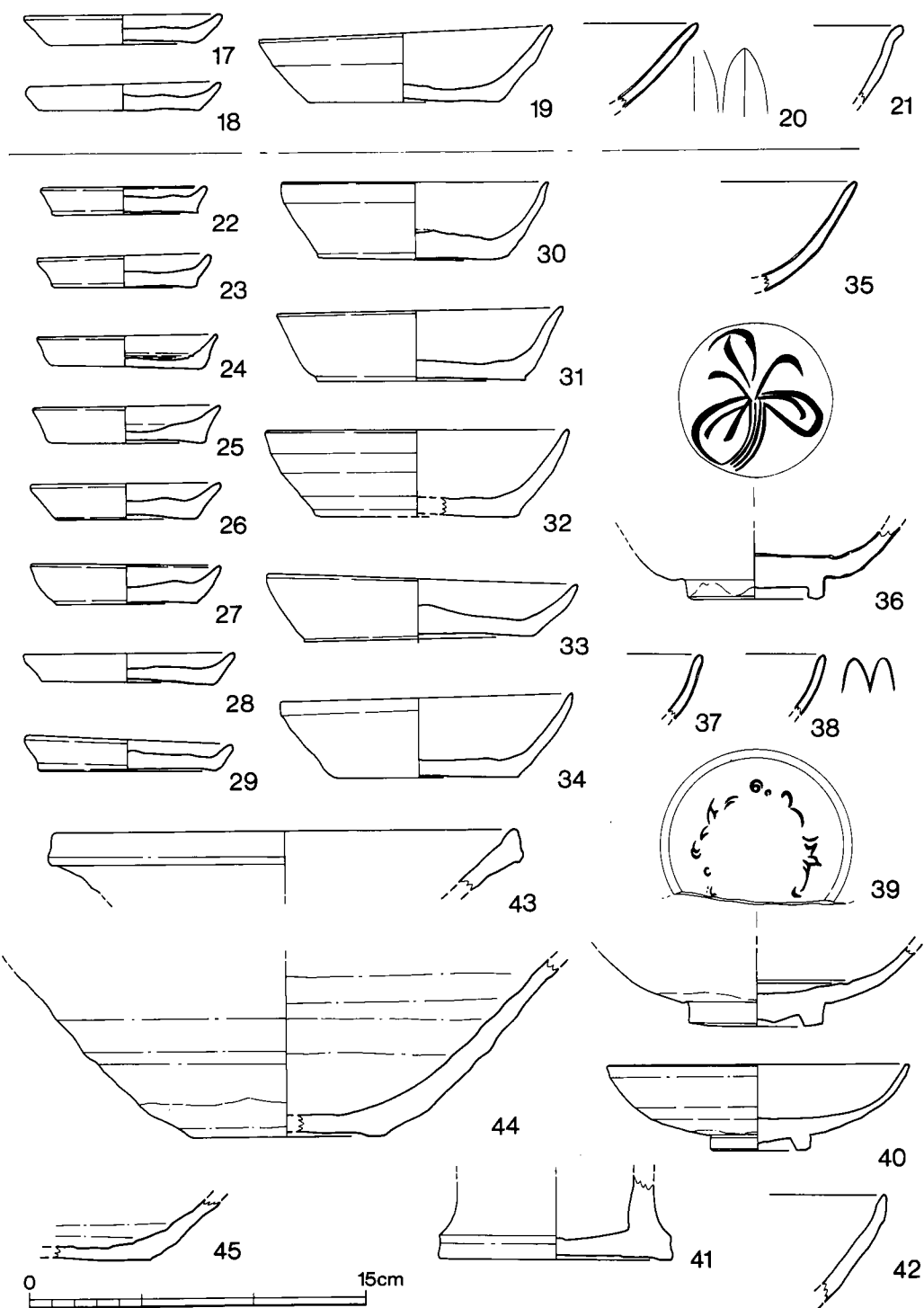
丸 瓦（16） 1/2弱を遺存する。凹面は比較的目的の粗い布目である。側面はヘラ削りによって整形されている。灰茶色を呈しており、焼成は良好である。胎土には微砂粒を含む。出土遺物は15世紀（12・16）と近世（13・14・15）とに2大別される。

5号土壇出土遺物（第6図11）

杯 B（11） 口径12.7cm、底径9.8cm、器高4.2cmである。

7号土壇出土遺物（第7図、図版5）

土師器



第7図 観音丸遺跡出土土器・瓦質土器・陶器・磁器実測図② (1/3)

皿 B (17・18) 口径8.7～8.9cm、底径6.6～7.1cm、器高1.2～1.3cm。

杯 B (19) 口径13cm、底径8.4cm、器高3.3cmである。

青磁

碗 (20) 鎬蓮弁文様が入る。釉はやや厚目にかかっており、暗緑色を呈している。淡灰色胎土である。

白磁

碗 (21) 口縁部は短く外反する。淡灰色を呈するが釉が薄くかかっている。内外面ともに貫入がみられる。明灰色胎土である。

青磁碗は13世紀、白磁碗は15世紀に比定される。

包含層出土遺物 (第7～10図、図版5・6)

土師器

皿 A (22～24) 口径7.4～8.1cm、底径6.6～6.7cm、器高1.2～1.3cmである。

皿 B (25～29) 口径8.4～9.4cm、底径6.4～7.8cm、器高1.4～1.8cmである。

杯 A (30) 口径11.9cm、底径8.5cm、器高3.5cmである。

杯 B (31～34) 口径12.8～13.9cm、底径8.3～10.5cm、器高3.2～3.8cmである。

青磁

碗 (35～38) 35は深緑色の釉が薄くかかっている。灰色胎土である。36は緑色の釉がやや厚目にかかり、高台部の外面には釉が垂下している。

36の見込みには篋による片切彫りの花文が入る。灰白色胎土である。37は淡緑色釉がやや厚目にかかっている。灰白色胎土である。38は無鎬の蓮弁文が描かれている。淡緑色に釉発色しており胎土は灰白色を呈する。

白磁

碗 (39) 高台と底部を除く全面に釉がかかっており、この釉は一部高台部へ垂下している。見込みには花文が入り、この部分は灰色と淡緑色の釉発色をし、全体が一様の色調ではない。胎土は灰白色を呈している。

皿 (40) 高台と底部の一部を除く全面に乳白色釉がかかるが釉色は悪い。口縁端部は平坦面を有している。胎土は白色を呈し、粗い。

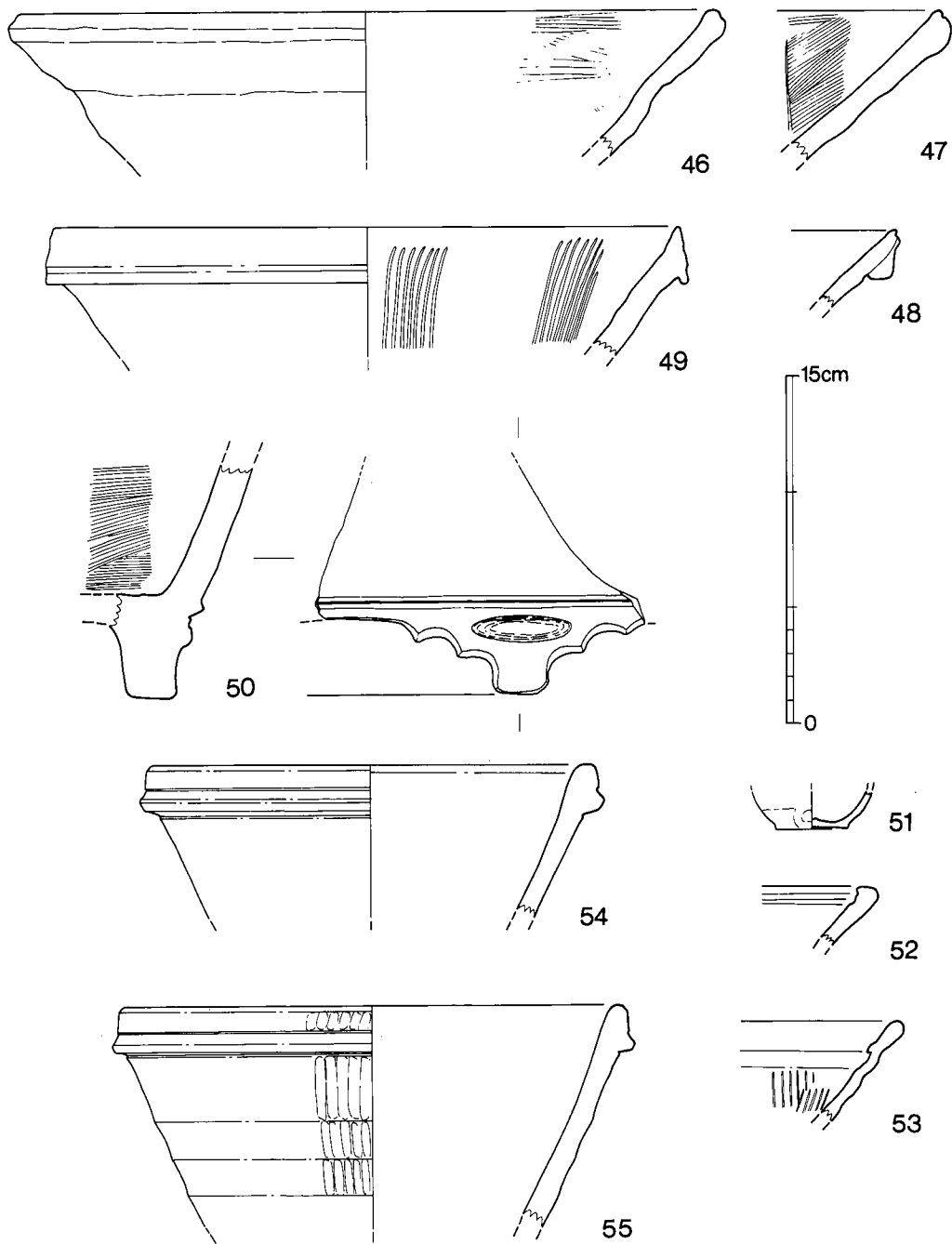
灰釉陶器

41は外面の全面に灰釉がかかっている。底部は釉に気泡が入り、器面は凹凸が著しい。胎土は精選されていて良好である。

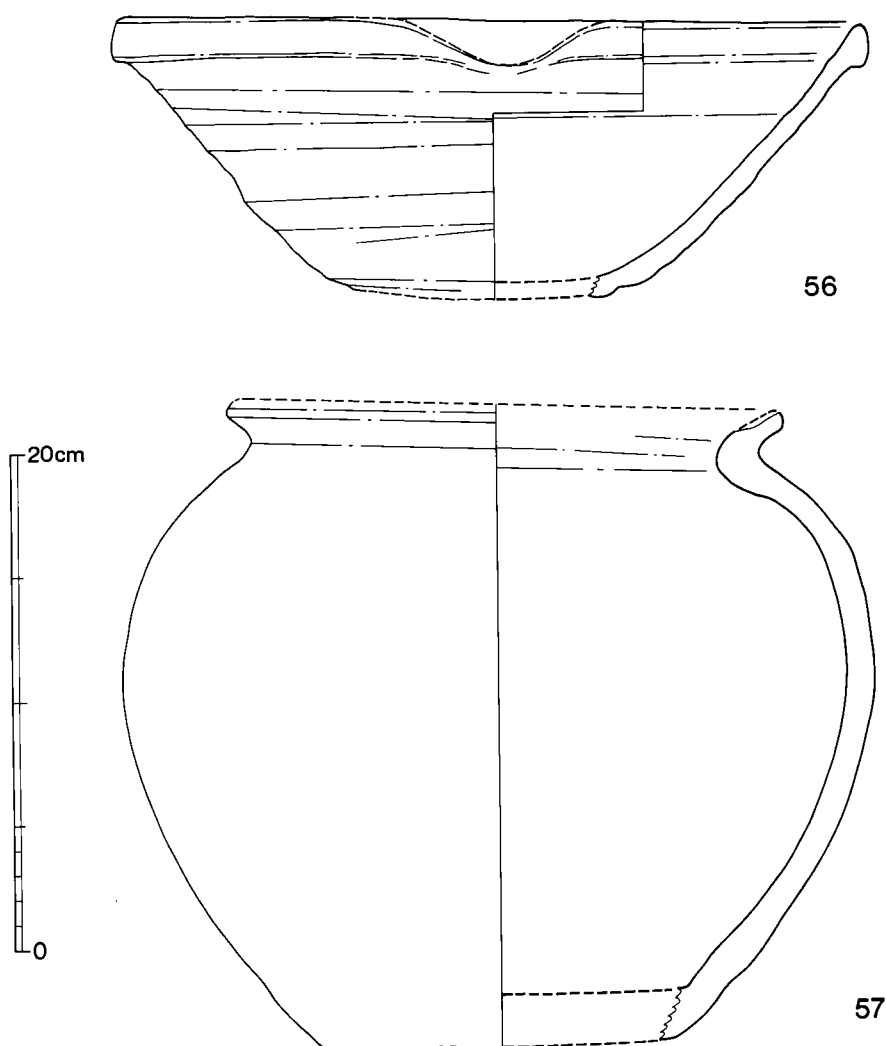
黒釉陶器

碗 (42) 底部を欠損するが、外底部の若干を除く全面に暗茶色の釉がかかる。

瓦質土器



第8図 観音丸遺跡出土瓦質土器・陶器・石製品実測図（1/3）



第9図 観音丸遺跡出土瓦質土器実測図(1/3)

鉢(43~48、56) 43~45は東播磨系と言われる片口のこね鉢である。43は口縁部内外面とも横ナデ調整である。口径20.7cmである。灰色を呈しており、焼成は良好である。胎土に細砂粒を含む。44は口縁部を欠損している。内外面ともに横ナデ調整であり、器壁に凹凸が著しい。底部外面には粘土を貼り付けたためその部分だけ色調が異なる。内面の底部周辺は物をこねたため器表が剥落している。明灰色を呈し、焼成は良好である。胎土に小砂粒を含んでいる。45は底部内面に使用痕がみられない。44・45とも糸切り底であり、45は乾燥時の板状圧痕がつく。46~48は摺鉢であり、47は体部外面に煤が付着しており鍋に転用されたものと思われる。46は内面に横・斜め方向に溝が入る。47は刷毛目のあと節目を入れている。46は片口であり、一部

にそれがうかがえる。黄褐色で焼成は良好である。胎土に小砂粒を含む。47は暗茶色を呈し焼成は良好である。胎土には微砂粒を含む。48は灰褐色を呈し、焼成は良好である。56は片口の鉢である。口径29.6cm、底径10.5cm、器高11.2cmである。体部内外面とも横ナデ調整であり、凹凸が著しい。外面には煤の付着が見られるため鍋として転用したものと思われる。灰色を呈し、焼成は良好である。胎土には小砂粒を含む。

火 舎 (50) 脚部周辺を一部遺存している。内面は横方向に刷毛目を施し、外面は横ナデ調整である。灰白色を呈しており、焼成はやや軟質である。胎土には多量の小砂粒を含んでいる。

甕 (57) 短く外反する口縁部である。全体に一樣な厚手造りであり、底部はさらに厚手となる平底である。外面は格子叩きが入る。内面はナデ調整である。口径21.5cm、底径14cm、器高25.7cm、最大径30.1cmを測る。灰色を呈し、焼成は良好である。胎土は砂粒をほとんど含まずに精良である。

陶 器

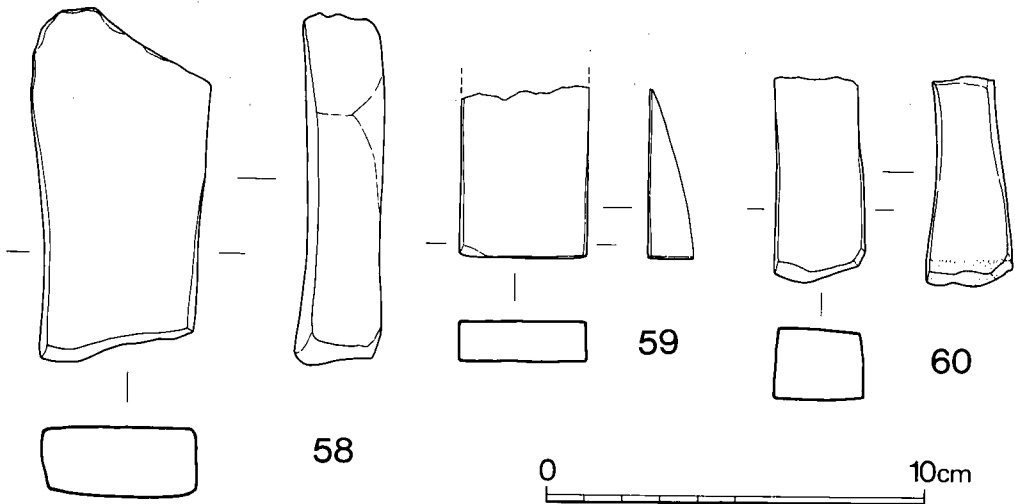
摺 鉢 (49・52・53) 53は口縁部にのみ自然釉が付くが、暗茶色を呈している。体部内面には間隔のあいた筋目が入る。52は暗小豆色を呈している。

49は備前焼である。7条を1単位とする筋目が入る。小豆色を呈し、焼成は良好である。胎土に多量の砂粒を含む。

51は外面上部に乳白色の釉がかかり、底部に釉が垂下している。胎土は白色である。

石製品

石 鍋 (54・55) とともに滑石製品である。54は口径19.4cm、55は20.9cmであり、同一形態



第10図 観音丸遺跡出土砥石実測図(1/2)

のものを一まわり大きくしたものである。55の外表面は縦方向に削り目を残したままである。内面は研磨により、器表は滑らかである。

包含層出土遺物は13世紀代、15世紀代、近世に3大別できる。13世紀代は35・36・41・43～45である。15世紀代は37～40・42・46～50・54～57である。近世は51～53である。

砥石（第10図、図版6）

いずれも包含層出土品である。58は4面使用の中砥石である。硬質砂岩である。60も中砥石であり、4面を使用する。硬質砂岩である。59は板状に加工された仕上砥石であり、研ぎ面は一面のみである。粘板岩製であり、淡褐色を呈している。

4. お わ り に

1. 木棺墓について

遺構は木棺墓、土壌（うち1基は井戸と思われる）柱穴が検出された。木棺墓はいずれも主軸をほぼ南北に置くものであり、遺体は横臥屈葬されている。1号棺は人骨の遺存状態が良くないため頭部は西向、東向のどちらとも判断しかねるが、棺の西寄りに歯が遺存しているのを思えば顔は東向きの可能性が強い。2号棺は西向きの姿勢で埋葬されている。標高が3.5mと低位であり、しかも周囲にクリークがめぐるという条件から人骨の遺存状態が悪く、とりあげる際には土と化するような状態であった。従って性別、年齢等については不明な点が多いが、成人であることは確かである。木棺墓の墓壇内出土遺物のうち鉢については副葬品とは考えられず、木棺墓が埋まる過程での流入と考えた方が良さそうである。土師器皿については何らかの関連性を有するものかと思われるが、この遺物だけで年代を決めるのも難問のように思われる。あえて言えば15世紀代と言う所であろうか。

2. 土壌について

床面もしくは遺構内から遺物を出土したのは1・2・4・5・7号土壌である。このうち井戸かと思われる4号土壌からは、50～60cmほど掘り下げた位置で13の染付碗、14の陶器摺鉢、15の瓦質火舎が出土した（図版4）。この遺物はいずれも16世紀以降の近世遺物であり、井戸が埋まる過程で投棄されたものと思われる。下層からは12の瓦質土器鉢、16の丸瓦が出土しており、これは15世紀代に比定され、この時期が井戸の構築時期と思われる。7号土壌出土遺物は20の青磁碗は13世紀であるが、21の白磁碗は15世紀であり、土師器の皿・杯もこれと同時期と思われる。

以上の如く、土壌についてはほぼ、15世紀代の所産と考えられる。

3. 銅銭について

7種28枚の銅銭が出土したが5号土壙出土の18枚のうち16枚は火熱を受けて融着しているため、あと若干の種類を含む可能性は大である。判読できるものはすべて北宋銭であり、初鑄年代からみると太平通寶から淳祐元寶までである。これらの中には明銭である洪武通寶や永樂通寶を含まないため明銭が使用されはじめる以前の年代を考えられよう。

4. 包含層出土の遺物について

遺物は、土師器皿、杯、青磁碗、白磁碗・皿、黒釉陶器碗、灰釉陶器、瓦質土器鉢・壺、火舎、陶器鉢、染付碗、石鍋、砥石が出土している。その年代は13世紀代と15世紀代、そして16世紀以降のものに3大別できる。^(註1)このうち量の点において主体をなすのは15世紀代のものである。

5. 土師器について

すべて糸切りであり、皿は口径から3分類した。

皿A—口径7.3～8.3cm、器高1.2～1.3cm

B—口径8.4～9.4cm、器高1.2～1.8cm、2.4cm

C—口径10～10.7cm、器高1.9～2.2cm

杯A—口径11.9cm、器高3.5cm

B—口径12.7～13.9cm、器高3.2～4.2cm

である。この数値を大宰府出土の土師器編年^(註2)に照らし合わせると三潯郡という地域差があるためそのままあてはまらないようである。

註1 横田賢次郎・森田勉「大宰府出土の輸入陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集4』1978、九州歴史資料館。この他にも森田勉氏の御教旨を受けた。

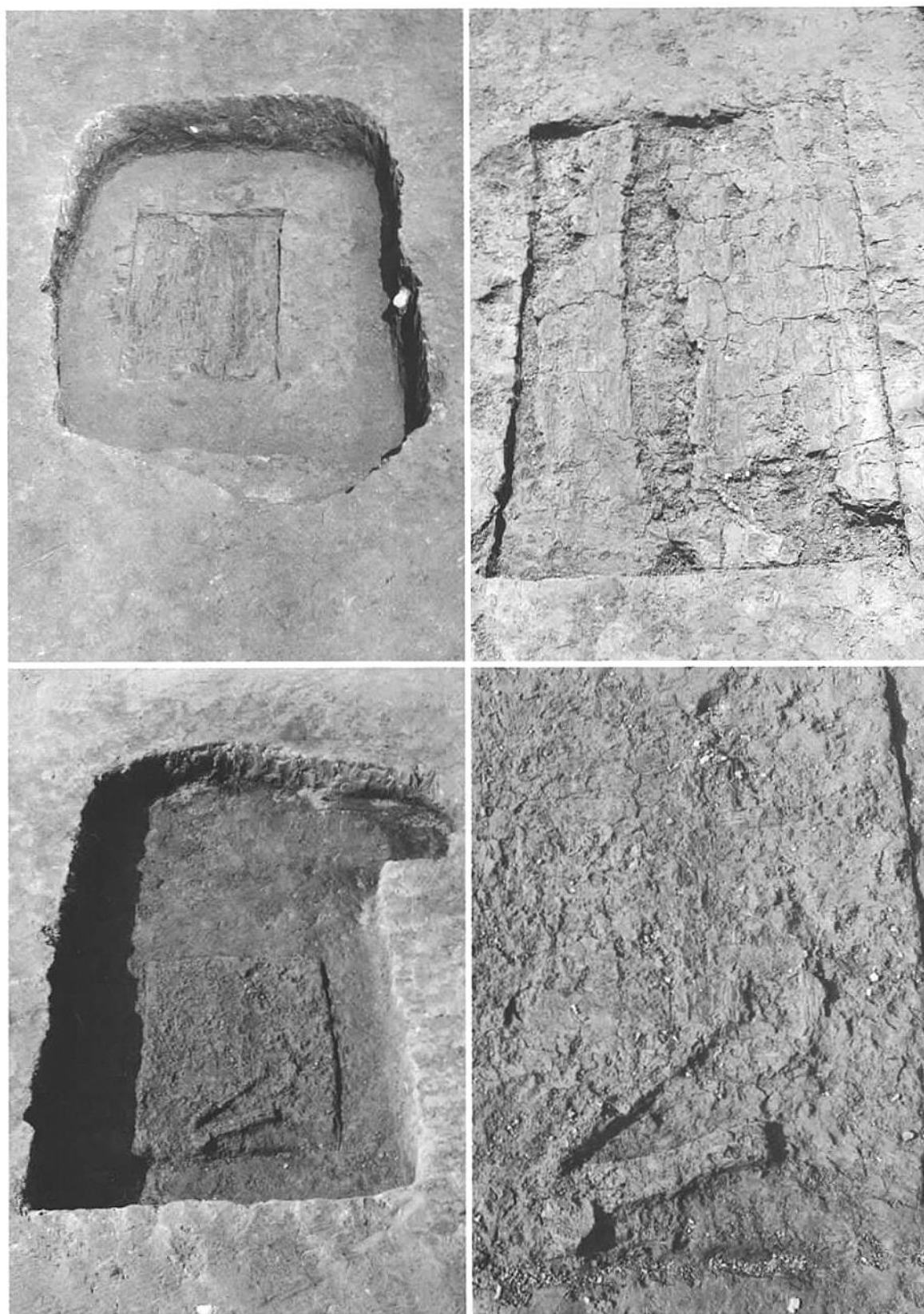
註2 註1に同じ



観音丸遺跡近景



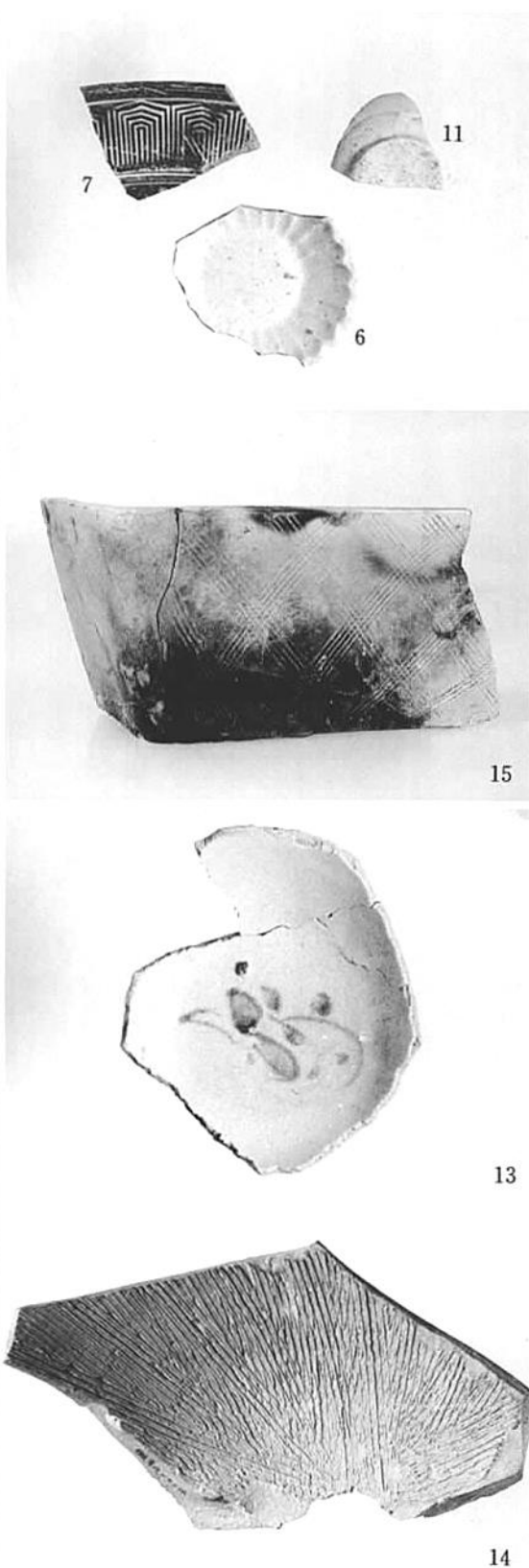
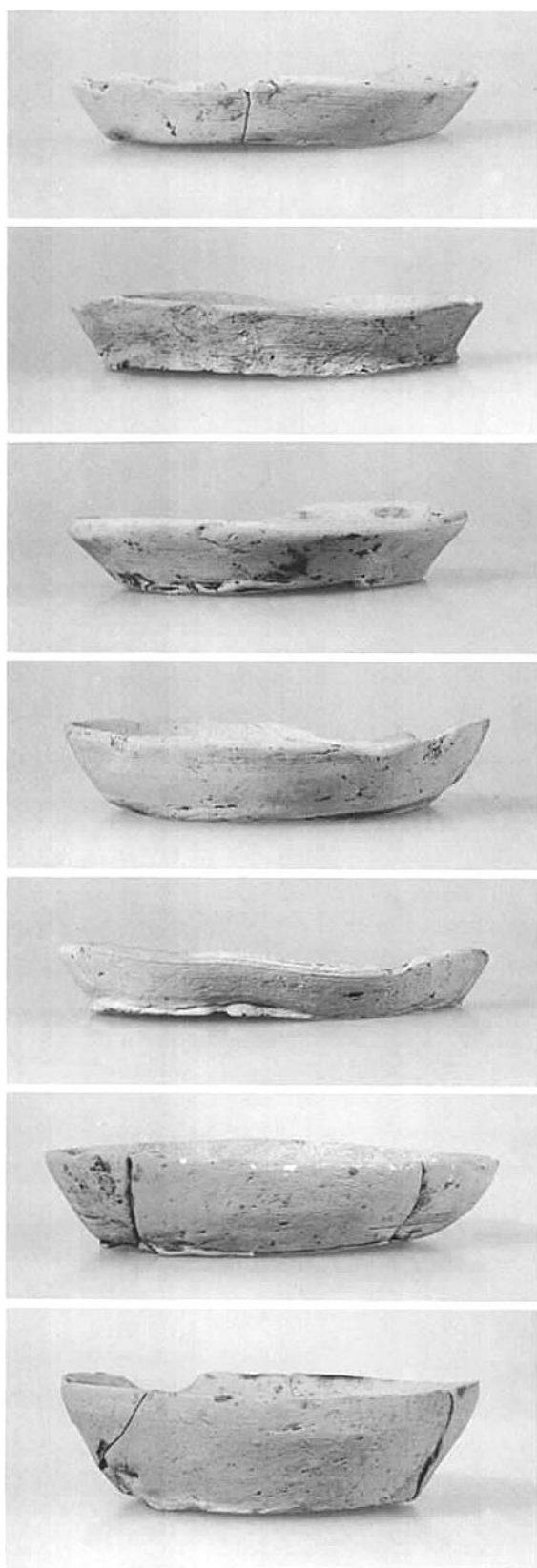
1号・2号木棺墓



1号木棺墓（上）・2号木棺墓（下）

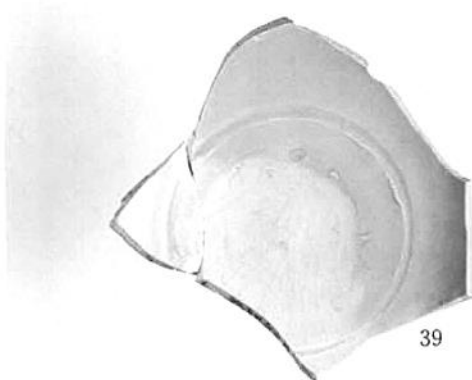


1 ピット群 2 柱痕 3 3号土壇 4 5号土壇
5 4号土壇 6 4号土壇 7 4号土壇 8 土壇群

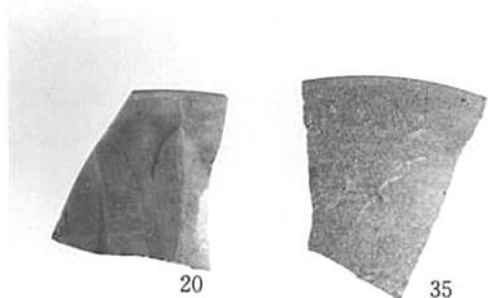




16

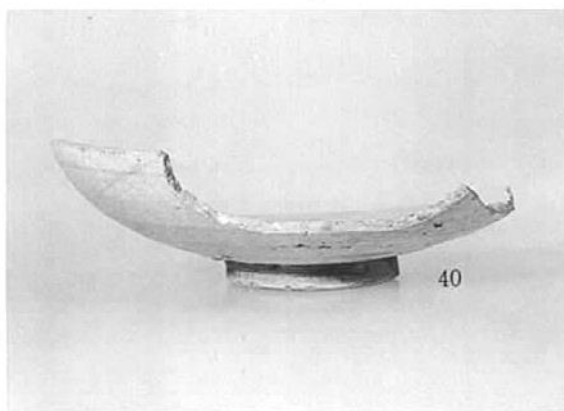


39



20

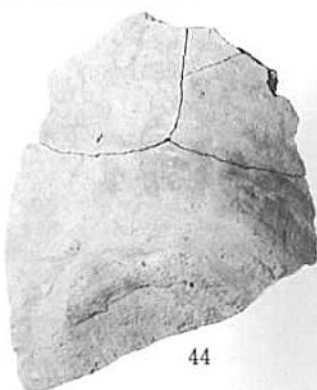
35



40



36



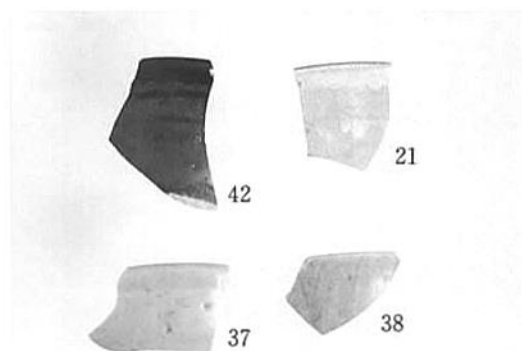
44



43



45

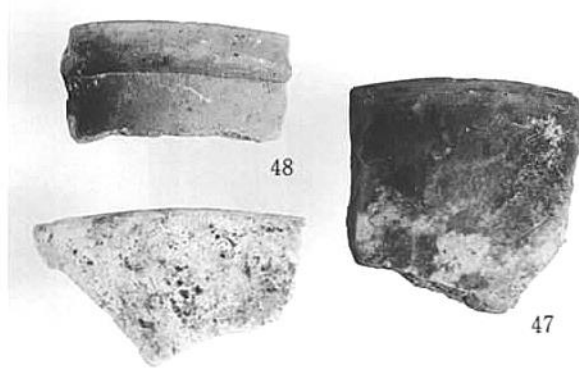


42

21

37

38



48

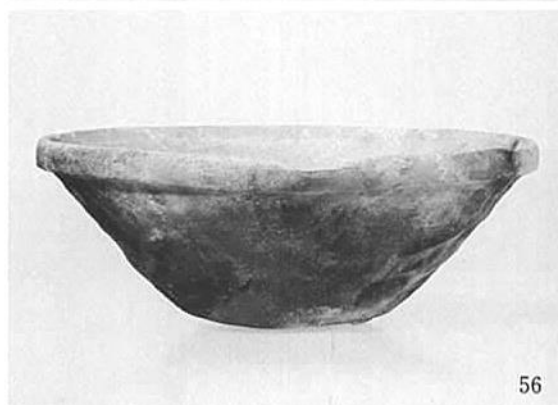
47



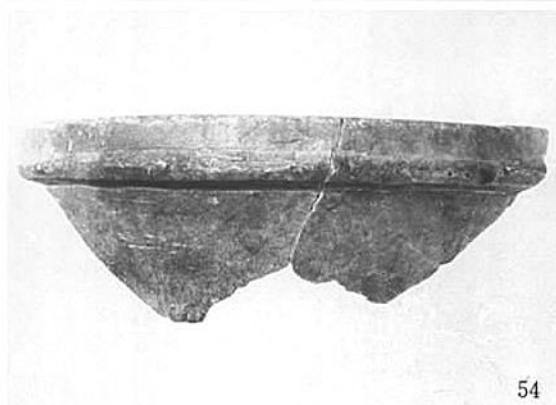
46



49



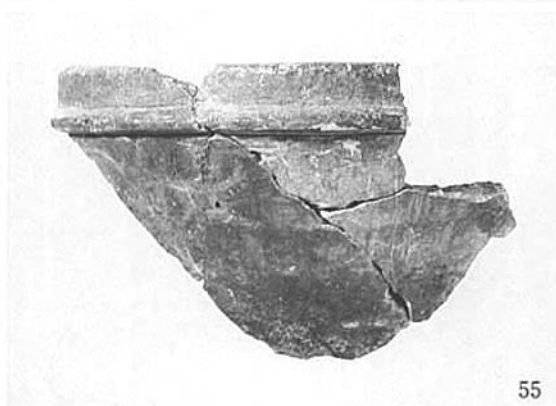
56



54



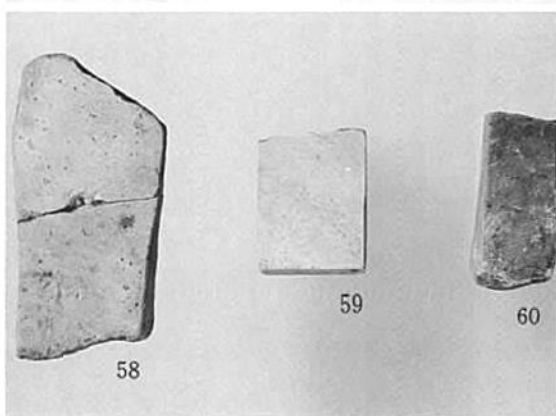
50



55



57



58

59

60

瓦質土器、陶器、石鍋、砥石

Ⅲ 向野古墳群の調査

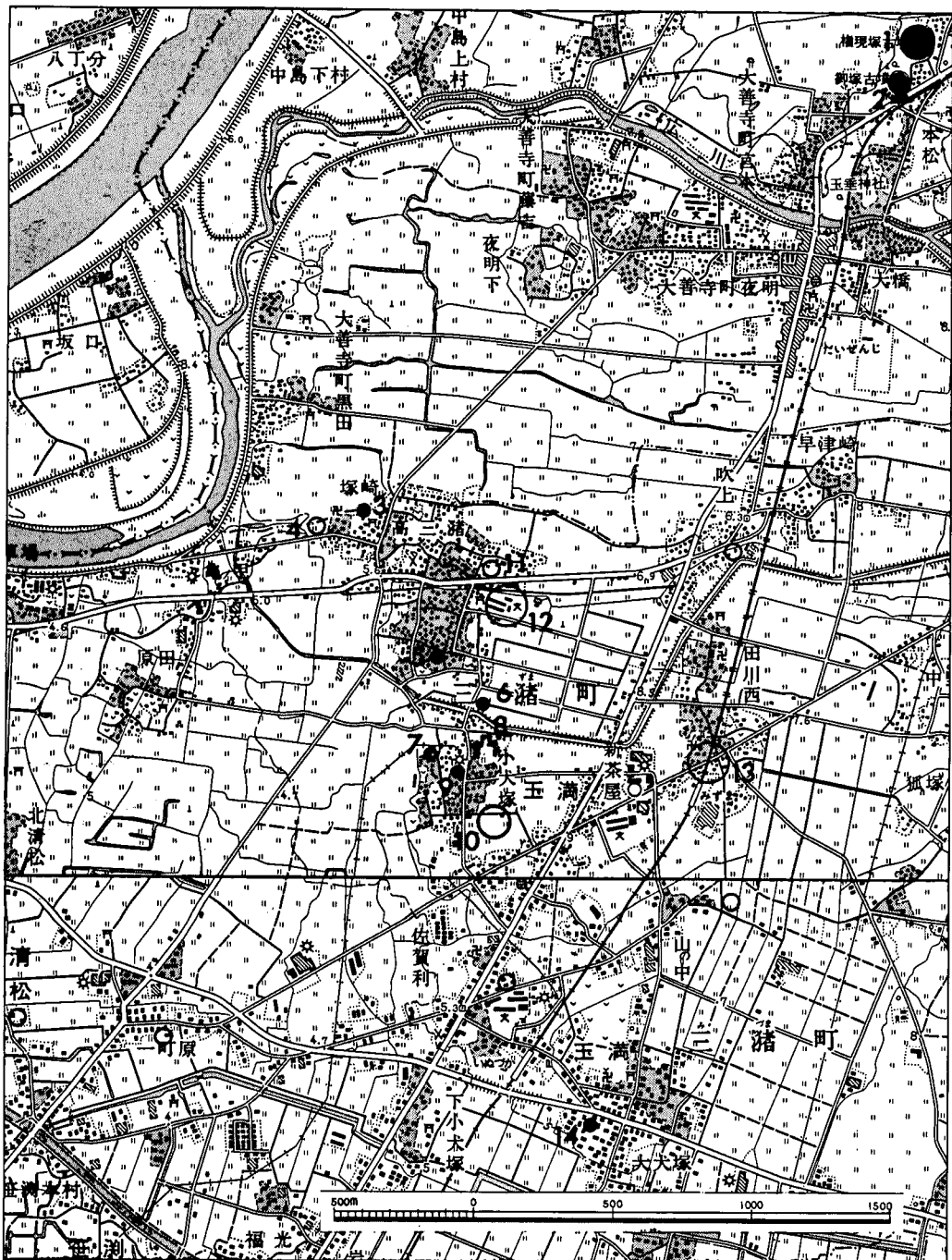
1. は じ め に

昭和58年の7月に三潞地区県営圃場整備事業地内の分布調査を実施した。この際、福岡県文化財保護指導委員の堤昭南氏に案内して頂き、1000分の1図の事業計画図をもとに現地踏査を行う。58年度事業実施予定地区のうち文化財を包蔵しそうな箇所は小犬塚と向野の2工区であった。小犬塚地区については多少の起伏はあるものの全体が様な微高地であり、工事としては、切り盛りの少ない箇所であるため、頂部付近と水路に相当する箇所を重点的に試掘した。

その結果、中世の溝状遺構や柱穴を検出し、青磁、白磁、土師器片の出土を見た。微高地頂部の納骨堂周辺部からは楕円形状を呈すると思われる弥生時代の環濠を検出した。この環濠は長径80mほどのものと思われる。平面での確認を終え埋め戻し作業を行った。試掘調査は11月19日から25日までの間で実施した。これに先だって向野地区の試掘調査は11月1日から3日の間で実施し、古墳の周溝を確認した。県水系事務所、三潞町役場の担当者と協議を行った結果当該地区については1mのカットを行う他、方法がないとの結論に達したため発掘調査を実施することとなった。発掘調査は11月14日から19日の間で実施した。調査の実施に際しては県文化財保護指導委員堤昭南氏をはじめ、三潞町郷土史研究会の有志の方々や作業員として小犬塚地区の方々の協力を頂いた。なお、試掘調査は福島建設壇守氏がバックフォアのオペレーターとして従事された、ここに記して謝意を表します。なお調査は南筑後教育事務所技術主査川述昭人が行い、調査補助員として佐土原逸男氏、田中康信氏の援助を頂いた。

2. 位 置 と 環 境

遺跡は福岡県三潞郡三潞町原田字向野に所在する。三潞町の東部は八女丘陵の最西端に相当する丘陵部分を有するが、大半部分は標高4～6mの沖積低平地である。西方の城島町、大川市よりも若干標高が高いため、当該地周辺には弥生時代から古墳時代にかけての遺跡が多く見られる。東北方向の久留米市大善寺町には御塚（帆立貝式前方後円墳）・権現塚（円墳）の著名な古式古墳が所在する。東方の八女丘陵西端部に相当する西牟田の清導寺には古式の古墳であり、内部主体が竪穴式石室とか古式の横穴式石室とか論議を呼んでいる十連寺古墳がある。当該地の周辺部には、御廟塚古墳、高三潞古墳、五十町さん古墳、浦畑古墳、どんどん山古墳等の諸古墳が現在の集落に取り巻かれたような格好で点在している。いずれも未調査であるため詳細については不明であるが、当該墳とは相前後して築造されたものと思われる。弥生時代



第11図 遺跡位置図 (1/25,000)

1. 権現塚古墳 2. 御塚古墳 3. 御廟塚古貝塚 4. 御廟塚貝塚 5. 高三瀬古墳
6. 五十町さん古墳 7. 向野1, 2号墳 8. 大塚城跡 9. 浦畑古墳 10. 小犬塚遺跡
11. 古賀遺跡 (弥生古墳) 12. 三瀬小学校遺跡 (弥・古) 13. 村田、井樋ノ口遺跡 (弥生)
14. どんどん山古墳

の遺跡は当該墳の周囲、特に東方部に多数所在している。高三瀨塚崎には弥生時代の御廟貝塚がある。

3. 遺構と遺物

遺 構

遺跡は標高4.6mの水田面に突出した舌状丘陵の先端部近くに位置するものであり、田面との比高差は2mほどである。現状は畑地であり、古墳の上に人家が建っている。調査では2基の古墳の周溝が確認されたが西側のものを1号墳と呼ぶ。1号墳は周溝の2分の1ほどを調査したが、主体部は人家の下となるため未調査である。1号墳の規模は周溝外側の径は12m、周溝幅0.8～1.2m、深さ60～70cmのものである。周溝内からは馬具、須恵器、土師器が検出された。周溝の西側部分では周溝を切った土墳墓と思われる遺構が5基検出された。

2号墳は1号墳の東方20mほどに位置し、周溝の円弧部分を一部検出した。規模は定かではないが1号墳とほぼ同一規模を有すると思われる。周溝の幅は60～70cm、深さは30～40cmのものである。

土墳墓は、その周囲から土師器皿を2個検出したため、室町時代のものであると思われる。土墳墓の形状はいずれも長方形の平面形を呈するものであり、規模は長さ1m～1.5m、幅0.8m×1m、深さ0.7m～1.3mである。なお、実測図の所在を目下捜査中であるが、見あたらないため、今回、図示できなかった点をお詫びする。

遺 物

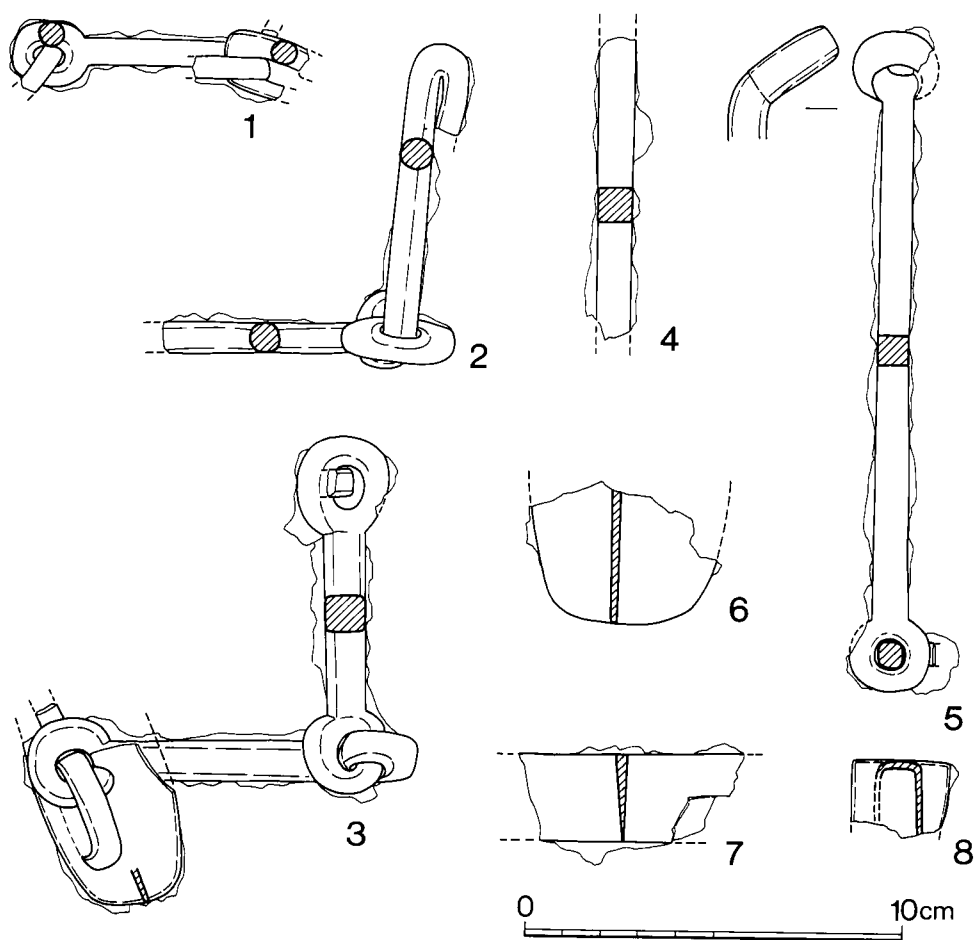
1号墳出土遺物

鉄 器（第12図、図版9）

轡（1・2）ともに周溝の南側から出土しており、この位置は主体部の前面に相当するものである。1は銜であり、二連結式のもので片方部分を欠損している。全長12.3cm程度のやや小型のものである。右側円環部には鏡板の一部が遺存している。2は1とは別づくりであり、銜と引手の部分である。断面はいずれも円形を呈している。

須恵器（第13・14図、図版9）

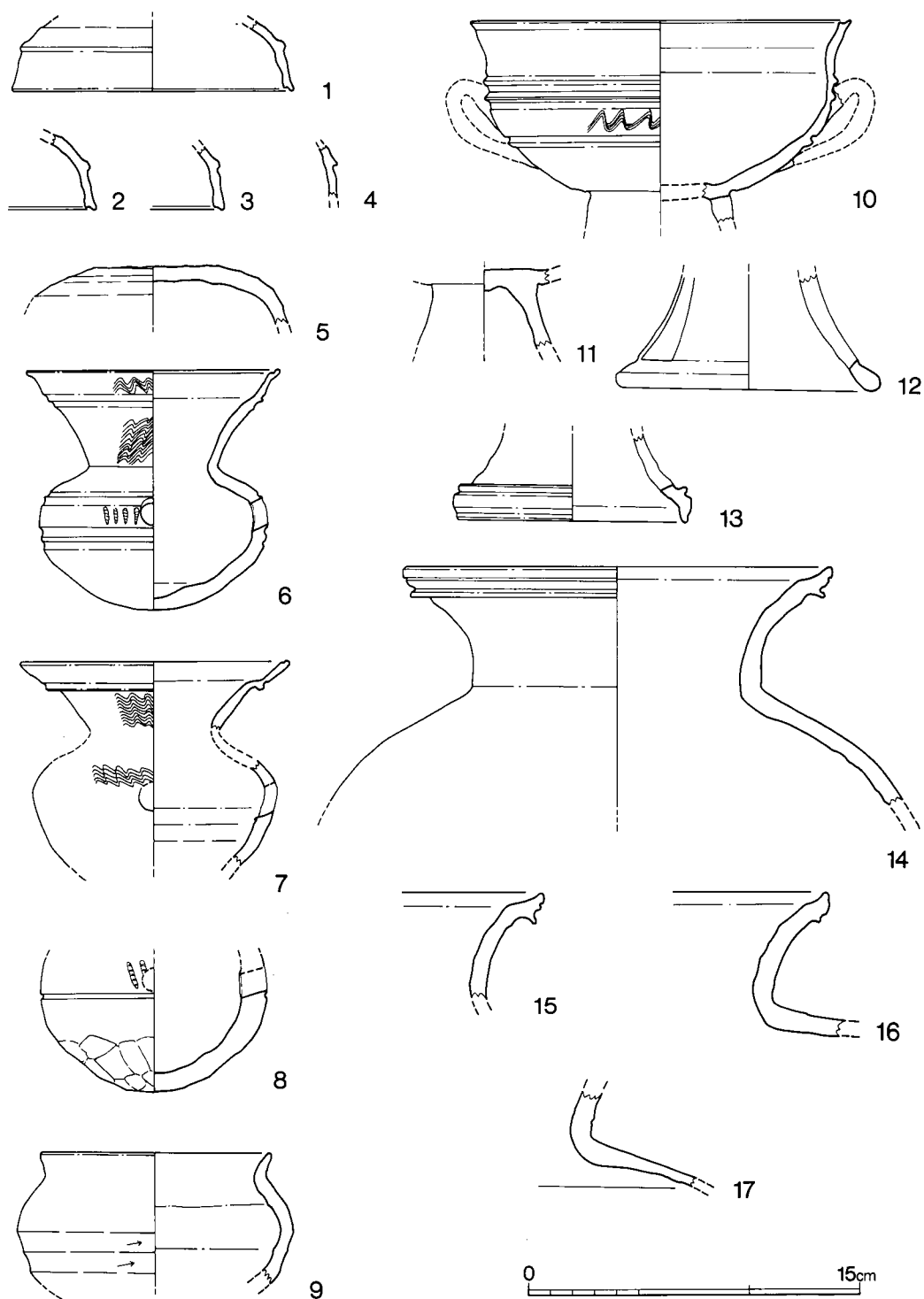
杯 蓋（1～5） 1は天井部を欠損する。口縁部はやや外方へ開いており、口部端部内面は段をなす。天井部と体部の境は断面三角形のやや甘い稜をなす。天井部外面はヘラ削りし、他の部分は横ナデ調整である。口径は12.8cmである。灰色を呈しており、焼成は良好である。胎土には小砂粒を含んでいる。2は口縁端部内面に段をもつものであり、天井部と体部の境は断面三角形の甘い稜が入る。天井部の頂部近くはヘラ削りを施しており、他は横ナデ調整であ



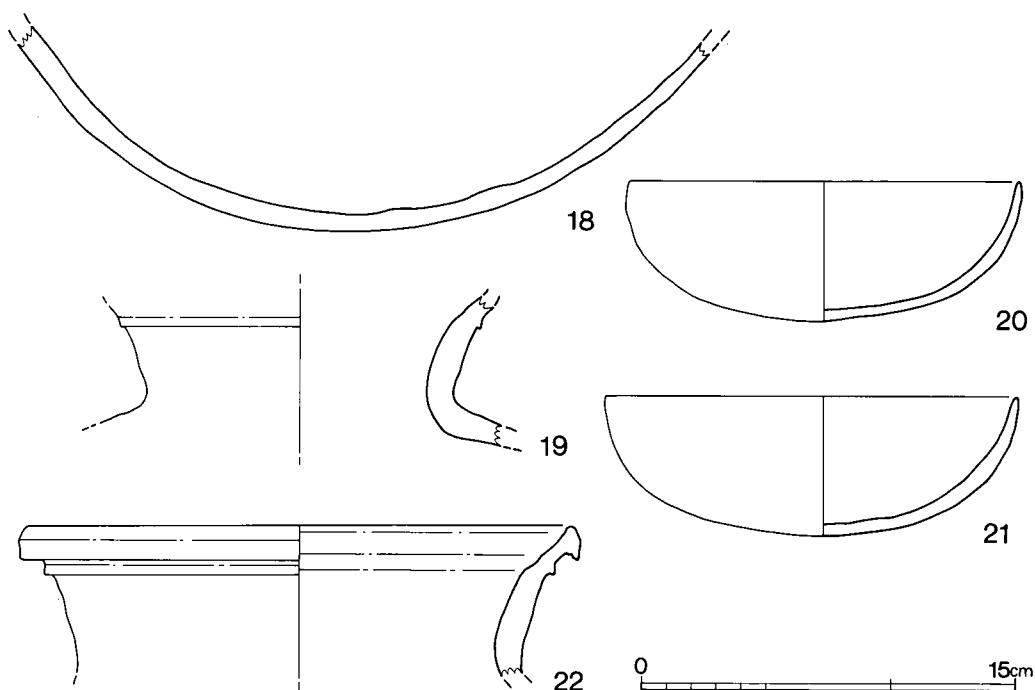
第12図 向野1・2号墳出土鉄器実測図(1/2)

る。天井部外面には自然釉が付着する。灰色を呈し、焼成は良好である。胎土には細砂粒を多く含む。3も特徴は2とほぼ同じである。4は天井部と体部の境は他の3個体に比して鋭く稜線が入るものである。5は天井部は平坦面を有しており、現存する体部、天井部の全面にヘラ削りを施している。内面はすべて横ナデ調整である。暗灰色を呈しており、焼成は良好である。胎土に多量の小砂粒を含む。

甕(6～8) 口縁端部内面に段がつく。頸部の上方、口縁部よりの位置にわずかに段を有しこの部分に2条の凹線を配している。この上下部分に波状文を施す。胴部の中央よりやや上方に円孔を有し、この位置に刺突文を配する。円孔の上下面には各2条の凹線を配する。底部はややとがり気味であり、この部分はヘラ削りの上からナデ調整を施している。他の部分は横ナデ調整である。口径11.5cm、器高10.9cm、胴部最大径10.3cmを測る。灰色を呈しており、焼成は良好である。胎土は精選されていて良好である。7は口縁端部内面は段をなさず、1条の



第13図 向野1号墳出土須恵器実測図(1/3)



第14図 向野1・2号墳出土須恵器・土師器実測図(1/3)

細い沈線が入る。頸部の中ほどよりやや上方部に段をもち、口縁部は外反する。頸部には波状文が入る。胴部やや上方に肩を有し、この部分に円孔を配する。円孔上面部に波状文が入る。底部外面はヘラ削り上をナデている。他の部分は横ナデ調整である。暗灰色を呈しており、焼成は良好である。胎土は若干の砂粒を含むが良好である。口径12.2cm、胴部最大径11.1cmである。8は胴部のみである。底部外面は静止ヘラ削りを施しており、他の部分は横ナデ調整である。円孔直下に1条の沈線を配する。全体に厚手造りであり、器形も若干いびつである。灰色を呈し、焼成はやや軟質である。胎土に微砂粒を含む。胴部最大径は10.2cmである。

埴(9) 口縁部は短く外反しており、端部は丸い。体部の中位以下の広範囲をヘラ削りし、他の部分は横ナデ調整である。口径10.5cm、胴部最大径12.5cmを測る。灰色を呈しており、焼成は良好である。胎土には大粒の砂粒を多量に含んでいる。体部上面部分に自然釉が付着する。

高杯(10~13) いずれも無蓋高杯である。10は杯部は深く、口縁部は体部中ほどから若干外湾する。口縁端部内面は段が入る。体部中央部に2条の三角突帯を配している。波状文の下部には1条の沈線を配する。把手は基部近くを残すのみであり、これは波状文を施した後で接合している。内外面とも横ナデ調整である。脚部の若干を遺存しており、透孔が入る。口径は17.2cmを測る。暗灰色を呈しており、焼成は良好である。胎土は精選されていて良好である。杯部内面は自然釉が付着する。11は脚上半部である。長方形を呈すると思われる透孔が入る。

内外面とも横ナデ調整である。灰色を呈し、焼成は良好である。胎土にはわずかに小砂粒を含む。12は脚下半部である。脚裾部は丸くつくられている。透孔は4カ所に長方形のものが入ると思われる。口径12cmである。灰色を呈し、焼成は良好である。胎土には小砂粒を含む。外面は自然釉が付着する。13は脚部内面の端部近くを直立させ、端部外面の上方に段を有する。口径は10.5cmである。灰色を呈しており、焼成は良好である。胎土には若干の砂粒を含むが良好である。

甕 (14～19) 5個体分出土している。14は18と同一個体であろう。14、15ともに似たつくりの口縁部形態である。口縁部の側面下方に稜の鋭い突帯を配している。胴部外面は叩きをナデて完全に消し去っており、内面も同心円叩きを丁寧に消している。内底部は目の細かい弧状叩きを縦横にナデて消している。口径19.4cmである。灰色を呈しており、焼成は良好である。胎土には小砂粒を含む。16は口唇部下面に凹線を配する。口頸部は内外面とも横ナデ調整である。胴部外面は平行叩き上をカキ目調整する。色調は外は灰色、内は小豆色を呈する。胎土に多量の小砂粒を含んでおり、焼成は良好である。17は胴部外面は平行叩き上をカキ目調整し、内面は同心円叩きのままである。19は口縁部を欠損している。頸部外面に段を有し、上下面に波状文を配する。胴部外面は平行叩きが入り、口頸部内外面は横ナデ調整である。淡小豆色を呈し、焼成不良品。胎土に小砂粒を含む。

土師器 (20・21) 周溝の底面近くから検出された。内外面ともナデ調整である。口径は20が15.6cm、21が16.6cm、器高は5.6cmと5.5cmである。色調は20は赤褐色、21は外面黄褐色、内面赤褐色を呈する。焼成は良好であり、胎土に小砂粒を含む。

2号墳出土遺物

鉄器 (第12図3～8、図版9)

轡 (3～6) 3は銜と鏡板の片方、引手の若干部分である。銜は二連結式のもので、全長17.5cmを測る。断面は10mm×11mmで方形を呈している。左側の円環部分には鏡板が付く。6は右側部分に取りついた鏡板である。鏡板は厚さ2mmの鉄板であり、端部を丸くつくる。幅は5.5cmで全長は8cm程度と思われる。4・5は引手である。5は全長17.5cmのもので、引手壺は径2.4cmの円環である。棒状部分は径8cmを測り、方形を呈する。

大刀 (7) 幅23mm、棟幅2.5mmを測る小片である。

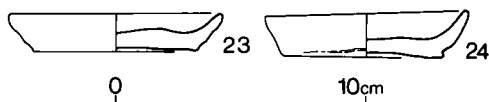
鞘口金具 (8) 長さ2.5cm、厚さ1.3cmを測る。

須恵器 (22) 口唇部は下方へ鋭く突き出しており、頸部上面に三角突帯を有する。頸部外面は平行叩き上をナデ調整し、他の部分は横ナデを施している。口径21.8cmである。灰色を呈しており、焼成は良好である。胎土には小砂粒を含んでいる。

土墳墓出土遺物

土師器 (第15図、図版8)

皿 (23・24) ともに周溝内の土墳墓検出作業中に出土した。横ナデ調整であり、底部外面は糸切りである。口径8.1cm～8.6cm、底



第15図 土墳墓出土土師器実測図 (1/3)

径6.3cm～6.6cm、器高1.6cm～1.9cmである。淡褐色を呈しており、焼成は良好である。胎土は精選されていて良好である。

4. お わ り に

1. 向野1・2号墳はともに周溝の一部だけの調査であったが馬具、須恵器、土師器等の貴重な遺物を検出することができた。内部主体については1号墳は人家の下、2号墳は隣接する建築物により既に削平されてしまって不明である。1号墳については主体部は箱式石棺か古式の横穴式石室と思われる。

2. 須恵器は1号墳からは杯蓋5、甕3、埴1、高杯4、甕5が出土し、2号墳からは甕1が出土した。1号墳出土の須恵器は次の特徴をもつ。杯蓋は口縁端部内面は平坦面ではなく段をもち、口縁部はわずかに外方へ開く。天井部と体部の境は断面三角形の稜をもち、この稜はやや甘い稜線のものと鋭くとがるものがある。天井部は平坦面をなす。

甕は小型品のみであり、口頸基部はやや太目である。底部の調整法は3個体のうち2個体は回転ヘラ削り調整であり、1個体のみより古式の手持ちヘラ削り調整である。頸部は2段に波状文を施すのと1段のみのものの両者が見られる。胴部の円孔周辺部の文様は刺突文と波状文の両者が用いられている。

無蓋高杯は杯部が深い、口縁部は外反しており、端部は段をなす。高杯の脚部は端部が丸いものと、端部内面が立ってきて、外上方に断面三角形の稜が入るものがある。時期差のようであるが陶邑Ⅰ型式3段階^(註1)においては両者が同時期に存在するためあえて2時期に分ける必要もなかろう。

甕の頸部はやや上方に断面三角形の稜をもつものと否のものがあるが、いずれもⅠ型式3段階と考えられる。胴部については叩き目を丁寧に消したものと、叩き目を残すものとが見られるが、前者の方がより古式な手法ではある。

以上須恵器の特徴は、陶邑Ⅰ型式3段階とみなして大過ないものである。

3. 古墳の年代は須恵器の型式より5世紀後半の年代を比定できよう。

4. 土墳墓は出土した土師器から室町時代の所産と思われる。

註1 大阪府教育委員会「陶邑Ⅰ」大阪府文化財調査報告書28 1976



向野 1 号墳近景



向野 1 号墳周溝と土壙墓



24



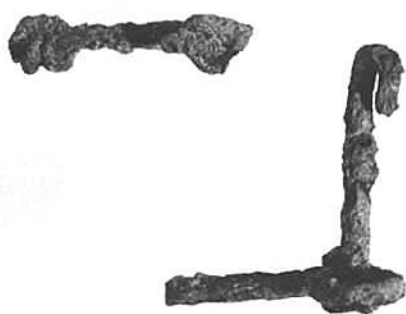
23

土墳墓出土土師器

土墳墓



向野 2 号墳



Ⅳ 三船山遺跡の調査

1. は じ め に

昭和58年度の瀬高町における圃場整備事業は瀬高北部、瀬高東部、瀬高南部の3地区で実施された。これに先だって事業計画図をもとに町教育委員会教育課猿渡一範氏とともに現地調査を行った。3地区のうち瀬高南部の当該年度工事予定地区には文化財は所在しないと判断されたため、2地区のみの分布調査であった。この分布調査の結果、それぞれの事業地内には試掘を必要とする地点が数ヶ所あることが予想された。北部については、前年度に広範囲に試掘を実施して遺跡の範囲確認は終了しているため、今回は水路部分だけの試掘となった。東部については、59年度実施地区内の発掘調査が必要であることが判明した。こうして当初から把握されていた圃場整備事業の試掘調査を終えようとする頃になって新たに新農構造改善事業として工事が行われることを知った。当該地が三船山遺跡の所在地である。早速、分布調査を実施した所、黒曜石等の散布が見られるため、試掘調査の必要を感じた。現地はミカン園であるため、ミカン収穫後でないと試掘は実施できず、一方工事としてはミカン収穫直後から開始という非常に緊迫した状況の中で12月の中旬に試掘を行った。試掘調査の結果、頂部平坦面は削平されていて遺跡は所在しておらず、西側の傾斜面部分に遺存していることが判明した。発掘調査は59年1月5日から2月3日の間に実施し、弥生時代中期末から後期にかけての住居跡24軒を検出した。

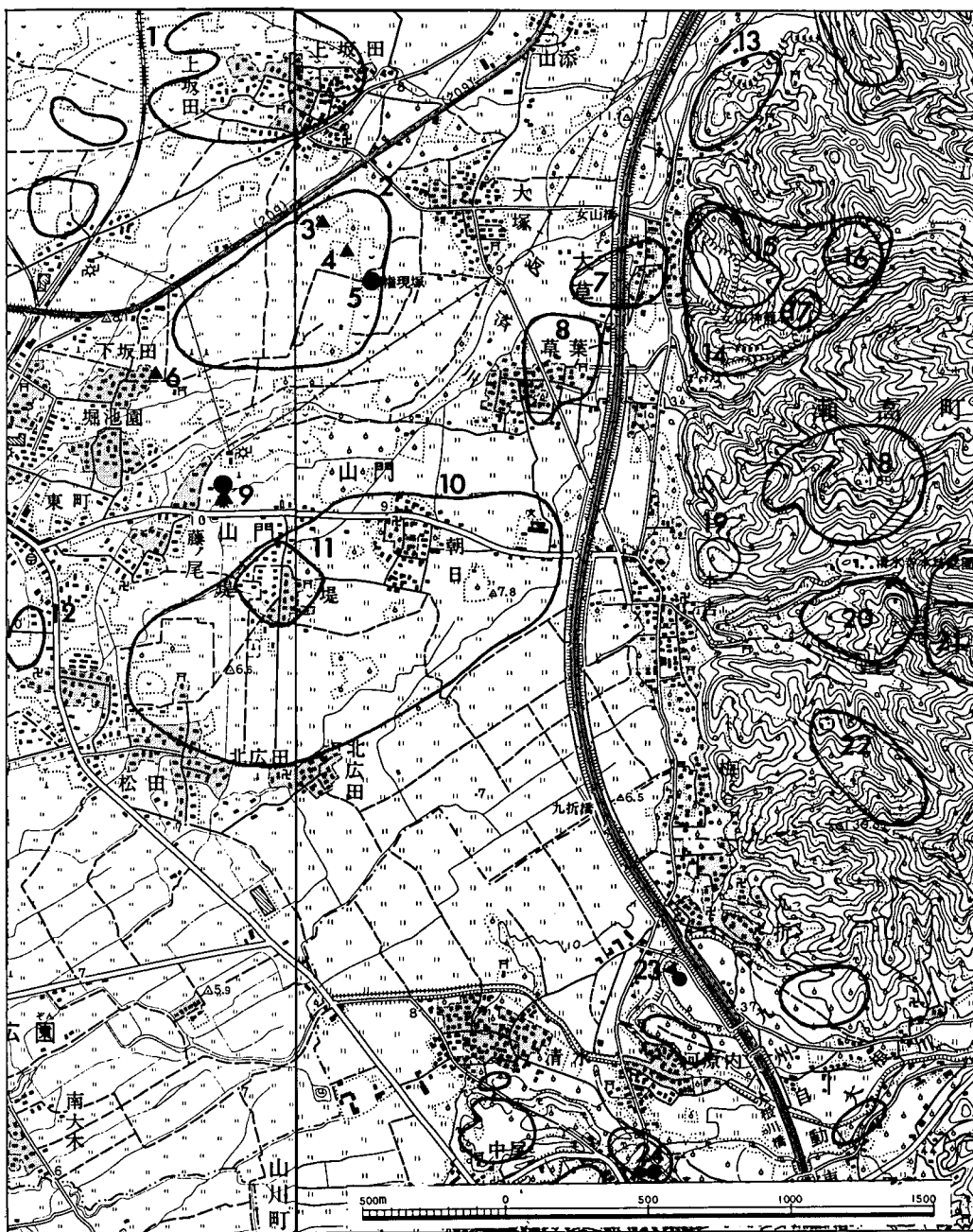
調査関係者は下記のとおりである。

調査担当者 福岡県教育庁南筑後教育事務所 技術主査 川述昭人

〃 文化課 主任技師 池辺元明

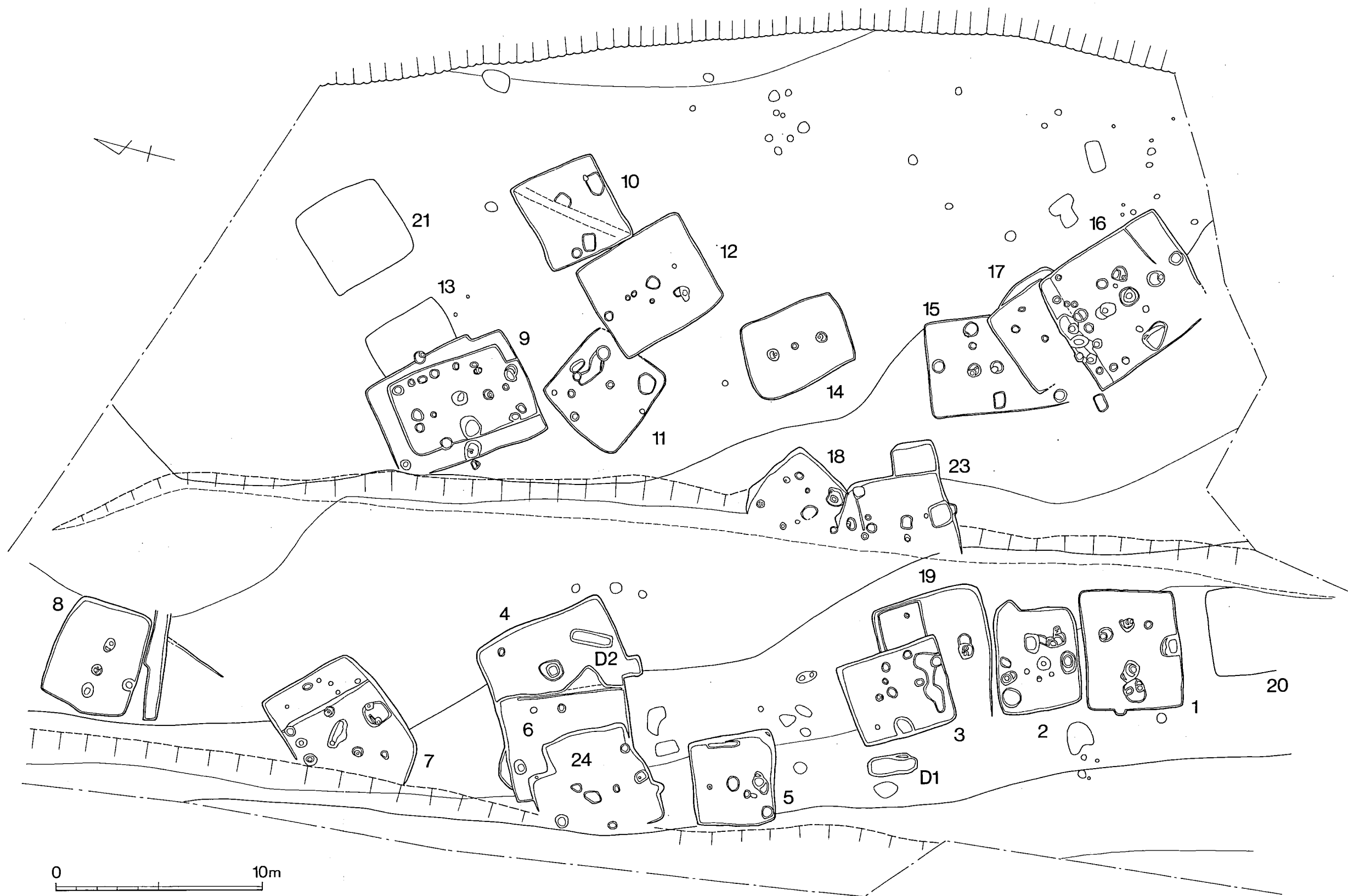
実測に際しては県文化課主任技師木下修、技師伊崎俊秋、調査補助員佐土原逸男、田中康信の諸氏、諸兄のご協力を頂いた。記して謝意を表します。なお、特に調査の前半は担当者が他遺跡の調査とのかけ持ちのため思うように動けず町教育委員会の猿渡一範、日高弘光両氏に多大な負担をおかけしたことをお詫び致します。

調査に当っては、瀬高町教育委員会をはじめ、瀬高町郷土史研究会の方々、発掘調査に従事された地元作業員の方々の協力により、調査を無事に終了することができた。記して感謝の意を表します。



第16図 遺跡位置図 (1/25,000)

1. 坂田遺跡 (弥生~古墳) 2. 権現塚遺跡 (縄文~平安) 3. 中國遺跡 (注口土器出土)
4. 権現塚北 (58年調査地点) 5. 権現塚古墳 6. 石棺出土地点 7. 大道端遺跡 8. 草場遺跡
9. 車塚 10. 山門遺跡 11. 堤古墳群 12. 東町遺跡 13. 日吉坊古墳群 14. 女山神籠石
15. 長谷横穴群 16. 相撲場古墳群 17. 山内古墳群 18. 獅子穴古墳群 19. 三船山遺跡
20. 清水谷古墳群 21. 清水山古墳群 22. 高塚古墳群 23. 大塚古墳 24. 赤坂1号墳



第17図 三船山遺跡遺構配置図 (1/200)

2. 位置と環境

遺跡は福岡県山門郡大字本吉三船に所在する。当該地は標高200～400mの筑肥山地の西山麓の裾部に位置している。標高50.5m～48mの西側斜面に営まれている住居跡群からはるか西方の有明海を眺望することができ、眼下に広がる田面の下には弥生時代後期、古墳時代後期から奈良時代前期にかけての竪穴住居跡149軒が検出された大道端遺跡が所在する。矢部川左岸の沖積微高地には縄文時代後、晩期の中園遺跡をはじめ、権現塚北遺跡がある。弥生時代前期の墓地群（土壌墓群）としては国道209号線の南の下坂田で昭和59年12月にその一部が明らかとなった。中期から後期にかけては権現塚古墳の北、南遺跡から甕棺墓、石棺墓が発見された。古墳時代の住居跡もこの周辺部にその基盤を同じくしている。三船山遺跡西1.5kmの堤の集落から弥生時代中期前半の成人用の合口甕棺墓が2基、昭和56年に調査された。これより以前にも甕棺、石棺が検出されており、一帯は広く墓地群を構成していることが判る。古墳は北から権現塚古墳、車塚前方後円墳、大塚前方後円墳（山川町）の著名なものがあり、東部の山麓には多数の古墳群、横穴群が築造されている。女山神籠石は北へ6～700mの距離である。

3. 遺構と遺物

遺 構

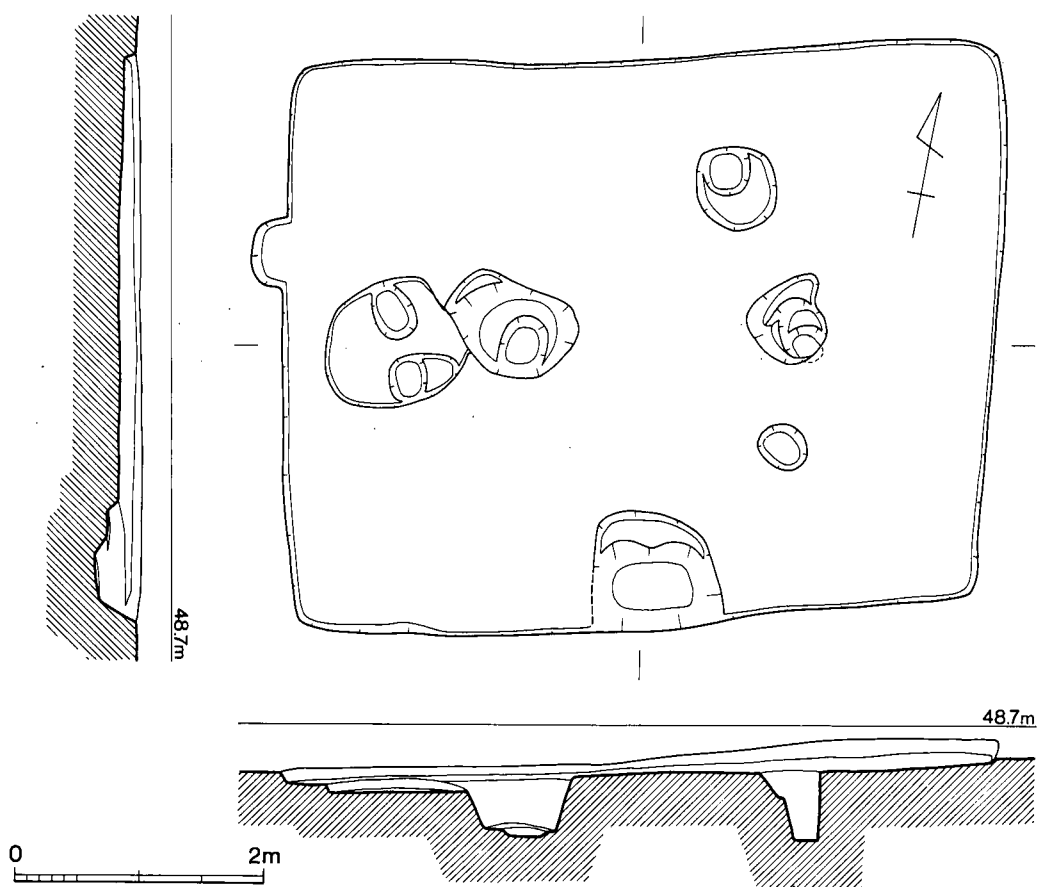
(1) 住居跡

第1号住居跡（第18図、図版11）

調査区の南西隅に位置し、北側の2号住居跡との距離は数10cmしかない。長方形の平面プランを呈し、長軸5.15m、短軸4.5m、床面積25.48㎡を測る。支柱穴は2本あり、西側は径75cm・深さ45cm、東側は径47cm・深さ57cmで、それらの心点距離は225cmである。主軸の方位はN-79°-Eをとる。炉は明確な掘り込みはないが中央部でわずかに焼土が見られた。南辺中央の壁に接して95×105cmほどの長方形の土壌がある。深さは約20cmである。床は東から西へわずかに傾斜している。壁は3～13cmが遺存していた。

第2号住居跡（第19図、図版11）

発掘区の南西隅で、19号住居跡・1号住居跡にはさまれて検出された隅丸長方形のプランを呈する住居跡である。北東隅がやや張り出している。長軸4.15m、短軸3.83m、床面積15.90㎡を測る。支柱穴は長軸線上の2本と考える。西側は径25cm、深さ48cm、東側は90×70cmの長方形をなし深さは55cm、心点距離は約180cmを測る。主軸方位はN-71.5°-Eをとる。床面には焼土が全面に広がる。炭化材が数ヶ所で検出され、焼失住居と考えられる。炉は、中



第18図 1号住居跡実測図 (1/60)

央やや南西よりにあり、径78cm、深さ約20cmある。壁高は10～30cmが遺存する。

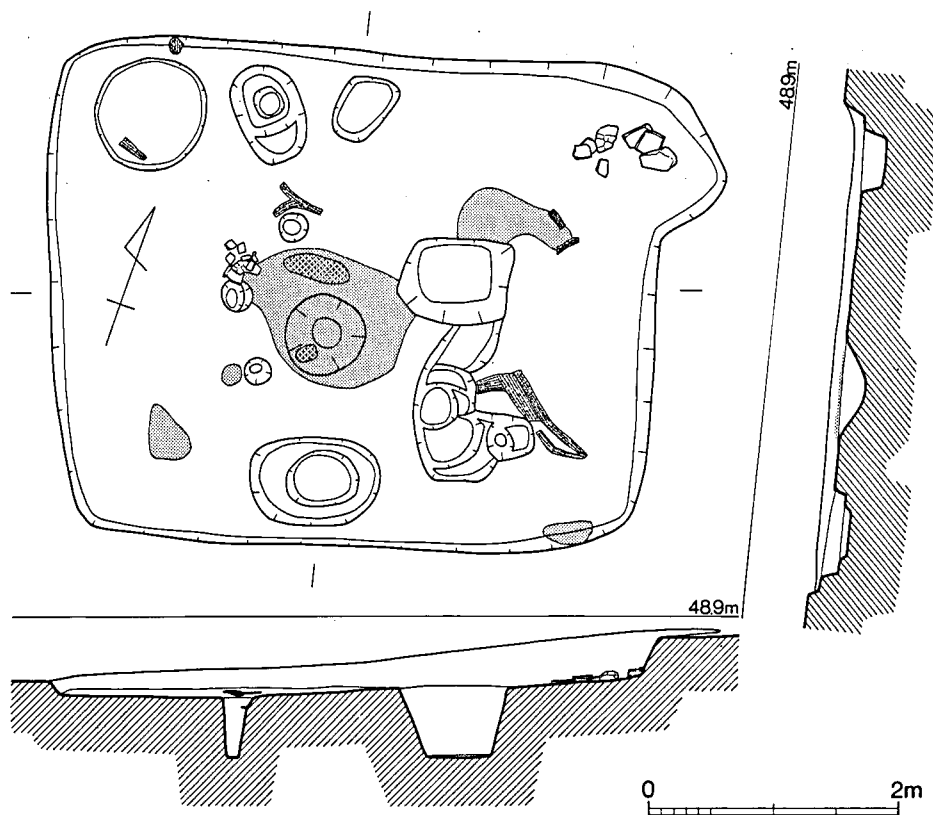
第3号住居跡 (第20図、図版11)

2号住居跡の北側に位置し、19号住居跡を切っている。長軸4.95m、短軸3.90mを測る長方形の住居跡である。7本の柱穴があるが、長軸線上の2本が主柱穴と考えられる。北西側は径35cm・深さ35cm、南東側は径約40cm、深さ17cmを測り、心心距離は約210cmある。主軸方位はN-32°-Wを示す。炉は中央よりやや北西側にあって径40cm、深さ約8cmを測る。南西辺中央に深さ約20cmの土壌がある。壁は約20cmを残していた。

第4・6・24号住居跡 (第21図)

4・6・24号住居跡はそれぞれ切り合うが、遺構検出面で切り合い関係が不明のまま掘り下げたため新旧関係は明確でない。また開墾により、北東から南西に傾斜をもって削平されているため、南西側の壁は明確にすることができない。

4号住居跡は、床面で検出した2段掘りの円形の穴の埋土にわずかながら焼土が混入してお



第19図 2号住居跡実測図(1/60)

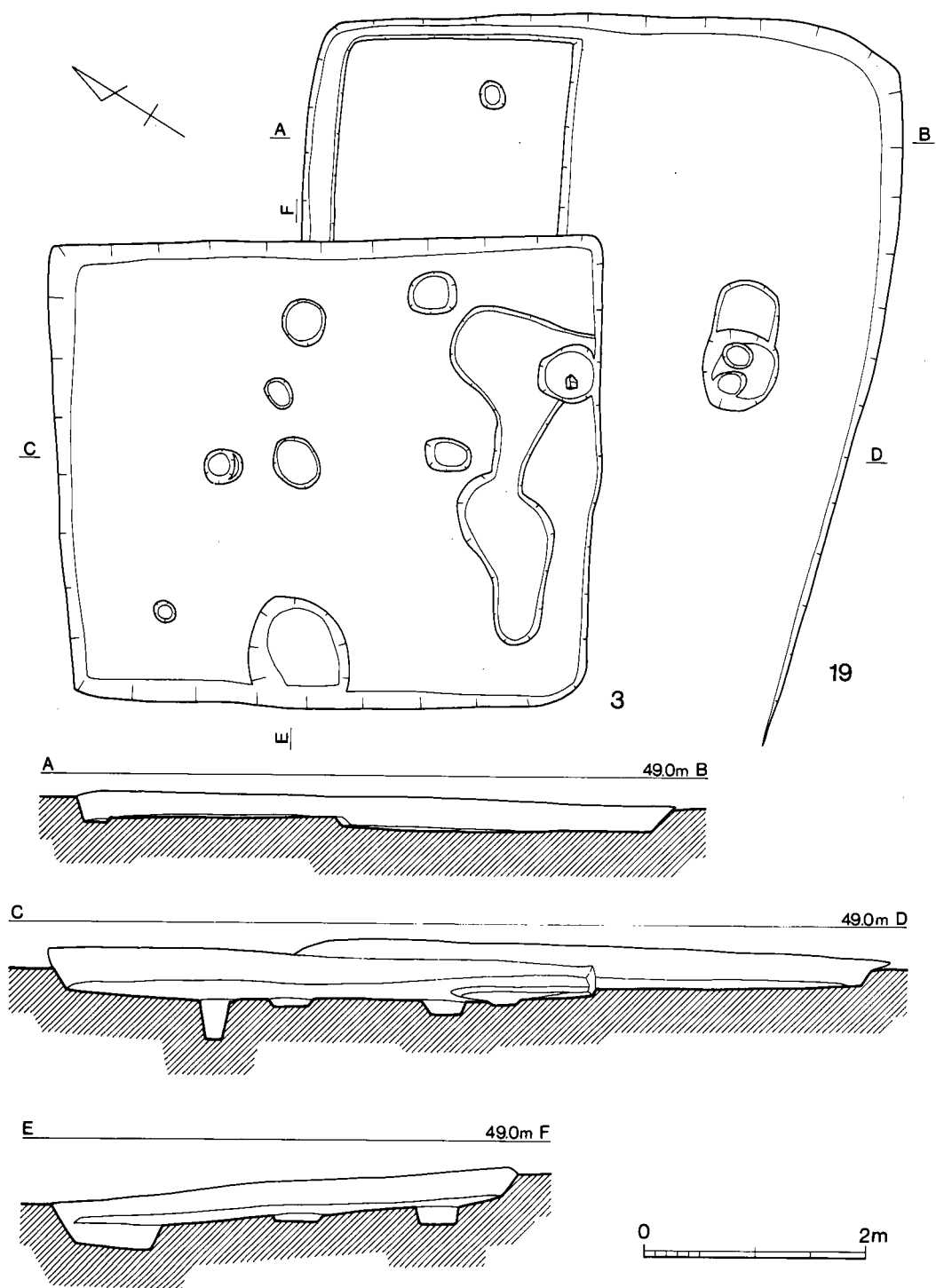
り住居中央の炉の可能性が大きい。これによって住居を復元すると、長軸約6.5m、短軸約5mで主軸を北西から南東方向にとる長方形の住居となる。主柱穴は不明である。南東辺には張り出部がある。また床面から203×68cmの土壌を検出した。

6号住居跡は西辺と北西・南東の隅を残すのみで規模その他は不明である。西辺の長さは、5.95cmを測り、これに沿って幅約7～8cm、深さ3～4cmの細い溝が存在する。

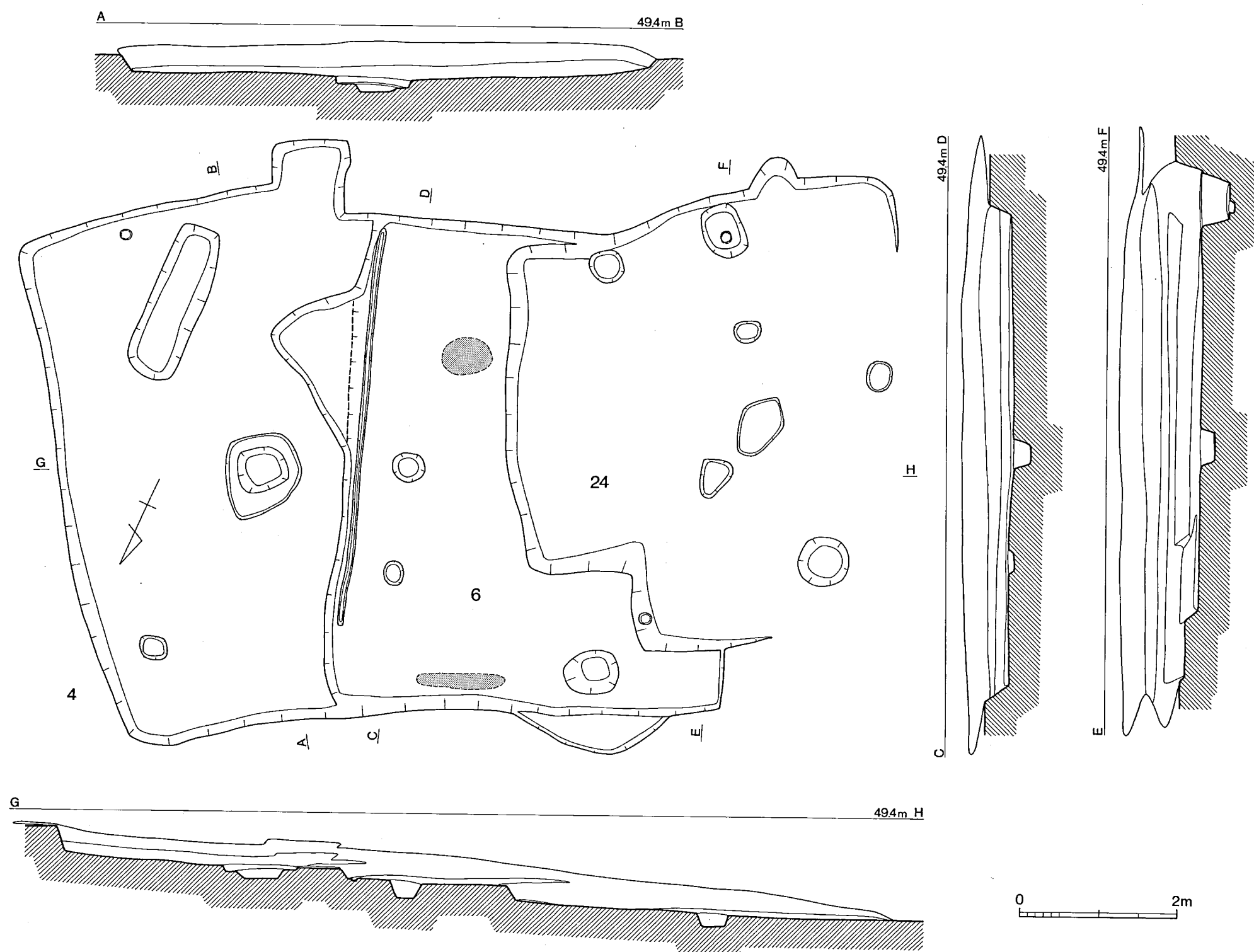
24号住居跡は、西側は開墾によって削平を受けているが、長軸5.5m、短軸4.7m程の規模になると推定できる。北隅にはベッド状遺構の存在も考えられる。床面には7個の穴があるが、主柱穴その他は不明である。

第5号住居跡(第22図、図版12)

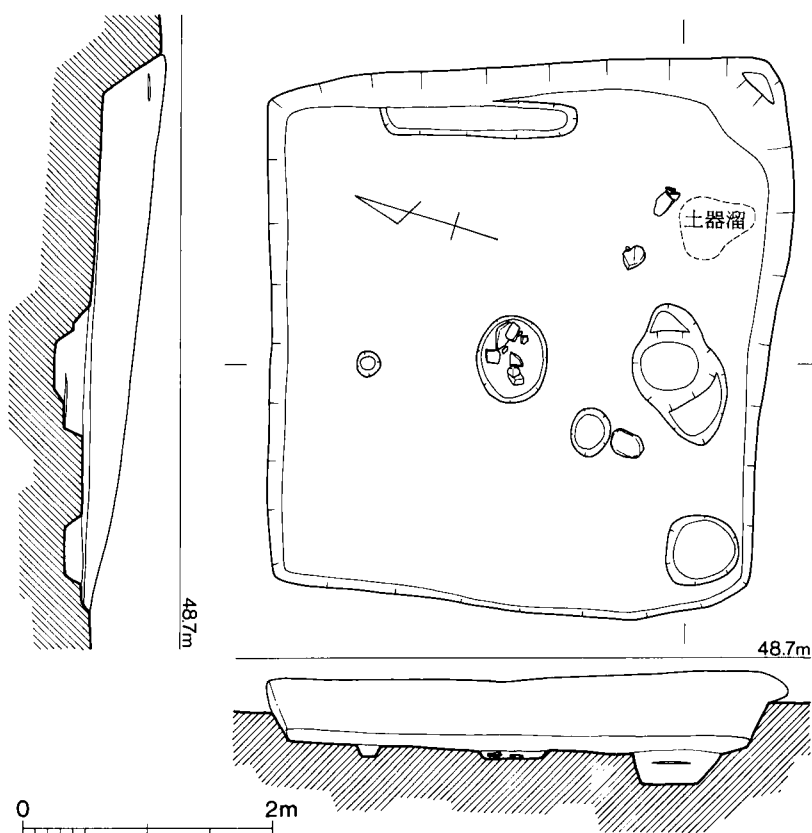
調査区西隅から検出した、長軸4m、短軸3.7m、床面積14.8m²を測る方形の住居跡である。柱穴は4個検出したが、短軸上の2本が主柱穴と考えられる。北側は径20cm・深さ10cm、南側は径70cm、深さ30cmで、それらの心点距離は2.42mである。主軸方位はN-18°-Wをとる。炉は床面中央に設けられている。東辺中央に溝状の掘り込みがある。壁高は残存状況のよい東壁で約50cmである。



第20図 3・19号住居跡実測図 (1/60)



第21図 4・6・24号住居跡実測図 (1/60)



第22図 5号住居跡実測図（1/60）

第7号住居跡（第23図、図版12）

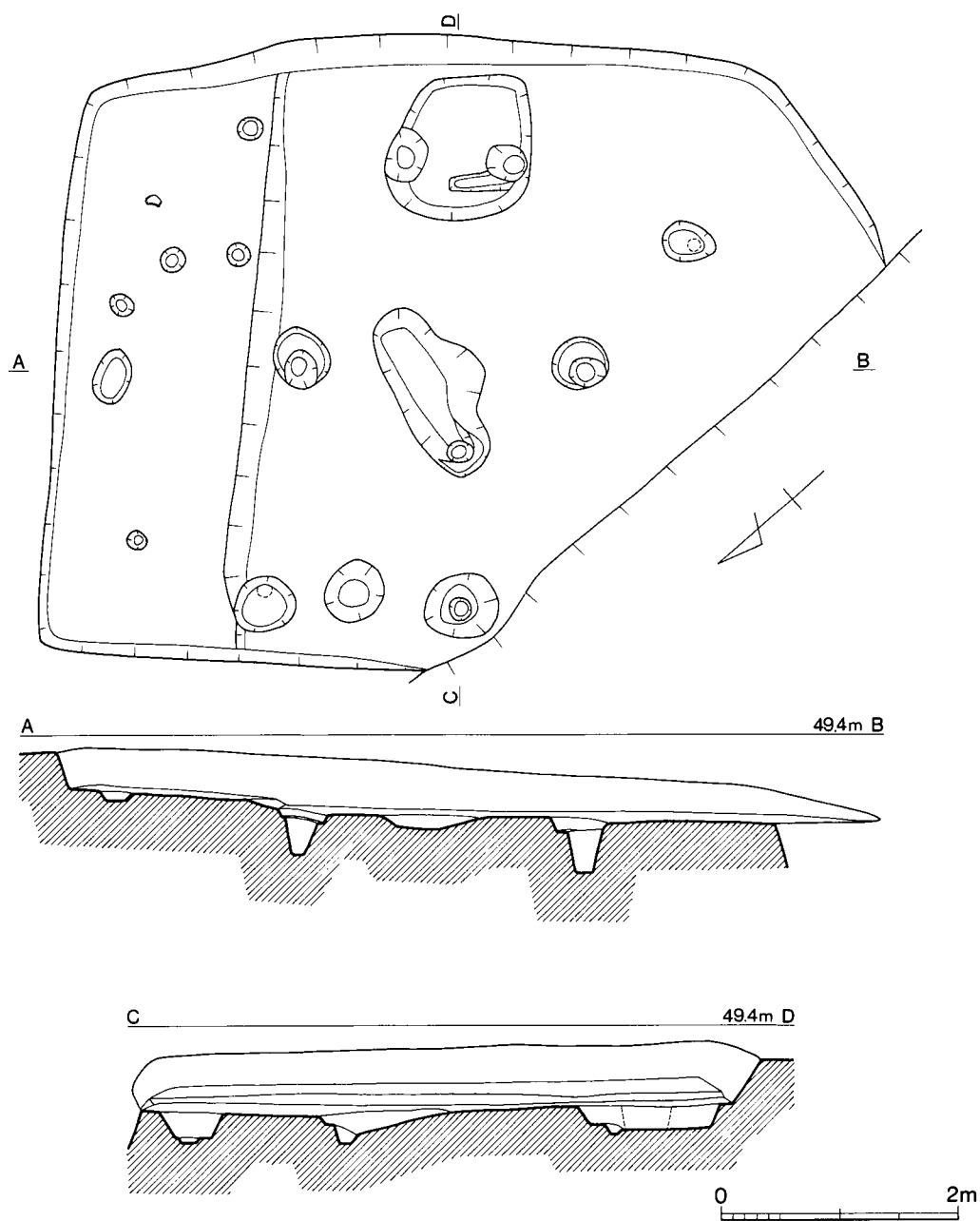
西側の隅を開墾により削平されている長方形の住居跡である。長軸は約7m、短軸は約5mを測る。主柱穴は長軸線上の2本でいずれも2段掘りの柱穴である。北西側径42～52cm、深さ36cm、南西側径45～48cm、深さ45cm、心心距離は2.42mである。主軸の方位はN-41°-Eをとる。この住居は焼失しており、床面には灰が堆積し、炭化材も検出した。炉は中央の隅丸長方形の掘り込みと考えられる。ベッド状遺構は、北・南側の壁に沿って、長さ4.2cm、幅約1.5mで削り出されている。また北東辺中央に隅丸方形の土壇がある。

第8号住居跡（第24図）

調査区の北西隅から検出した、長軸約5.1m、短軸約4.2mの隅丸長方形の住居跡である。主柱穴は2本で、西側は径58～72cm・深さ43cm、東側は径45～70cm・深さ46cm、心心距離は260cmある。主軸の方位は、N-76°-Wをとる。炉は床面中央に設けられている。壁の高さは、7～27cmが遺存していた。

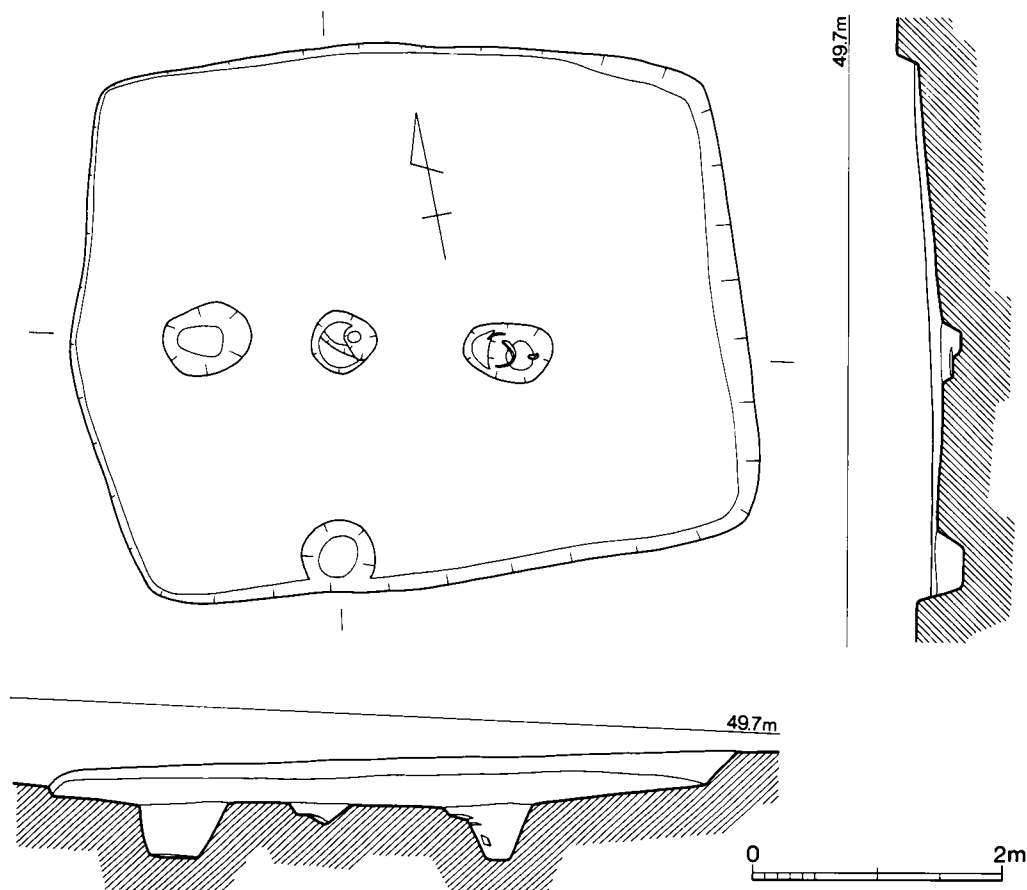
第9号住居跡（第25図、図版13）

調査区の中央やや北よりから検出した長方形の住居跡で、13号住居跡を切っている。長軸



第23図 7号住居跡実測図 (1/60)

7.28m、短軸5.45m、床面積約40㎡を測る。床面には16個の柱穴があるが、主柱穴は、床面中央の炉の両側の長軸線上の2本あるいは4本と考えられる。主軸方位はN-35°-Wにとる。ベッド状遺構は南東側の一部を除き、壁に沿ってコの字型に削り出されている。炉の南西側ベッ



第24図 8号住居跡実測図 (1/60)

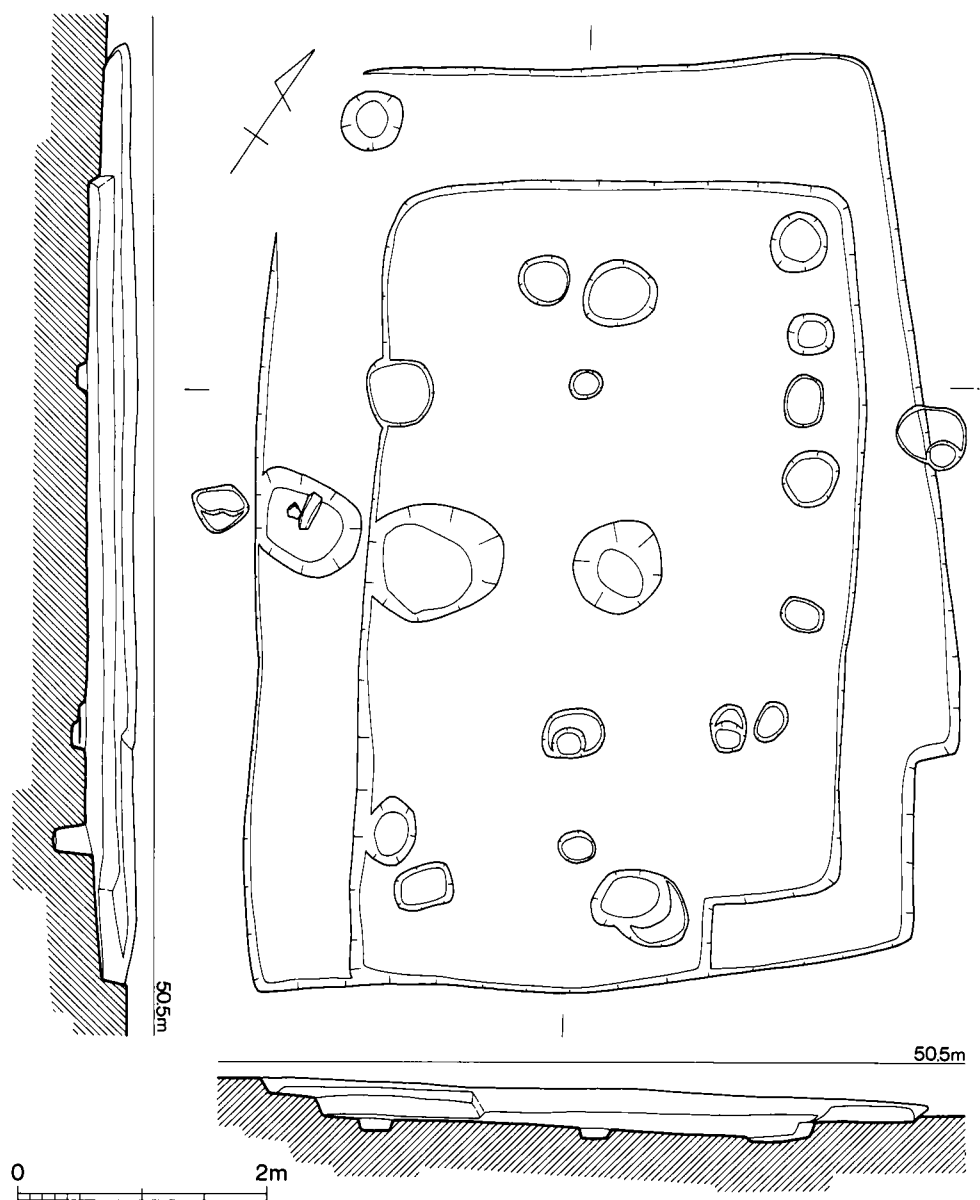
ド遺構の壁に接して楕円形の土壌がある。壁は高さ10cm前後を残すのみである。

第10号住居跡 (第26図、図版13)

調査区の北東側に位置し、12号住居より新しい長方形プランを呈する住居跡である。長軸4.35m、短軸3.88m、床面積16.88㎡を測る。全体に灰が堆積し、床面北西部には、帯状に焼土が確認できた。床面に開墾による攪乱された部分が住居を斜めに走る。床面には、4個の掘り込みがあるが、柱穴は検出できなかった。中央やや北東よりの掘り込みには焼土がつまっております。住居の主軸方向は、N-43°-Eにとる。壁高は約10cmを残すのみである。

第11号住居跡 (第27図、図版13)

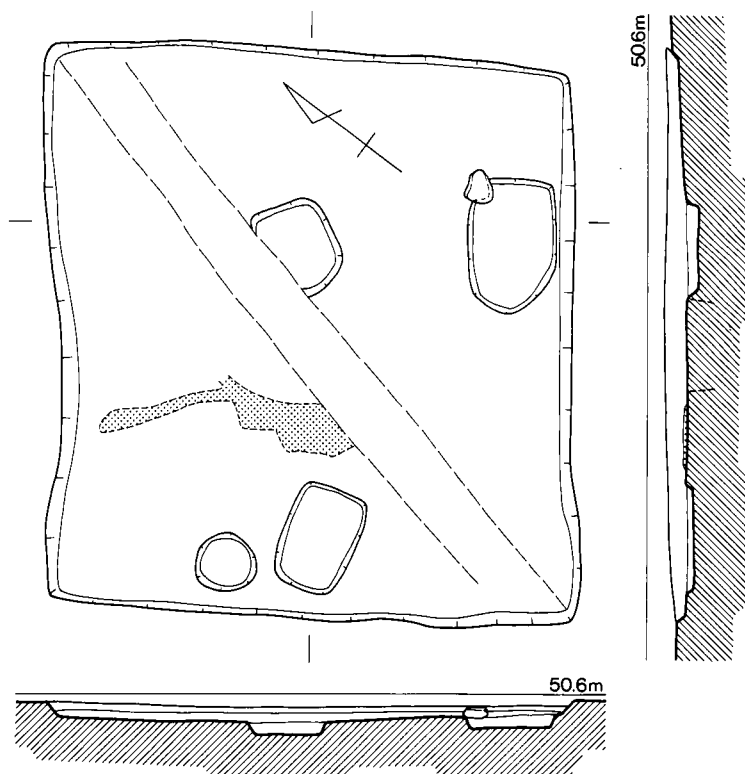
12号西側に位置し、東壁の一部で接するが、新旧関係は明確ではない。南北4.6m、東西約4.4mの方形に近い隅丸のプランを呈する住居跡である。床面積約20㎡を測る。主軸方位はN-21°-Eをとる。主柱穴、焼土等は不明である。壁高は10cm前後が残存していた。



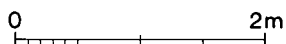
第25図 9号住居跡実測図（1/60）

第12号住居跡（第28図、図版13）

調査区の中央部から検出した住居跡で、北東側の壁で11号住居跡と接するが新旧関係は明確ではない。長軸5.6m、短軸4.9m、床面積27.44㎡を測る。長方形の平面プランで主軸方位は、N-48°-Wをとる。主柱穴は2本あり、北西側は径23cm・深さ34cm、南東側は径22cm、深さ37cmで、それらの心心距離は266cmである。炉は床面中央に設けられている。南東辺中央の壁



第26図 10号住居跡実測図 (1/60)



に接して、120×80cmの土壌が掘り込まれている。明確なベッド状遺構はないが、北東側の床面がやや高くなっている。壁は高さ10～20cmが残っている。

第13号住居跡 (図版13)

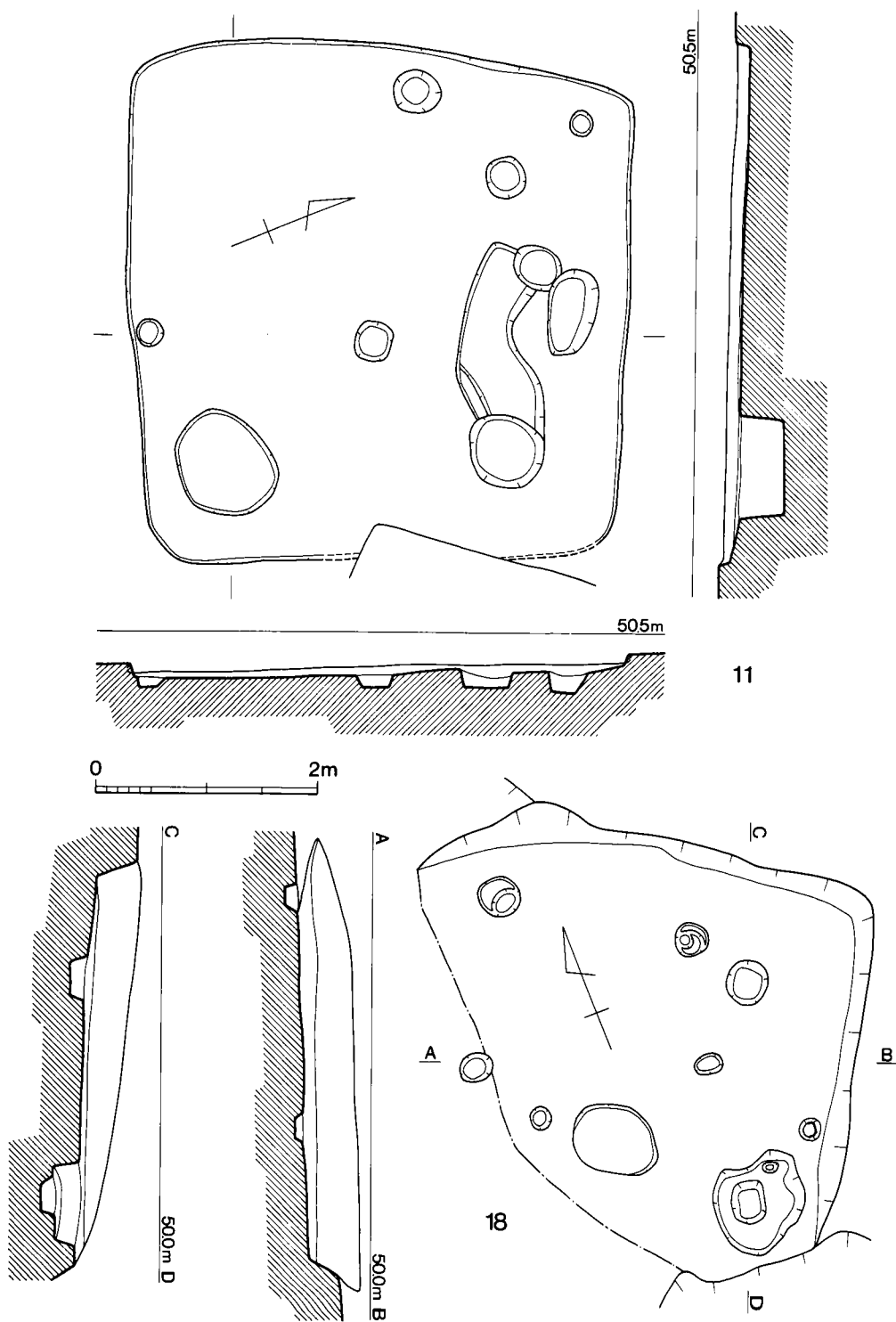
上部を開墾によって削平されているため詳細は不明である。

第14号住居跡 (第29図、図版13)

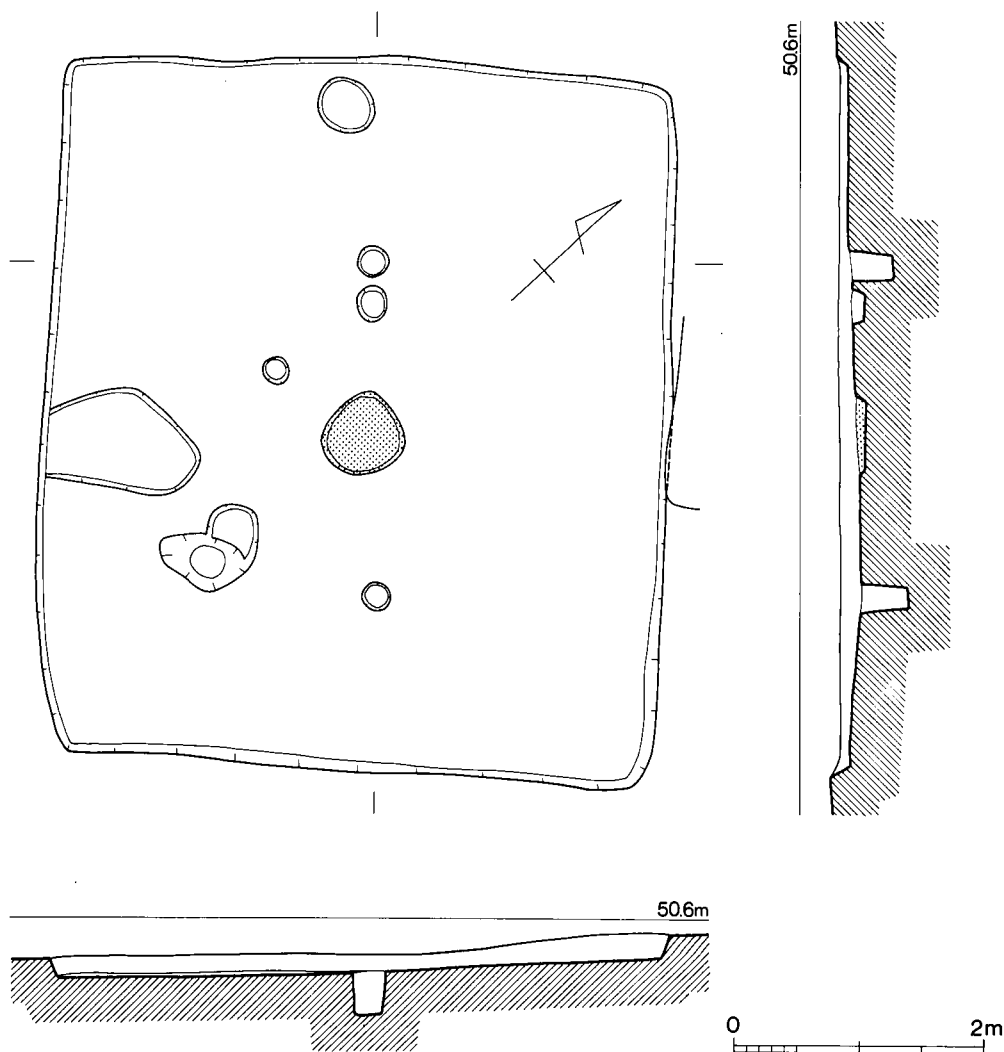
18号・23号住居跡の4mほど北東側に位置する。長軸5.05m、短軸3.7m、床面積18.69m²を測る隅丸長方形の住居跡である。主柱穴は2本でいずれも2段掘りされている。北西側は上端径53cm・下端径17cm・深さ29cm、南東側は上端径46cm・下端径15cm・深さ34cmで、心心距離は223cmである。主軸の方位はN-34°-Wをとる。炉は床面中央の穴と考えられるが、焼土は検出できなかった。南西辺中央に炭化米を穂積みの状態で残存しているのを検出した。さらにこの両側約50cm、幅約20cmの壁に沿った範囲で炭化米が認められた。取り上げ後、床面の精査をしたが土壌は検出できない。壁は高さ10～20cmが残っている。

第15号住居跡 (第30図、図版14)

調査区南側の南側に位置する。上部は開墾したために深く削平され、南西隅はない。さらに南辺、南東隅は17号住居跡に切られている。残る辺の長さは、東辺3.15m、北辺4.35m、西辺



第27図 11・18号住居跡実測図 (1/60)

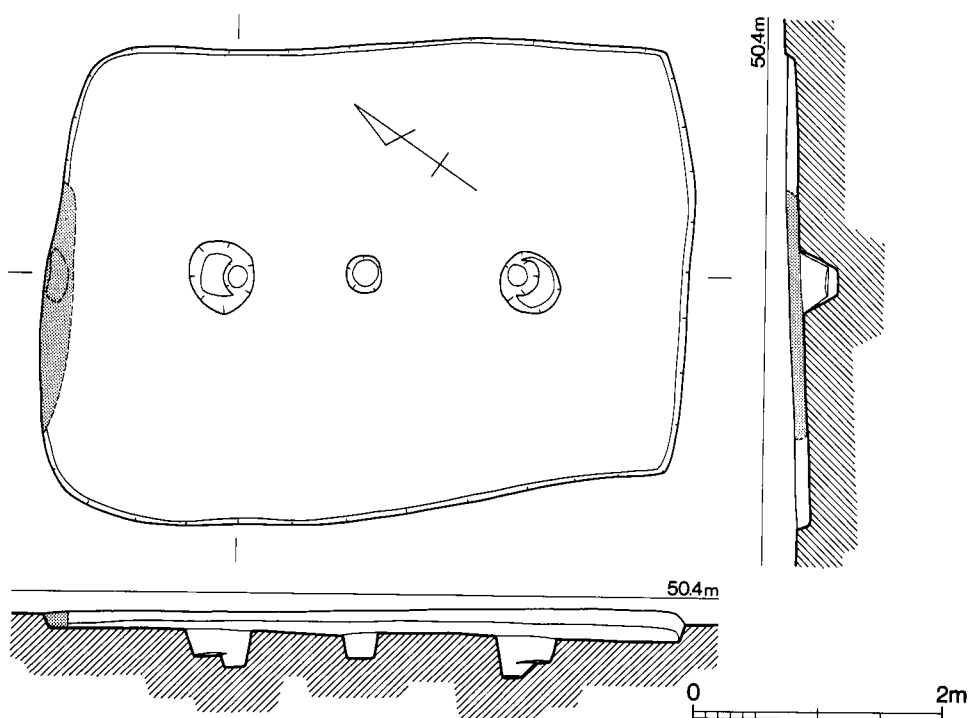


第28図 12号住居跡実測図 (1/60)

約 6 m である。これから推定して長軸は 7 m 前後の南北に長い住居跡であろう。主柱穴は南側の床面がないため何本柱になるか不明であるが、床面には、深さ 24cm のものが 1 本、33cm のものが 2 本、60cm のもの 2 本がある。壁は高さ 5 ～ 10cm が遺存していた。

第16号住居跡 (第31図、図版14)

調査区の南東側隅で検出した住居跡で、17号住居より新しい。上部はかなり削平を受け、南隅は残存しない。長軸 6.8m、短軸 5.88m の長方形のプランで床面積は約 39.98 m^2 を測る。主柱穴は 2 本で、北西側は上端径 1 m ・ 下端径 26cm ・ 深さ 77cm、南東側は上端径 74cm ・ 下端径



第29図 14号住居跡実測図 (1/60)

22cm・深さ50cmで、それらの心心距離は312cmである。主軸の方位はN-46°-Wをとる。炉は床面中央に設けられている。南西辺中央には不整長方形の土壌がある。東隅には床面よりわずかに高いベッド状遺構がある。また北西辺に沿って幅約60cmの溝状の落ち込みと、多くの穴が存在するが性格は不明である。

第17号住居跡 (第32図、図版14)

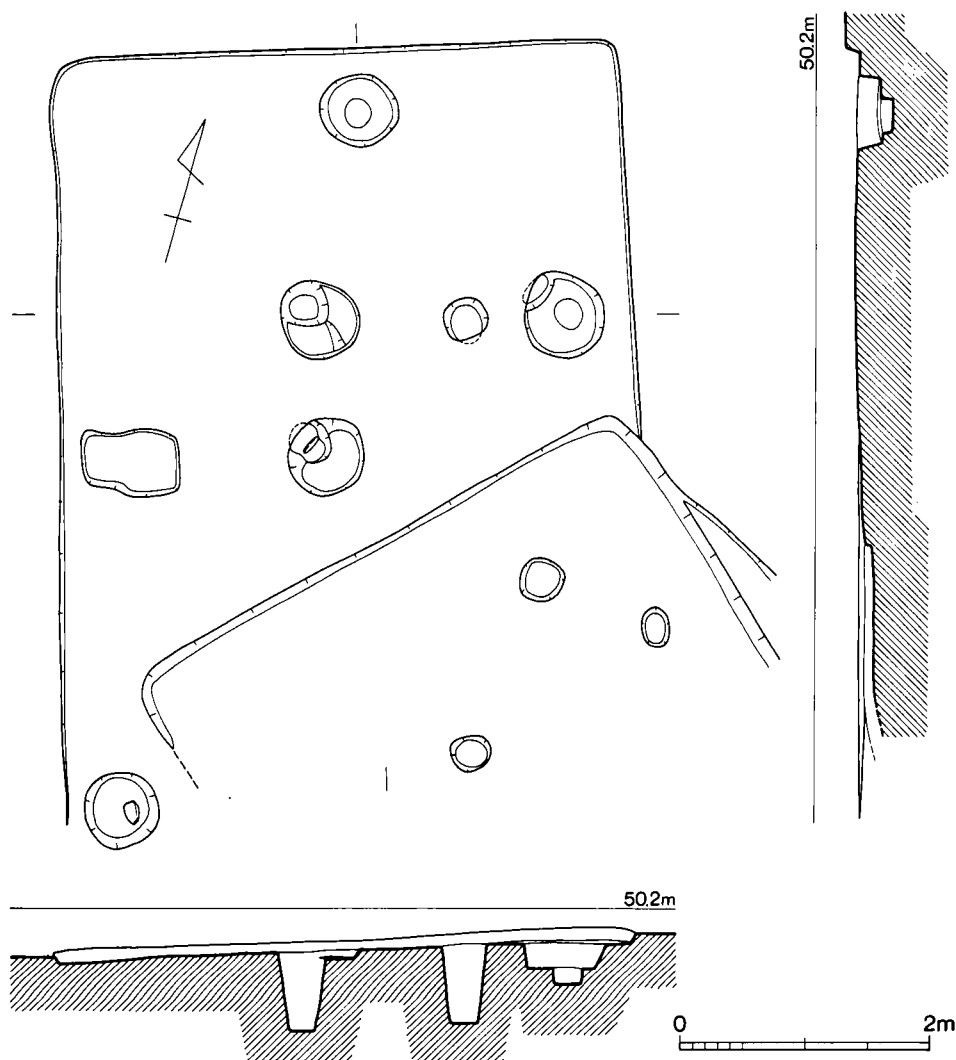
15号・16号と切り合う住居跡で15号より新しく、16号より古い。上部の削平と16号によって大半が破壊されている。北隅と西隅により短軸は4.25mを測る。支柱穴・炉跡等は不明である。

第18号住居跡 (第27図、図版14)

調査区の中央に位置する。西辺・南辺は開墾のため削平されている。南辺の一部は23号住居にも切られている。残存する北辺は長さ3.95m、東辺は長さ3mを測る。支柱穴は2本ある。この柱穴から考えて、主軸長は約4.5mほどの長方形を呈する住居と推定される。炉は中央やや南よりに設けられている。壁は高さ21~38cmが遺存していた。

第19号住居跡 (第20図、図版11)

住居跡北西側を3号住居跡に切られた、長方形の住居跡である。詳細は不明であるが、長軸約6m、短軸約5mの規模と考えられる。支柱穴及び炉は検出できなかった。北西辺には幅約1mを測るベッド状遺構が削り出されているが長さ等は不明である、床面からの高さは約10cm



第30図 15号住居跡実測図 (1/60)

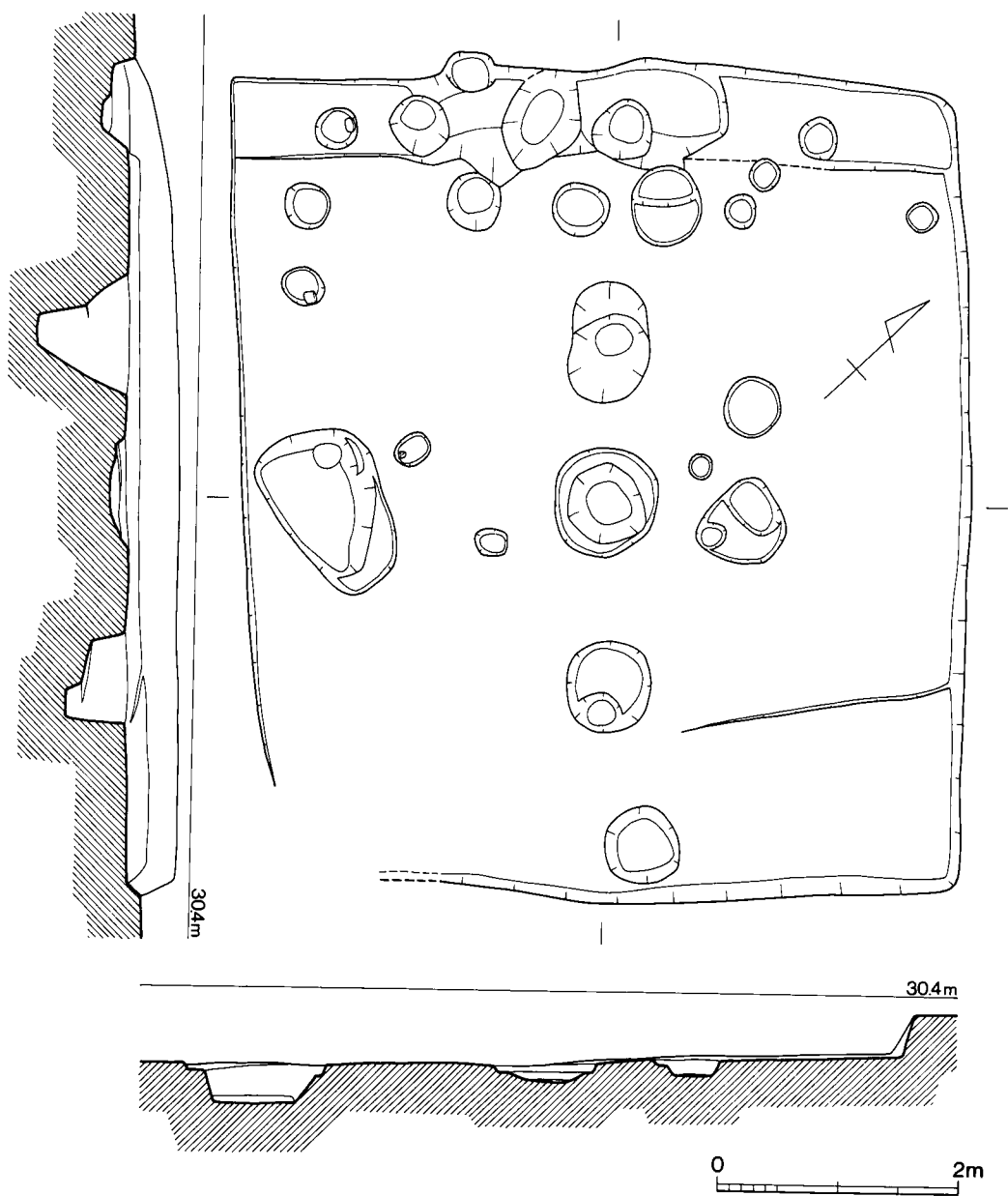
で、北西壁とは、幅約20cm、深さ5cm前後の溝によって画されている。

第20号住居跡

1号住居の南側、調査区の南西隅で検出したが北辺と、西辺・東辺一部の輪郭をつかんだだけで詳細は不明である。北辺の長さは約4mを測る。

第21号住居跡

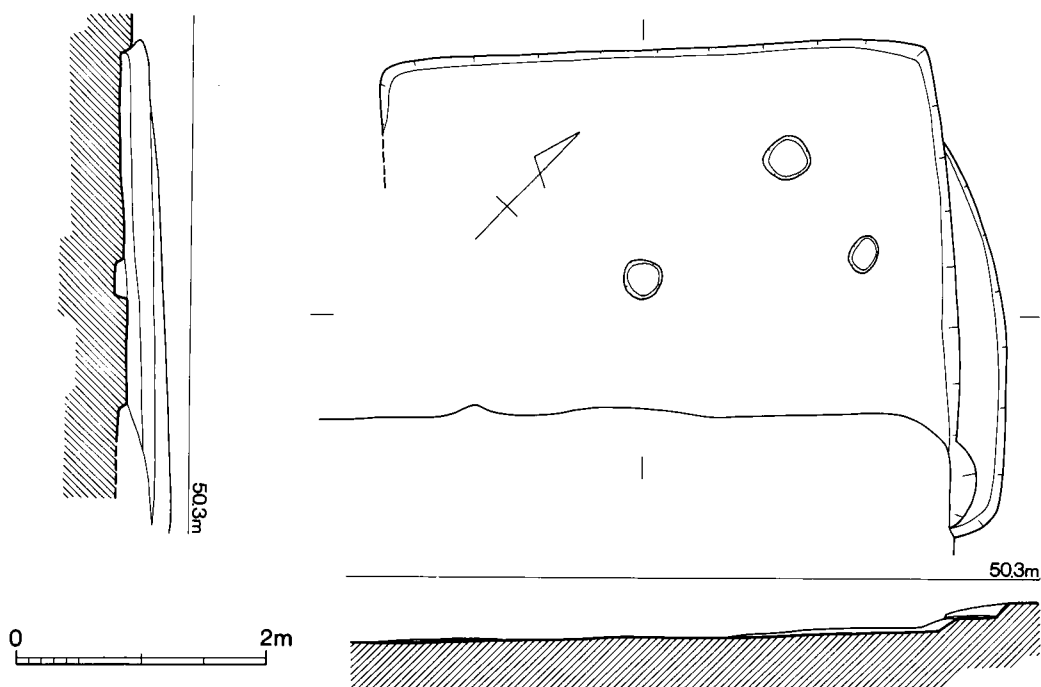
調査区の北端で方形の輪郭を検出したが、上部削平と開墾による攪乱のため詳細は不明である。住居の規模は4.4×4.2mほどと推定できる。



第31図 16号住居跡実測図 (1/60)

第22号住居跡

調査区西端で検出したが、削平のため西隅の一部を残すのみで詳細は不明である。



第32図 17号住居跡実測図 (1/60)

第23号住居跡 (第33図、図版14)

調査区中央やや南西よりで検出した住居跡で18号より新しい。西辺・南西隅・北西隅は開墾のため削平されている。北辺は南辺と対応せず外側へややひろがる。あるいは床面で確認した屋内小溝の線が住居の北辺かもしれない。主柱穴は2本で、東側は径21cm、深さ45cm、西側は径32cm、深さ50cm、心点距離は228cmを測る。床は隅丸長方形で深さ約10cmである。南辺中央には壁に接して1.1mの方形の土壇が掘り込まれている。西辺隅には張り出し部がある。壁高は西辺で約30cmを残す。

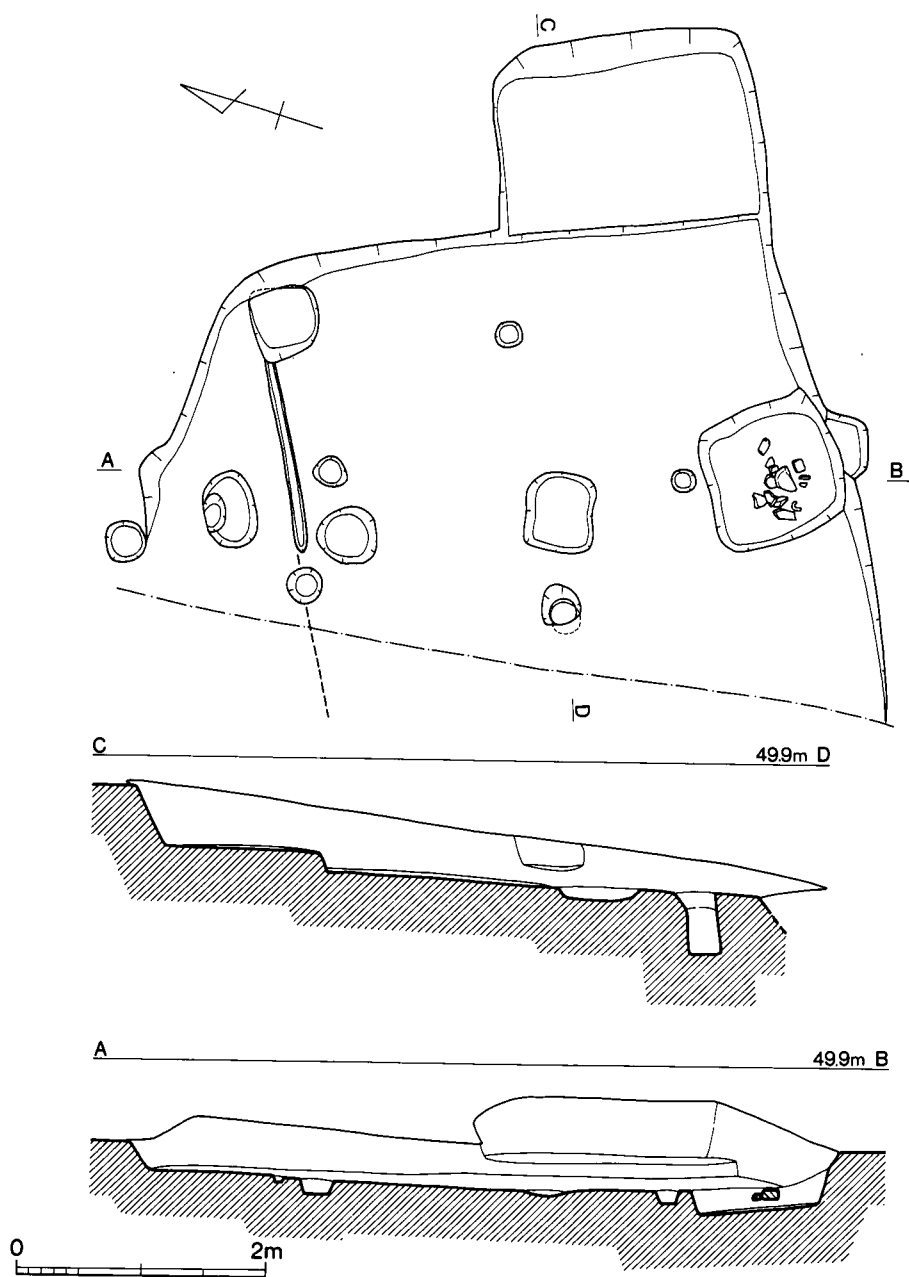
(2) 土壇墓

1号土壇墓 (第34図)

3号住居跡西側から検出した土壇墓で、隅丸長方形のプランを呈する。内法は長さ215cm、北側幅65cm、南側幅52cm、中央幅70cm、深さは中央で44cmを測る。主軸方位は、N-19.5°-Wをとる。壁は斜めに立上がる。出土遺物はない。

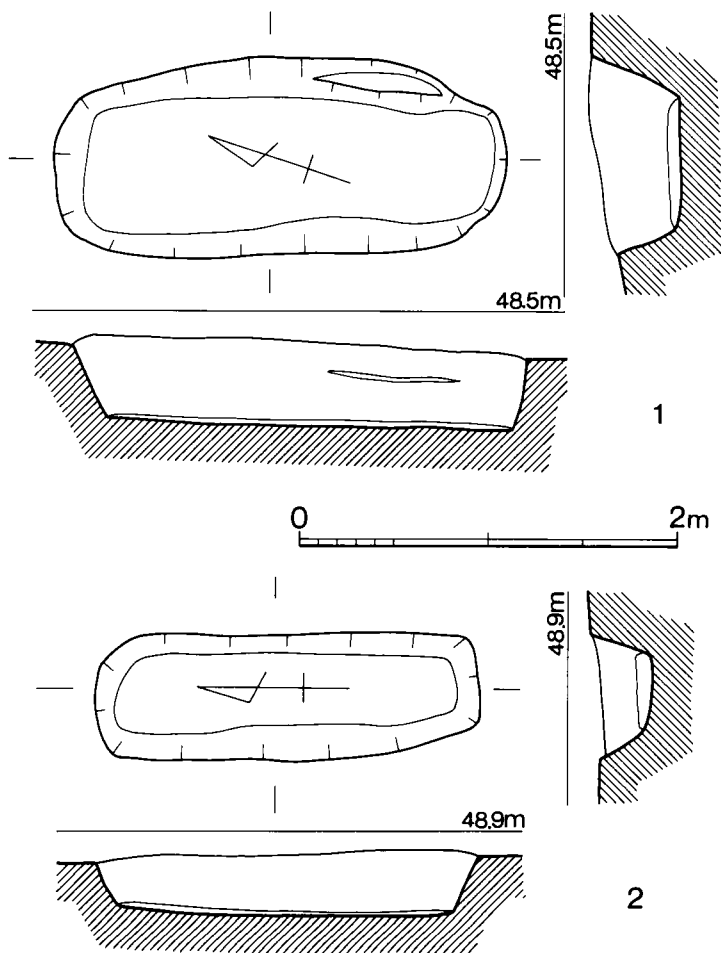
2号土壇墓 (第34図)

4号住居跡床西から検出した隅丸長方形のプラン呈する土壇である。4号住居との新旧関係は明確ではない。内法は180cm、北側幅42cm、南側幅28cm、中央幅30cm、深さは中央で32cmを



第33図 23号住居跡実測図 (1/60)

測る。1号と同様に壁は斜めに立ち上がる。出土遺物、その他の痕跡はみられない。



第34図 1・2号土墳墓実測図(1/40)

遺物

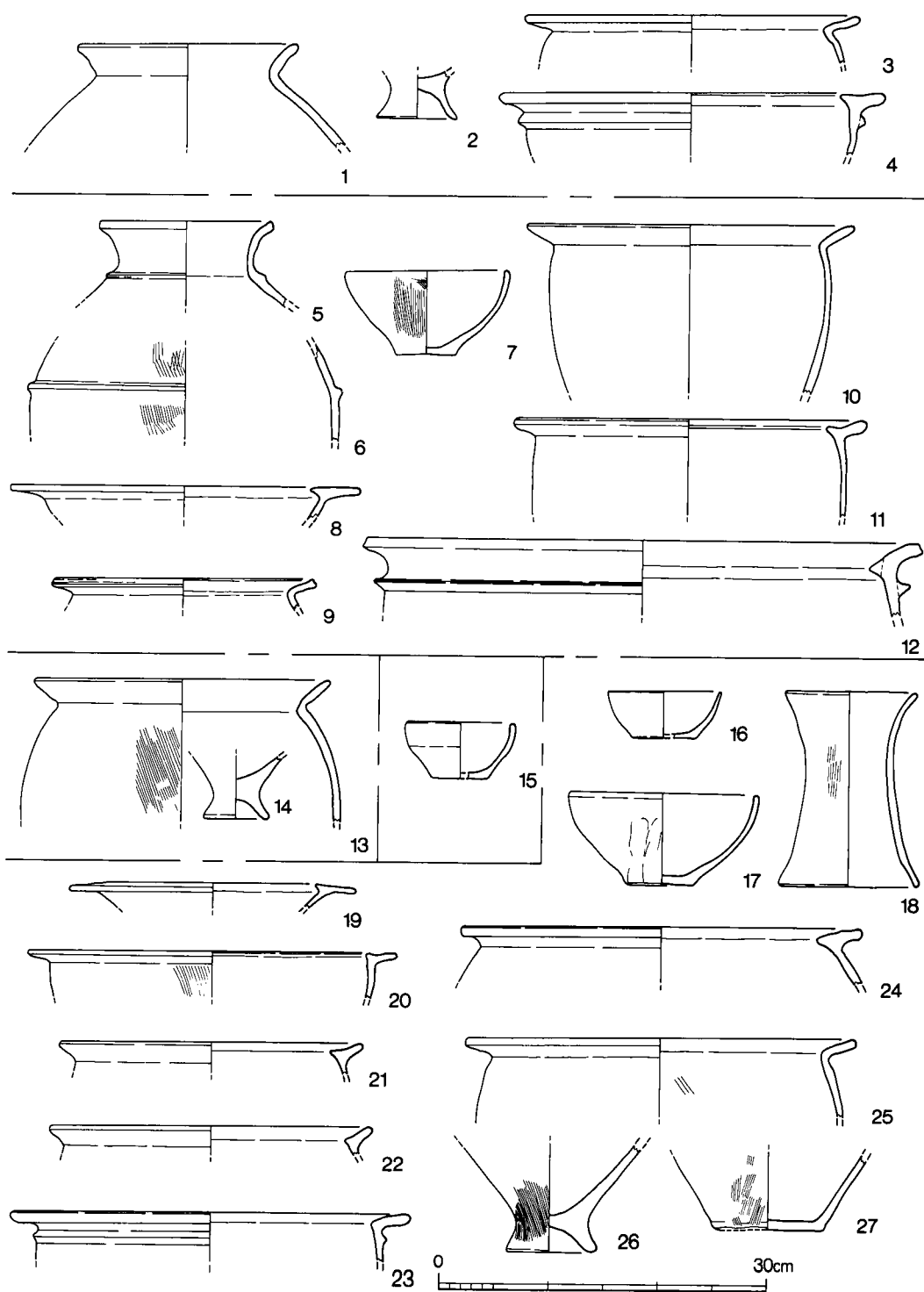
土器

1号住居跡出土土器(第35図1～4)

いずれも埋土中からの出土で、1は器壁は厚く、口縁端部がわずかに外反する。肩部以下はヘラ磨きされる。2は底部で外側にふんばる。3、4は甕の口縁で、3は逆L字状口縁を呈し口縁下に1条の三角凸帯を貼付する。4はく字口縁を呈す。

2号住居跡出土土器(第35図5～12、図版16)

5・6は埋土中から出土した壺片である。7は鉢で平底で体部は丸みを持ち、口縁端部は内



第35図 三船山遺跡1～5号住居跡出土土器実測図(1/6)

側へ傾く。口径14.5cm、底径5.5cm、高さ7.6cmを測る。8は高杯で口縁部は平坦である。内外面ともナデ調整。9・10はく字状口縁を呈する甕である。10は口縁から体部にかけて黒色～黒褐色の部分がみられる。11はわずかに内に低く傾斜する逆し字状の口縁で、12は内傾する口縁直下に凸帯を付す。5～12のいずれも器壁が荒れ調整は不明瞭である。

3号住居跡出土土器（第35図13・14）

13はく字状口縁を呈する甕で復元口径は27cmである。体部には斜行のハケ目もみられるが全体に不明瞭。14は底部で端部は丸く仕上げられる。調整は不明。

4、6、24号住居跡出土土器（第35・36図）

15は復元口径9.8cm、径5.2cm、器高5.1cmを測る平底の鉢で体部は薄く口縁部は厚く仕上げる。28～33は6号・24号の埋土中の出土である。28は、壺で斜めに立上がり外傾して内面に貼り出しをもつ口縁を呈する。肩部に三角凸帯を1条巡らす。32は口縁下に凸帯を持ち、内外面丹塗りを施す。33はく字状口縁で、口縁ヨコナデ、他はナデ調整される。

5号住居跡出土土器（第35図16～27、図版16）

16・17は鉢で、17は内外面ともにナデ調整され、外面一部に口縁から底部にかけて黒色の部分がある。18は器台で器壁は薄く仕上げられ、外面の1部にハケ目の痕跡がある。20は逆し字状の口縁部を呈する。調整は内面ヨコナデ、外面は目があらいハケ目が残る。21～25は甕の口縁部片で、21・22は床面からの出土で口縁の内傾度が強い。23は口縁下に凸帯をもつ。ヨコナデ調整され、内外面に丹塗りを施す。26・27は底部片で、26は外面に細いハケ目が残る。外面の一部と底部は黒色を呈する。

7号住居跡出土土器（第36図）

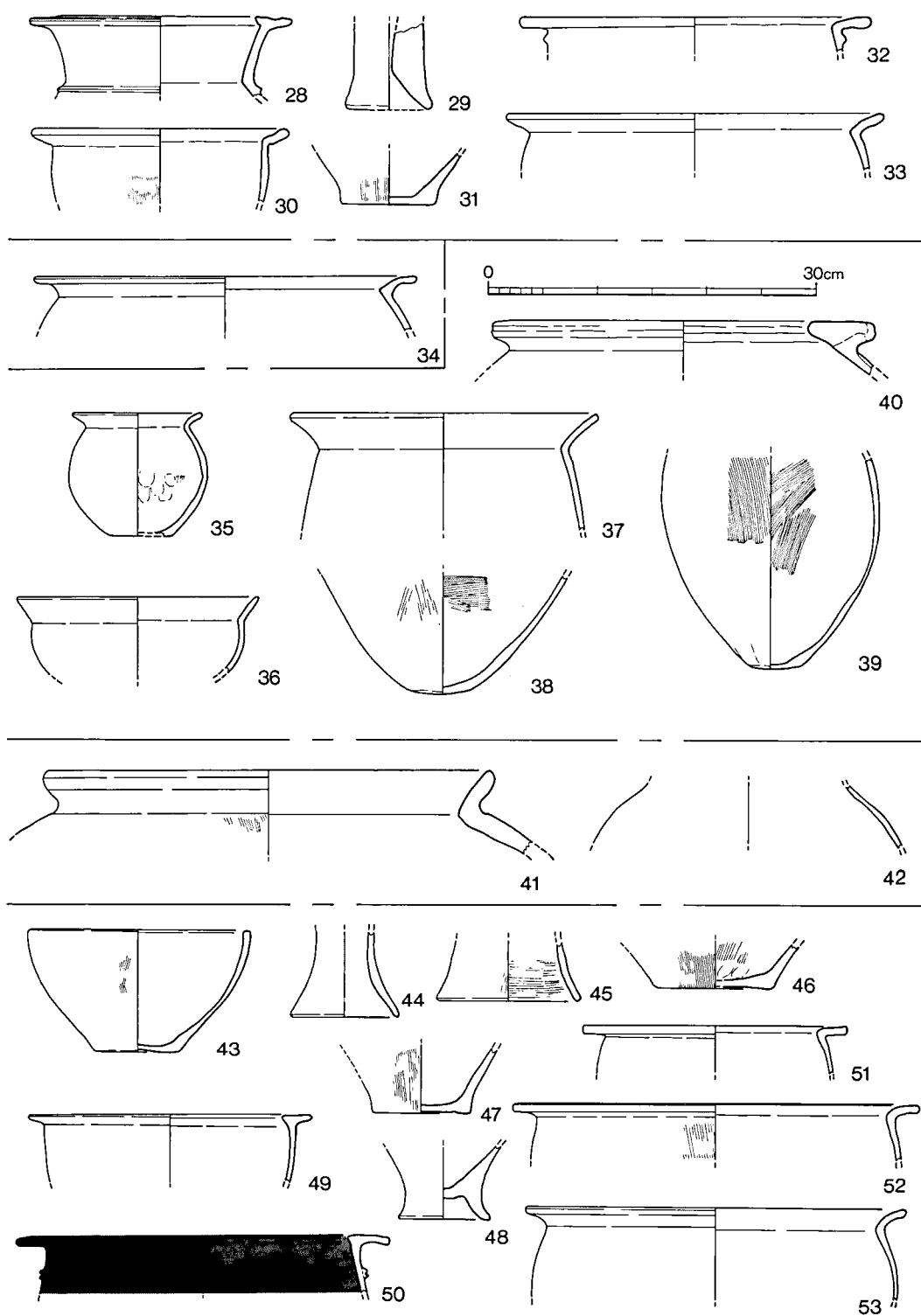
34は端部は外反し、内側の屈折部が鋭くく字状の口縁である。

8号住居跡出土土器（第36図35～39、図版16・17）

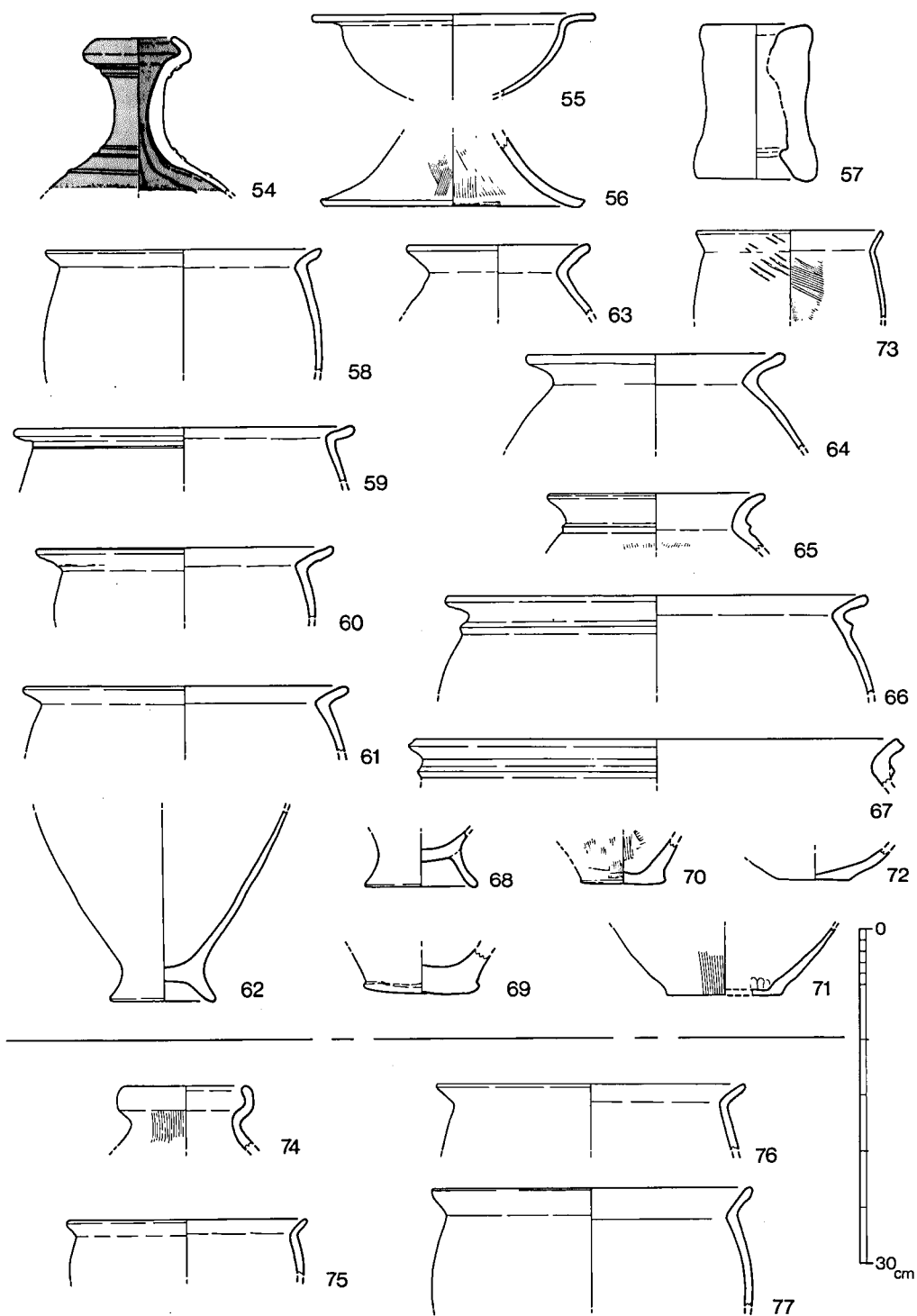
35は小型の甕で口径12cm、器高11.2cm。口縁部は外反する。外面は磨滅のため調整は不明。内面は部分的に指押え、一部にハケ目が残る。36は口縁部がく字状を呈する鉢である。37は内面屈折部に鋭く稜が入るく字状口縁をもつ。38・39はレンズ状の底部をもつ。38は内面はヨコハケ、外面は工具使用によるナデと考えられる。39は胴部上位外面はタテハケ、下位はナデ調整。内面上位はハケナデされている。37～39はピット内からの出土。40は復元口径35cmを測る甕の口縁で全体に丸味をもつ型態のものである。

9号住居跡出土土器（第37図54～71、図版16）

54は袋状口縁をもつ壺である、頸部に2条、肩部に3条の口唇状凸帯をめぐらす。頸部の器肉は厚く、肩部から胴部にかけて薄く仕上げられる。器壁は荒れて不明瞭であるが内外面に部分的に丹が残る。頸部から肩部の内面にはしぼり痕がくっきり見える。下層からの出土。55・56は高杯である。56の脚裾部は外面ハケ目、端部はヨコナデ、内面はハケ目、端部は横方向の



第36図 三船山遺跡 6・7・8・10・11号住居跡出土土器実測図 (1/6)



第37図 三船山遺跡9・12号住居跡出土土器実測図(1/6)

ハケ目調整。57は支脚、外面はナデているが、凹凸が著しい。器高14cm。58～61はく字状の口縁部である。いずれも下層出土。62は上げ底の底部である。器面荒れひどく調整不明。下層ピット上の出土。65～67は頸部に凸帯をもつ。68～72は底部片である。68は上げ底。69は乾燥時の圧痕が著しい。68～70は下層から出土。73は復元口径16.6cmを測る小型の甕で甘いし字状の口縁をもつ。外面には口縁から胴部までタタキ痕が残る。内面は頸部以下がナナメのハケ目が残る。口縁部内面及び端部は調整不明、ピット内からの出土。

10号住居跡出土土器（第36図41・42）

41は器肉が厚い壺の口縁部で復元口径は40cmを測る。全体に器面の荒れがひどく調整不明。42は壺の肩部片で薄く仕上げられている。

11号住居跡出土土器（第36図43～53、図版16）

43は鉢で口径20.4cm、底径8cm、器高11.4cmを測る、口縁端部は平坦に仕上げられている。胴部の器肉は薄い。底部はやや上げ底気味である。49はT字状を残す口縁。50は口縁下に凸帯をもつ。内面に部分的に丹が残る。51は逆し字状の口縁で、52・53は口縁が外反しく字状を呈する。43・44・45・49・50・53は住居跡のピットからの出土である。

12号住居跡出土土器（第37図74～77）

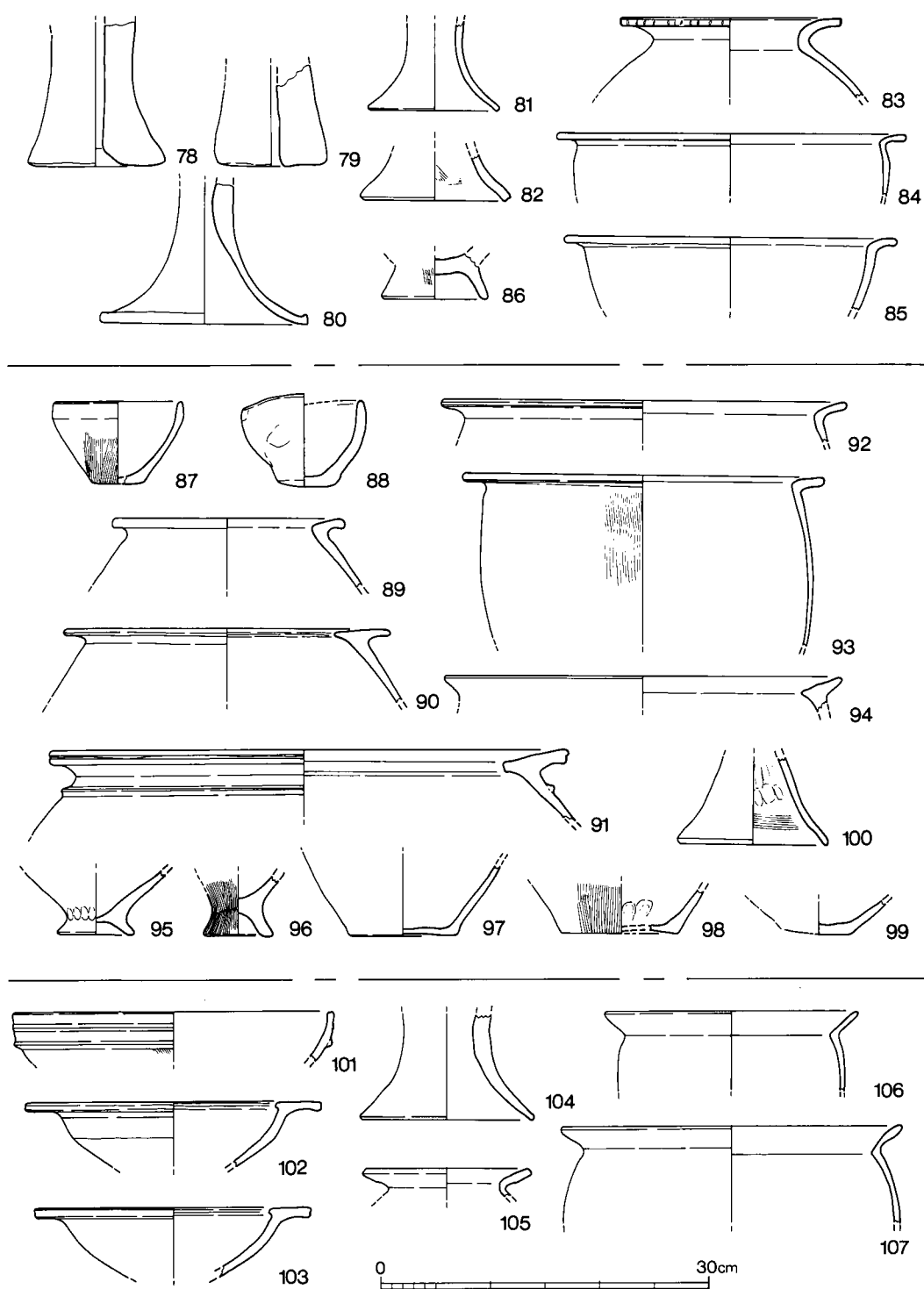
74は口縁反転部で稜をもたない袋状口縁の壺である。頸部外面はタテハケ、他は不明。75～77はく字状口縁の甕である。器壁の荒れがひどく調整は不明である。いずれも埋土中の出土。

17号住居跡出土土器（第38図78～85、図版17）

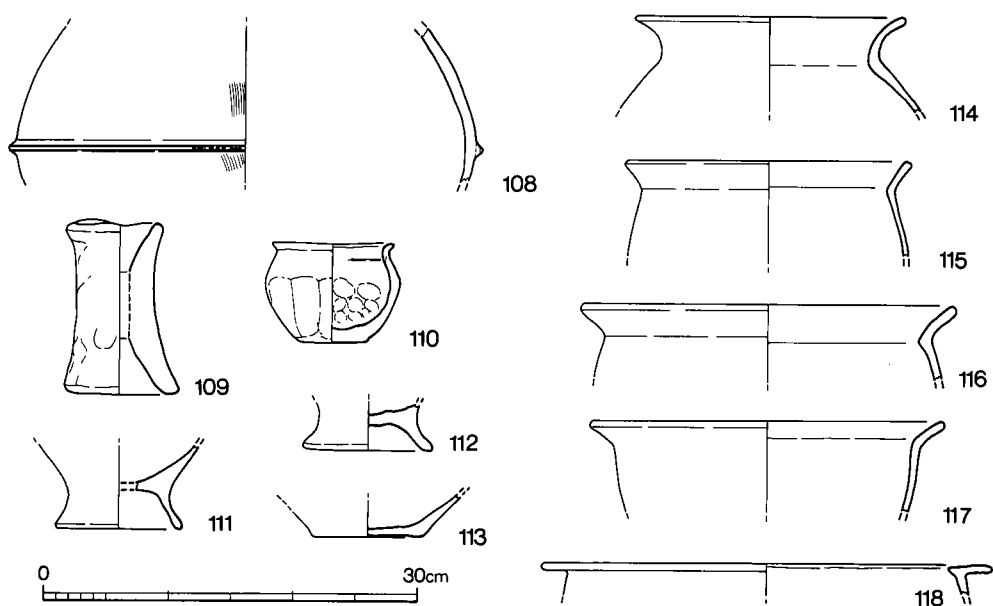
78・79は支脚である。78は復元底径12.5cm、16・17号住居埋土中出土。79は底径10.2cm、16号住居ピット内出土。80は高杯脚部、復元底径19cm、16号埋土中出土。83は大きく外反する口縁をもち端部に刻目を施す。器壁は荒れて調整は不明瞭であるが内外面に部分的に丹が残る。84は甕の口縁部、85は鉢の口縁部である。器壁は荒れているため調整は不明瞭。83～85は埋土中の出土。

18号住居跡出土土器（第38図87～99、図版17）

87は直口平底で体部は斜めに直線的である。体部から底部にかけタテハケが残る。他は器面が荒れているため調整不明瞭。88は手づくねでつくられた小形土器で、器肉も厚くいびつである。89～91は胴部が丸味をもつ甕の口縁部で、91は口縁下に凸帯をもつ。調整は不明瞭。90は床面からの出土。92～94は甕の口縁部である。93は逆し字状の口縁はヨコナデ、外面には一部ハケ目を残す。他は不明瞭。床面北側ピット出土。95は底部片で上げ底である。くびれに指頭痕が残る。96は甕の底部で外面にはタケハケ目調整、他はヨコナデ。床面ピット出土。97は床面出土の平底。99はレンズ状の底部で、内面は指頭痕がある。ナデ調整。100は高杯の脚部片である。



第38图 三船山遺跡16・17・18・22号住居跡出土土器実測図 (1/6)



第39図 三船山遺跡23号住居跡出土土器実測図（1/6）

22号住居跡出土土器（第38図101～107）

22号住居は攪乱を受け輪郭線をつかんだだけであるが、埋土中から数点の土器が出土した。101は直口の口縁部片で端部は平坦におさめられる。口縁下には2条の凸帯がめぐる。102・103は高杯の杯部片である。口縁上面は平坦である。104は脚部片。105・106・107は甕の口縁部片である。いずれも器壁が荒れて調整不明。

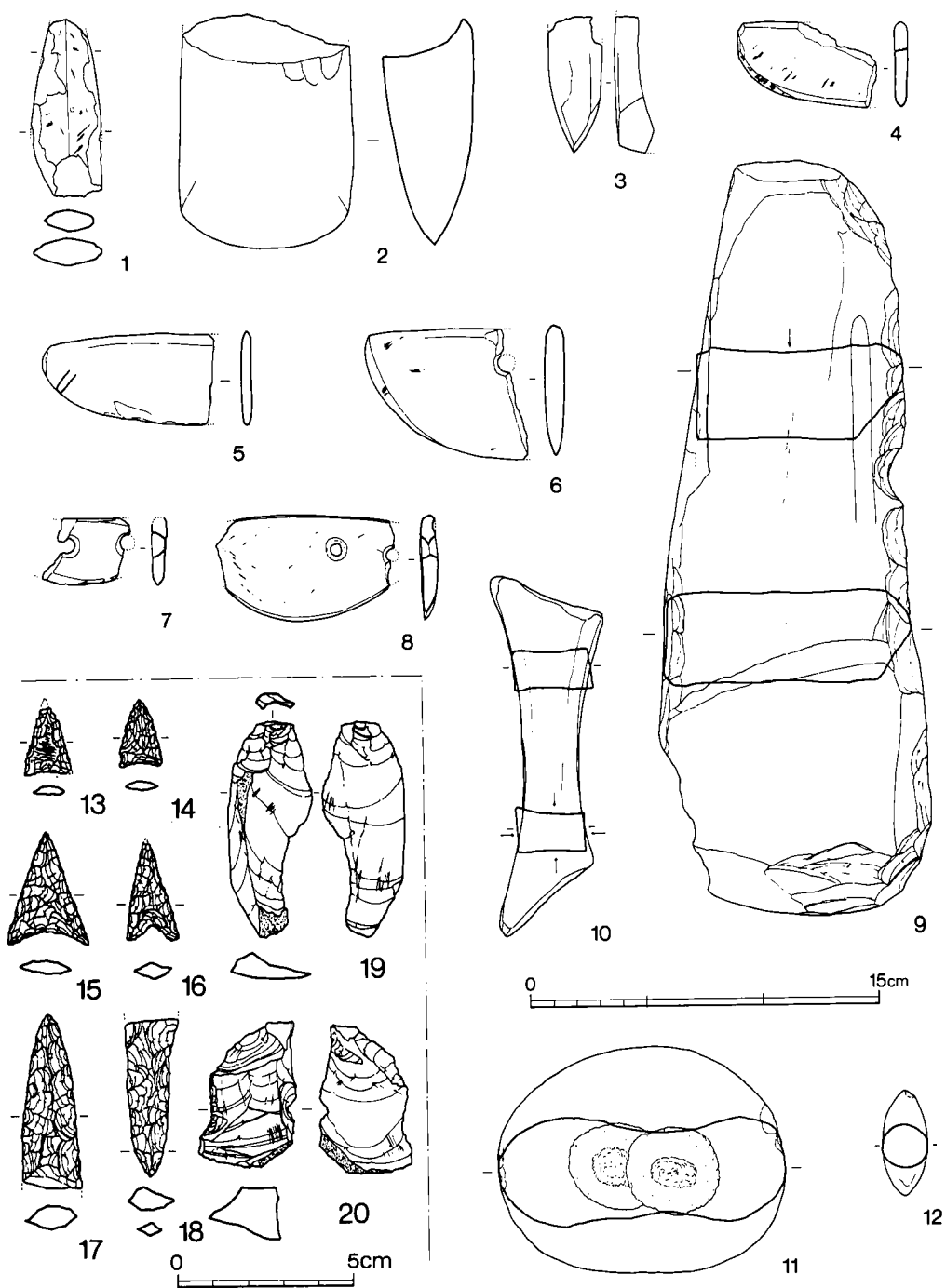
23号住居跡出土土器（第39図108～118、図版17）

108は壺の胴部片で最大径に1条の刻目凸帯をもつ。全体に器壁が荒れ調整は不明瞭だが、外面には部分的にハケ目が残る。109は支脚で、口径7.7cm、底径9.2cm、器高13.8cmを測る、ナデ調整されるが凹凸が多い。110は手つぐねでつくられ短い外反する口縁部をもつ小形土器である。ナデ調整され、内面には指頭痕が残る。111・112は上げ底の底部片である。ともに調整不明瞭。113は平底。114は外反する口縁部片で口径21.7cmを測る。115・116・117はく字状の口縁部である。いずれも調整不明瞭。118は逆し字状を呈す口縁部片である。（池辺元明）

石器・土製品

1号住居跡出土石器（第40図17・19）

17は安山岩製の柳葉形尖頭器で、中央部から基部を欠く。残存長5.1cm、最大幅1.7cmを測り、断面は凸レンズ状になる。18号住居跡埋土中出土の尖頭器よりも、丁寧な調整を施している。19は漆黒の黒曜石製の縦長剝片で、端部に一部自然面を残す。全長7.2cm、最大幅2.4cm。鋭利



第40図 石器・土製品実測図 (1/3・1/2)

な縁辺には刃こぼれが観察される。この両者の資料は、住居跡に伴うものではなく、混入品であろう。

4号住居跡出土石器（第40図4）

住居跡の上層より出土した石庖丁片である。刃部はやや鈍いが、丁寧な研磨を施す。左側辺は欠損後に再度調整・研磨している。厚さ6mmで輝緑凝灰岩製。

5号住居跡出土土製品（第40図12）

ラグビーボール状を呈す投弾状土製品で、長4.6cm、径2cm。灰黄褐色を呈し、若干磨減している。

8号住居跡出土石器（第40図5・13）

5は背縁を持たない扁平な石庖丁片で、左側辺は刃部が形成されていない。あるいは、上、下逆になり、直線刃に近い石庖丁なのかもしれない。最大厚5mmで、泥岩質頁岩製。13は二等辺三角形に近い半磨製石鏃で、先端部を欠く。安山岩の横長剝片を素材にし、周辺を除いて磨いている。残存長2cm。他に安山岩製の打製石鏃が出土している。

9号住居跡出土石器（第40図9・14）

9は赤色を帯びた片岩系の大型砥石で、一面の研砥面を有す。全長32.5cm、厚さ4cm。重さ2.28kg研砥面は上部の19cmほどで、右側に幅1cm前後の溝状の凹部を有す。住居跡内No9ピット内出土。14は凹基無茎式の打製石鏃の完形品。調整は荒い。長さ1.9cm、幅1.2cm、厚さ0.3cm、重さ0.6gを測る。安山岩製で、No1ピット内出土。

11号住居跡出土石器（第40図6・7・11）

6は外湾刃の石庖丁片で、幅5.7cm、厚さ0.8cmと大型品。淡灰青色の凝灰岩製で、埋土中より出土。7は身幅2.8cmと狭い外湾刃の石庖丁片で、孔は片側より穿っている。頁岩製で埋土中より出土。他にも小破片1が出土している。11は両面に凹部を有す凹石で、片側（実測図側）は2穴に近い。長径12.3cm、短径9.9cmの長円形の玄武岩で、最大厚5.2cm、重さ0.9kg。

12号住居跡出土石器（第40図1）

石剣の切先部に近い破片であるが、大部分を破損している。中央部に鑄が走るが、断面は丸味を帯びている。頁岩製で埋土中より出土。

15号住居跡出土石器（第40図2）

床面出土の玄武岩製の蛤刃石斧の刃部破片。刃部に対して扁平な体部を有す。残存長10.1cm、刃部幅7.2cm、厚さ3.9cmを測る。

16号住居跡出土石器（第40図3）

磨製石斧の刃部から側縁片。全体に研磨を丁寧に施す。輝緑岩製。

18号住居跡出土石器（第40図18）

安山岩製の尖頭器の基部破片。17に比べて荒い調整を施す。残存長4.6cm、厚さ0.65cm。

19号住居跡出土石器（第40図15）

凹基無茎式の石鏃で大型の完形品。長さ3.2cm、幅2.3cm、厚さ0.36cm、重さ1.6gを測る。安山岩製。

20号住居跡出土石器（第40図16）

床面より出土した凹基無茎式の石鏃で、片脚と先端部を欠損する。全体に細身であるが、断面は厚く、平行四辺形に近い。長さ2.6cm、幅1.55cm、重さ1.5gで安山岩製。

22号住居跡出土石器（第40図10・20）

10は白色を呈す泥岩質の石材を素材とした仕上砥で、研砥面4を有す。長15.5cm、厚さ2cm。20は黒曜石の幅広の縦長剝片を素材としたスクレーパー、部厚な剝片の一縁に加工を施し刃部を形成する。長さ4.3cm、幅2.7cm、厚さ1.5cm。

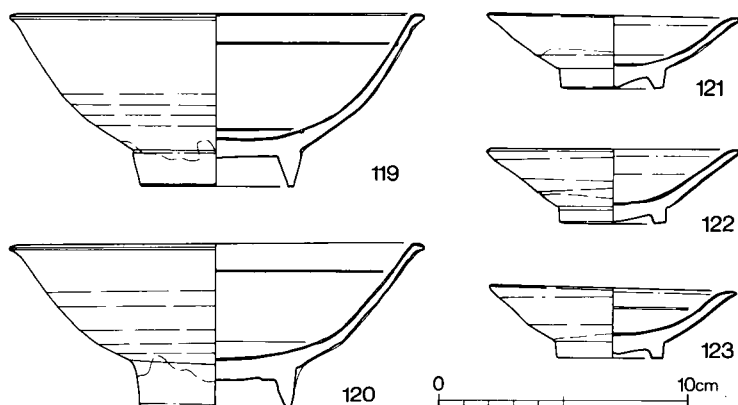
表採石器（第40図8）

外弯刃の石庖丁だが、半月形ではなく、最大幅が片側に寄り、その反対側の狭い方に2孔を穿っている。断面は片面に丸味を有し、刃部は片刃に近い。最大幅4.6cmで砂岩製。10号住居跡付近の表土層より出土。
(木下 修)

白 磁（第41図、図版15）

碗2個体と皿3個体が17号住居跡の東北隅近くで、これを切るピットから一括出土した。遺物の出土した箇所の近くは攪乱されており、遺構の性格はつかめない。

碗（119・120） 口縁部をわずかに外反させており、端部上面を平坦にしている。高台は比較的細く、長立した丈の長いものである。体部内面の上位に細い沈線が1条巡り、見込みの部分には沈線状の段をもつ。外面は広範



第41図 三船山遺跡出土白磁実測図（1/3）

囲にヘラ削り調整を施している。釉は高台以下を除く内外面に薄くかけられており、一部高台まで釉垂れしている。釉は明るい灰色を呈している。胎土は乳白色を呈していて良好である。内外面とも器面には小さな気泡が入っていて釉の調子は不良である。無文のものである。120は焼きひずみを生じている。119は口径16.7cm、底径6.2cm、器高6.9cmである。120は口径16.6cm、底径6.1cm、器高6.7cmである。

皿(121~123) 口縁部は丸くつくられており、高台はやや丈の高いものである。外体部上半部と内面部に施釉しているが、121は見込み部分の釉を輪状にカキ取っている。釉は黄味を帯びた灰色を呈している。口径は10.0cm~10.2cm、底径4.2cm~4.3cm、器高2.8~3.0cmである。

白磁碗は大宰府出土輸入陶磁器の形式分類のV-4・a類である。皿はⅢ類に属する。年代については前述の編年によると11世紀中葉から12世紀初頭に比定される。(川述昭人)

註1 横田賢次郎・森田勉 「大宰府出土の輸入中国陶磁器について」 九州歴史資料館研究論集4
1978

4. お わ り に

三船山遺跡は瀬高町本吉字三船に所在し、女山神籠石の南方約500mの位置にある。遺跡の標高は48~50mで、西側水田面との比高は約40mを測る。周囲には先土器~歴史時代にかけての遺跡や散布地が存在している。当遺跡も先土器時代の散布地として知られていた。遺跡全体のひろがりには約6000㎡程になると考えられるが、開墾による攪乱で明確ではない。このため最も残存状況がよいと考えられる西南側の緩斜面約2000㎡について発掘調査を実施した。

検出した遺構は住居跡24・土坑2・ピット群である。

住居跡は、長方形プランを呈し、長軸線上に2本の主柱穴をもち、その中央に炉跡があり、焼土・炭化物が検出された。その他の付属施設は、ベッド状遺構が、7号・9号・19号住居跡に見られた。また2号・7号・8号・10号住居跡は焼土が床面全体にひろがり、炭化材も検出され焼失住居と考えられる。14号住居跡の北西壁に沿って炭化米が多数出土している。

住居跡の時期は出土土器から、弥生中期後半から後期前半のものと考えられる。8号住居跡出土の土器は器面が荒れて調整が不明であるが後期後半に属すると考えられるものが含まれる。

住居跡群は水田面から約40mもある高所に存在するがこの周辺には、現在のところ集落が営まれる様な緩斜面はなく、この集落の存在は大きい。



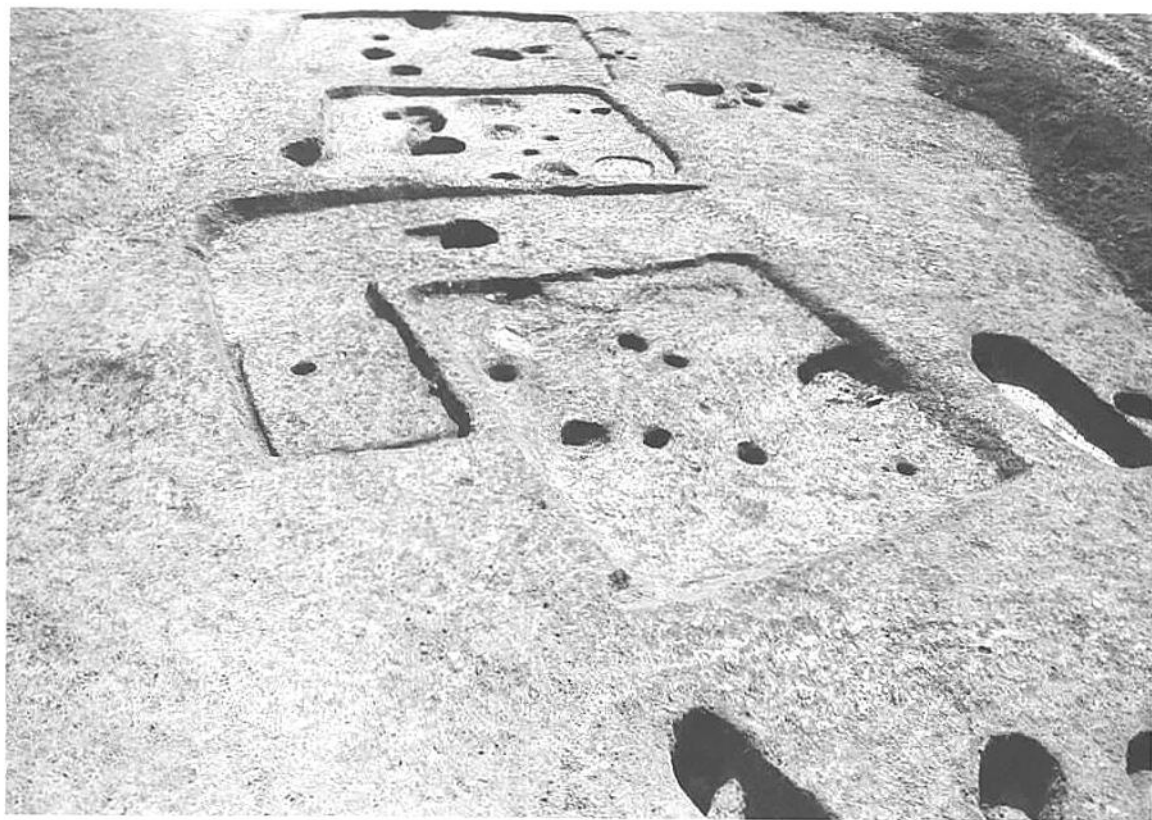
三船山遺跡全景（南から）



三船山遺跡近景（南から）



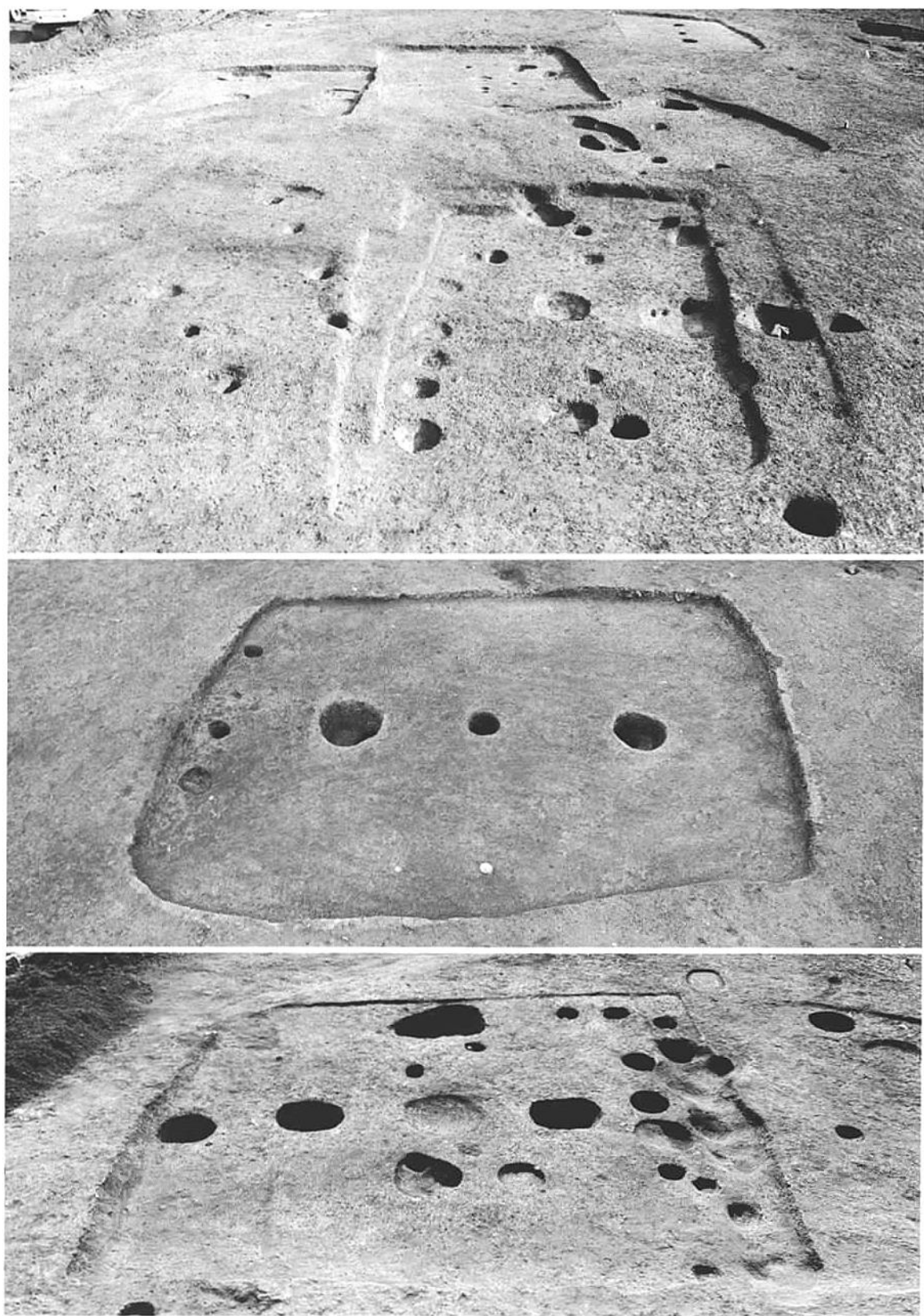
三船山遺跡近景（東から）



1・2・3・19号住居跡



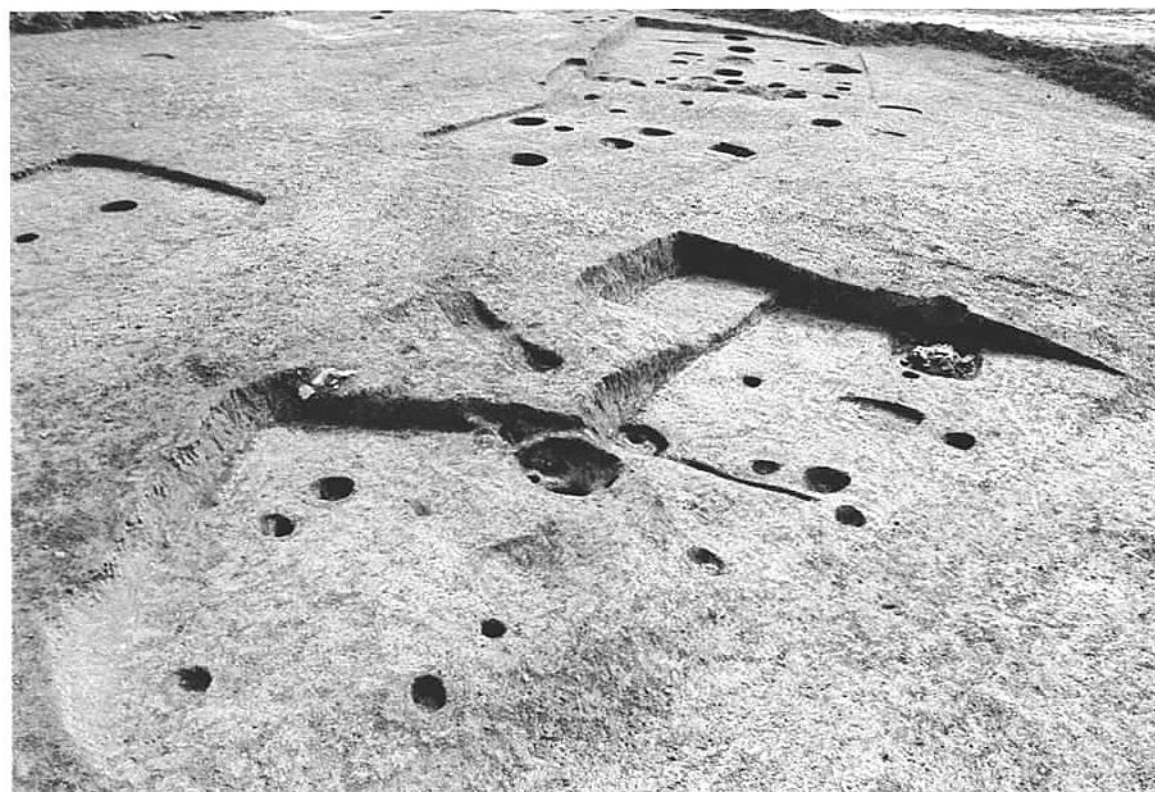
上 6・7号住居跡、中 5号住居跡、下 9～13号住居跡



上 9～14号住居跡、中 14号住居跡、下 16号住居跡



15～17号住居跡（左から15、17、16号）



18・23号住居跡（手前から18、23号）



三船山遺跡近景（東から）



119



120



121



122



123

三船山遺跡出土白磁碗、皿



7



17



18



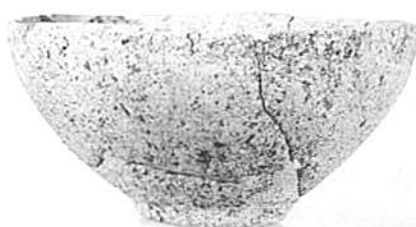
26



35



39



43



54



57



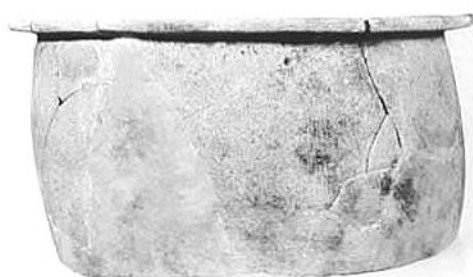
38



62



80



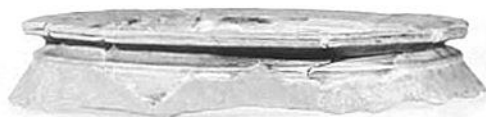
93



88



109



91



97



110

観音丸遺跡
向野古墳群
三船山遺跡
福岡県文化財調査報告書
第71集

昭和60年3月31日

発行 福岡県教育委員会
福岡市博多区東公園7番7号

印刷 瞬報社写真印刷(株)
福岡市中央区天神5丁目4番16号